

武神フクロにしたった ～僕らの川神逃走記～

ふらんすぱん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔やんちゃしてた頃に、袋叩きにしたのが武神だった。そんな彼らの逃走記

目次

虎と蛇

気づいたときには、虎の口の中

1

虎の物忘れ

16

虎の前に蛇が一匹

33

着飾った蛇に、困惑する虎 (表)

44

着飾った蛇に、困惑する虎 (裏)

60

虎と蛇の終わりに

89

間話 勤労少年

112

間話 由紀江の苦悩、みんなの苦悩

紅葉の苦悩

133

地獄から来た男達

間話 食事風景

159

再会、懐かしい場所にて

178

紅葉は夕陽に散る

196

姉弟の絆と天秤

219

初顔合わせの因縁

1

246

初顔合わせの因縁

2

263

逃走の小坊主さんと三枚のお札

1

286

逃走の小坊主さんと三枚のお札

2

308

虎と袋の中身

1

329

虎と蛇

気づいたときには、虎の口の中

「なあ、あの動画見たか？ ああ、あれだよ」

「昨日、投稿サイトにアップされてたやつだろう。笑うよなあ、おどつてる子供は何考えてるんだろうな？」

神奈川県川神市の川神学園一年C組の教室の何気ないクラスメイトの会話、これが不幸への招待状だったのだろう。

しかし、少年はそんな事とは露知らず久しぶりに戻ってきた故郷とこれから始まる高校生活に思いを巡らしつつ、母が作ってくれた弁当に舌鼓を打っていた。

「おい、アイツなんで朝のHR前に弁当広げてるんだ？」

「入学式から三日も経ってないのに、図太いよな。てかアイツ、後ろの席で刀持ったまま、独り言喋ってる女に気づいてないのか？」

弁当を食べ終わり水筒のお茶で一息つく。

少年の口から深いため息が出る。

——クラスに馴染めてない。

少年は以前に川神に住んでいたのだが、小学校高学年時に親の都合で転校、高校受験で悩み始める前にこれまた川神に戻ると父の宣告を受け、心の準備もなくこの学校に通うこととなった。

昔の顔なじみがいるかと探してみるも、ぎつと見た限り知り合いはおらず、積極的に友達作りをすることはなく現在の状況にある。

そういつた背景を無視し、孤立している大きな原因は他にあるのではと少年は考えていた。

遠巻きな視線。

はれものを扱うように、ポツカリと空いた距離。

そう、クラスメートは少年に恐れを抱いているようなのだ。

使い古された言葉で口にだすのも躊躇われるが、少年は昔、ここら辺りを根城にする不良集団の一員であった。

そのころの凄みが挙動や人相に現れているのか、彼の周りには誰も近寄ってこない。

少年としては高校生になったのだ、そういつたものとは無縁な明るい青春を送りたいのだが。

「誰か、教えてやれよ。俺？ 無理だ、見てみるよアイツ完璧にターゲットにされてるぜ。さつきからアイツに手が伸びたり引っ込んだりしてるだろ。——俺にはわかる、あ

りや、頸動脈を狙っている。なら、なおさら教えてやれって？ おまえあの手がこつちに伸びてきたら責任とれんのか！ アイツ、たしか、荒場だっけ？ 諦めるしかない。手ぐらいいは合わせてやろう」

「卒業アルバム、彼のとこだけ、空白になるんだね。可哀そうだよ」

誰か己の名を呼ばなかったか、辺りを見渡すと何人かすすり泣いている女生徒達がいる。

自分の容貌にそこまで人を威圧する要素があつたことに、内心、落ち込んでいた。

地元で評判のカリスマ理容師に、切ってもらつた散髪代は無駄な出費だつたらしい——店主の頭が草木の生えぬ不毛地帯だつたことに気づいた時点で引き返すべきだつたと溜息を付く。

●
授業の終了を告げるチャイムが鳴り、彼の周りの空白にやつと人の体温が戻つてきた。

そのことに思った以上に胸があたたかくなり、終業の鐘に感謝しつつ、教壇に立つ教師の話を聞き流す。

そして事件はこの日の昼休み、彼がやはり食堂でひとり昼食をとっているときに起きた。

——のだが、後に『第二次仮面狩り事件』と呼ばれるこれについて語るには、彼が昔、川神に住んでいた時の事も話さなければいけないだろう。

この神奈川県川神周辺には、古くから武家の家系が多く根付いている。

武術の大家、川神院を筆頭に、多くの武の才を持つ者たちが、日夜鍛錬に励み、心を鍛え、礼儀を学んでいるという特殊な土地だ。

武家の子供たちは、両親や師の教えのもとで、健やかにまっすぐと育っていくのだろう。

だが、ここで一つ問題がある。

少し考えればわかることだが、稀に一般の家庭の中にも武の才を持って生まれる子がいるということだ。

親からの手ほどきはなく、まして師というものを持たない子供が、日に日に増していく己の力に酔いしれ、増長していくのを想像するのはとても容易い。

彼もそんな子供の一人だった。

ただ、彼の場合、ほかの奴に比べ少々知恵がまわったことで、ちよつと風変わりな小学生時代をおくることになる。

その日の彼は前日に気にいらぬ上級生のズボン狩りを行ったことで、母にこつぴどく叱られ、いじけていた。

この頃、彼は他者よりも優れた自分の力を自覚し始め、天狗になる一歩手前。

自分の部屋で小学生の少ない知恵を絞り喰っていた。

わがままを通したい、しかし両親に叱られるのは避けたい。

なら、だれも己を知らないところで暴ればいいのでは。

その時の少年はそれが最良の答えだと信じて疑わなかった。

紙幣が一枚入った財布片手に、電車に乗り、繁華街などで賑わう川神駅に遠足気分であつたのだ。

その日から彼の遊び場、兼狩場は、川神駅周辺に代わる。

市内から出ると、少年の顔を知っているものではなく、やりたい放題である。

だが小賢しいことに、念には念を入れ、その当時、流行っていた筋肉男シリーズのお面を被っていた当時の自分に、成長した今でも舌を巻いてしまう。

しかし、もつと驚くことは、そんな賢い子供が彼だけではなかったということだ。不良中学生どもが集まる廃工場に、勝者の勲章としてズボンを求めていた少年は、近くの草むらで見つけた木の棒を片手に突撃する。

工場の扉を蹴破るとそこには不良どもからパンツすら取り上げた、牛男と米男の面を付けた少年達があった。

しばしの沈黙。

お互い付けている面からおおよそを察する。そして面の下、隠した素顔に笑みを浮かべ仲良く中学生いじめを開始、それ以来彼らは行動を共にすることになる。

顔も名前も知らない関係、その匿名性がかえって彼らの結束を固いものにしていった。

それに加え、一人で遊ぶよりも、大勢のほうが楽しいということもある。

そうして、彼ら三人は、川神一帯で名をあげ、高学年だけでなく、中学生すら避けて通るほどの地位に登りつめていった。

だが、同時に血気盛んな川上の子供に狙われる立場にもなった少年たちは、三人の中

の知性派、米男の提案で、当時、川神最大の小学生ギャング『大蛇』と同盟を組むことになる。

三人の小鬼が、蛇の群れに紛れる。

こうして誕生したのが、子供たちに恐怖を持って語り継がれる武闘派極悪小学生『鬼面』である。

全ての団員はお面を付けること。

そして鬼面の幹部は数字を彫ったお面を身に着け、絶対的な権力を有していた。

支配地域は川神だけではなく、七浜、松笠にまで及ぶ。

数字が若いほど上の階級であり、大蛇のリーダーでやくざの跡取り息子である蛇神が一番を、その補佐に二番、三番に米男、四番に牛男、五番には彼が、その後もずらずらと口くでもないガキどもが、力を求め、お面を付け悪童の仲間入りを果たしていった。

鬼面の活動は多岐にわたる。

傘下に入った学校の用心棒、従わない者たちに対する幹部による制裁、そして上納金を集めること、お面による匿名性でどこに潜んでいるかわからない団員達に皆は恐怖し、当時の川神の小学生は、これを暗黒時代と呼んだとか呼ばないとか。

これらの活動を当時小学生の二番と三番が提案、運営していたのだから恐れ入ってしまふ。

●
全盛期の真つただ中、そんな鬼面にも、喧嘩を売ってくる奴はいて、暇つぶしに幹部連中で遊んでやることもあった。

そんないつもと変わらない一日だった、あの日の事。

その少女はどうやって知つたのか、鬼面の集会所に単身乗り込んできた。

武術を使い、強靱な肉体を持つ、今までの雑魚とは一線を隔する存在。

しかし一対一なら兎も角、武術崩れ迄いる幹部たちには敵うこともなく、少女は何度も地べたに叩き付けられる。

彼も自慢の足を使い、虚を狙い、彼女の延髄に蹴りをいれる。

そして崩れ落ちる少女。

何の事はないいつもの日常がそこにあつた。

最初は、嘲笑だった。

しかし七度目の蹴りが延髄に、牛男が腕をへし折つた後も幽鬼の如く立ち上がる少女に、少年の喉がカラカラに乾いていく。

戦いを端で眺めている幹部には、戦っている彼らが加減して、いたぶっているようにしか見えなかつたかもしれない。

笑声の中、少年の胸中に疑念が浮かび上がる。

——こいつは、武術を取めたと豪語し、立ち向かってきては、跳ね飛ばされていった今までの雑魚とは違う。

もしやこの生き物こそが、本当の武術家なのではないか。

己はなんてものに喧嘩を売ってしまったのだろうか。

言葉にこそ出さなかったが、少年の額に流れる冷たい汗がそれを物語っていた。

所詮己達は傷つくこともなく勝利という甘い草を食んでいるだけの草食動物に過ぎず、折れた腕をいたわることもしないその少女の正体は、敗北も痛みさえ食い尽くす戦闘特化の雑食動物だったのだ。

強さというものを力だけで計ってはいけない。

それをようやく理解した彼等は、目の前で力尽き倒れていく彼女が立ち上がってこないことをただひたすらに願っていた。

「ははっ、私は負けるんだな。初めての体験だ。負けることはいいんだが、この楽しい時間が終わるのは残念だなあ」

もはや焦点の合っていない瞳。

吐いた言葉は、決して強がりではない。

少女は折れた左足を無理矢理に伸ばし、支えにして立っていた。

「しかし、お前らの付けているのって、正義の味方だろう。これだと私が悪の親玉だな。

んつ、それでもいいか。わたしがおまえらの——になつてやるよ。この借りは絶対返すからな、楽しみにしてろ。私は楽しみにしておく」

倒れこむ少女、先の発言に対する幹部の馬鹿にした声が響く。

言い訳をさせてもらえれば、この年の子供は理性というものがあまり発達しておらず、馬鹿にされたりすると素直に怒りを表現することは珍しいことではない。

そして単純な小学生である彼らの眼前には、丁度、動かなくなつた楽しい玩具が横たわっているではないか。

人並みの感性を持ち合わせていたのなら、恐怖を感じたものに、イタズラなど出来るはずがない。

が、戦つて恐怖を感じたはずの幹部数人も、『奴は倒れている、俺たち勝つた』俺たちの方が偉い！』という幼き特有の思考で彼女に近づいていく——それは当時の彼も例外ではなく嬉々として少女に向かつていった。

幹部の一人の傀儡術という協力もあつて。

その結果、『モヒカン頭で鼻にカールを突き刺した少女の無限ドジョウ掬い』という動画が世に誕生したのだ。

しかし、この出来事の後、やはり幼心にはトラウマであつたのか、それとも報復を恐れたためか、あの場にいた幹部達は徐々に抜けていく。

一番と二番を残し、他の番号もちの幹部ははすべて入れ替えられた。

この時期に少年も抜け、すぐに引越しがあり、今、川神に戻ってきたというわけだ。

●
昼休みになり、朝、弁当を食べてしまったので、食堂に行く。

その短い道中の間にも、同級生や先輩にすら避けられていたのは、きつと気のせいだと、己をうまく騙すことはできなかつた。

「まゆっち、はやく声をかけるんだ！ 同じボツチ、すぐに打ち解けられるぜ！」

「そうでしようか松風。でもこうやって後ろにびったり付いてるだけで、友達に見えたりしませんか？」

「まゆっち、背後霊に友達はできないと、オラ思う」

少年は思う、食堂につきカレーうどんを頼んだのが失敗だったに違いない

カレーの汁は服に付くと落とすことに労力がかかる、なので先程テーブルを離れた者が居たのもしかたのない事。

加えて誰も近寄ってこず、同卓につく者が居ないのも少年には一切の原因はない。

少年は、精一杯の言い訳を自分に与え、注意を、その丼の中にある黄色の液体に注ぐよう善処する。

「松風、荒場さんが泣いてませんか。カレーうどんはお嫌いだったのでしょうか？」
「いや、まゆつち。いつまで背後霊続けるつもりなんだ？ ご飯食べようや」

彼がひとりさびしくご飯を食べていると、校内放送が始まった。

スピーカーからはこの学校、いや世界でも最強クラスの女性武術家であり、学園の三年生である武神 川神百代の軽快なトークが流される。

少年は実際に百代が戦っているところを見たことがあるが、目を疑うほどのたらしめな強さを持つ女性だった。

その上、スタイルもよく、容姿も優れているという二物三物与えられた、神に愛された人。

彼もひそかに販売されているプロマイドを購入していた。

「ああ、ここでお知らせだ。昨夜ネットの動画サイトに『モヒカン頭で鼻にカールを突き刺した少女の無限ドジョウ掬い』という動画が流れたのを知っているだろう」

その動画の名前に、少年は首を傾げる。

それは、少年にとつての幼い日の思い出。

誰か元幹部の人間が流したのだろうか。

あの少女も、今はもう高校生になっているだろうことを思うと、少し気の毒だ。

「そしてこれは個人的に九鬼財閥に頼んで、わかった事なのだが、この学園のPCルームから投稿されたらしい」

流れる言葉の続きが気になり耳を傾ける。

「いやあ、ついに見付けたぞ。うん、うれしくて笑いが止まらないぞー！」

詳細は語られないが彼女のファンとして機嫌がいいのは喜ばしいことであり、少年は笑みを作る。

『わたしがおまえらの——になってやるよ』

「ああ、きつとまだわかってないんだろなあ。」

勿体ぶる彼女の言葉。

「——久しぶりだな、正義の味方。わたしはデビル將軍だ！」

「松風、荒場さんがカレーうどんを吹きました。わたしはいったいどうすれば？」

「まゆつち、いい加減、昼食とろうや」

『うわっ！ 先輩どうしたんですか？ ソースかけ過ぎですよ、それ』

『おい、相撲部の一年がいきなりテーブルに突っ込んだぞ！』

『あんた、顔が死人になってるよ。保健室行ってきな！』

『うわー。いつも冷静な委員長が泡吹いて失神してるぞ。なんか興奮してきた！』

『その変態を委員長から引き離して、大和田さん!』

というようなちよつとした事件がその日の昼休み、学園のいたるところでみられた。

虎の物忘れ

●
午後の授業、公家言葉が口癖である教師の退屈な歴史の授業は、右から左に抜けていく。

教科書を開いてはいるが、ノートは白紙のままだ。

少年の頭から昼休みの事が離れない。

まさかあの少女が川神百代だったなんて。

わかっていれば、初めて会ったあの時、お茶でもお出しして丁寧な対応ができたのに。

——混乱しているのだろう少年の頭の中、ありえない考えが浮かんでは消え、浮かんでは消える。

とにかく、己の正体は、絶対にばれてはならない。

万が一、露見すれば、この学園での未来は灰色にあるいは、真っ赤な鮮血に彩られることだろう。

——だいたい誰だ、あの映像を流したやつは。

少年の胸中、見知らぬ犯人に罵倒を叩きつける。

その見知らぬ誰かのせいで自分は、死ぬか喰われるか、といった状況なのに。

沈んでいく思考の中、妙案が浮かぶ。

百代が血眼になって探しているのは、少年ではなく、あの動画の配信者なのだ。

それならば、一刻も早く、そいつを見つけ出し、牙を研いでいる武神に生贄としてさ

さげれば、こちらまで被害が及ぶことは無いだろう。

己に対してとても都合の良い見解。

授業が終わり、放課後を告げる鐘が鳴ると同時に、カバンにすべて教科書類を詰め

込み足早に廊下に出る。

「まゆっち、今だ。ボッチ野郎を下校に誘うんだ。グズグズするな！」

「よ、よ、よろしければ、一緒に」

女性の声が聞こえた気がする。

誰か己に声を掛けてくれたのだろうか、後ろを振り向くが誰もいない

——寂しさのあまり、幻聴まで聞こえるようになってしまった。

「まゆっち、なぜ死角に回り込む」

「ち、ちがうんです、松風。荒場さんが急いでおられるようなので」

「なので？」

「先に御用事がお済みになった後の方が、お誘いするのに不都合がないかと」

「思うから、放課後もストーリーカーを続けるんだな？」

「——ハイ」

大体、恐怖の対象である少年に声を掛けてくれる、奇特な方がいるはずもない。

それは、心理的なものではなく、物理的に証明されている。

放課後だというのに、少年がいるために、誰も通ろうとしない教室入口によって。

悲しくなるので、少年はそれ以上の思考を止める。



仕切り直し、B館の三階にあるPCルームに足を向ける。

熟考する必要もなく少し考えれば、わかることだ。

あの放送によると、動画は学園のPCルームから送られたと百代は言っていた。

つまり、そこに何らかの痕跡、あわよくば、犯人につながる物があるかもしれない

いうことだ。

いや、そんな曖昧なものでは無く、少年には確信に近いものがあつた。

なぜなら、教室に近づくと一歩一歩、その中に何か大きなものの存在を感じ取っていたからだ。

それを掴み取るため、教室のドアを開け放つ。

「ん、おい、大和！ また来たぞ。これで何人目だ？」

教壇の上で胡坐をかいている武神がいた。

——少しではなく、よく考えれば、誰よりも犯人を捜している百代がここにいるのは当然のことである。

背中に流れる冷たい汗が少年には不快でたまらなかつた。

● 教室に入り、百代と目があつた時は生きた心地がしなかつたが、幸いな事に、少年以外にも、多くの野次馬がいたことで、目をつけられることはなかつた。

安堵の吐息が漏れる。

野次馬の者と目が合い微笑むと、向こうも微笑み返してくれる。

彼としては、武神に対する隠れ蓑として利用している立場だけに少し心苦しい。

しかし、こんなに大勢の人間だけではなく、百代本人がいては、動画の犯人探しは難しい。

今日のところはおとなしく帰った方がいいのではないか。

少年が迷っていると、教室の前方、教壇から手をたたく音が聞こえ、皆がそちらに注目する。

たしか、百代に大和と呼ばれていた連れの男だ。

細い体にあまり男っぽくない顔が、特徴といえば特徴だろうか。

皆が百代の横の彼に目を向ける。

「一応聞いておくけど、皆、なんで、授業が終わってすぐ、この教室に来たのかな？」

少年の顔が、引きつる。

——こんな時こそ平静を装わなければ。

気持ちを落ち着け、行動する。

「まゆつち、なぜ彼らは、みんな空を見ているんだろう。UFOでも見つけたんだろうか？」

「さ、さあ？」

そして次にとるべき行動を決まっていた。

「わあ、すごいです！ わたし、こんな合奏きいたことありません」

「揃って口笛を吹いて、彼らはどこにむかっているんだろうなあ？」

なぜか己のものに重なる形で響くそれを不可解に思うが、それより先に前方から発せられる寒気が、少年の思考を凍結させる。

「すこし、黙れ！」

百代は、合奏を止めるように手を一叩きした。

その一言で、教室に静寂が戻る。

百代が静かに苛立っているのがわかり、誰も口を開けない。

少年だけではなく追従する視線が問題の解決を武神の知己である大和に向ける。

「姉さん、少し落ち着いて。えつとじゃあ、手前にいるあなたから聞いてもいいですか？」

武神をなだめ、大和が主導権を握った。

そのおかげで少しの猶予ができた。

その時間を使つて、なんとか言い訳をひねり出そうと少年は頭をひねる。

どうしたのだろう。

最初に指名された男子学生が何も喋らぬまま立ち尽くしている。

もちろん、少年以外の人間は言い訳する必要はないはずなのだ。

一年の廊下では見たことがないので、上級生なのだろう。

白であるはずの男。

なのに男は、先ほどから流れる汗を、ハンカチで何度もぬぐって、動揺しているように見えてしまう。

そうすると、獲物を見付けた猛禽類の瞳で、百代がにじり寄っていく。

自分のせいで彼が疑われているのだろうか、罪悪感が胸を突く——のだが、代わりに捕まってくれるのなら、それはそれとしておくことにした。

男の肩を百代が掴み、少年が掌を合わせ、感謝をささげようとしたとき

「——大ファンのAV女優、腐乱研子の期間限定、時間限定の特別配信を見ようと思ったんだよ、悪いか！」

最初にか細い声で、続きは大きくなっていった。

さすがにこんなカミングアウトに何も言えないのか、

「あ、ああ、それは邪魔をしたな。——えっと、確か学園のPCには、プロテクトがかかっているからそういうのは、視れないと思うんだが」

弱気な声。

百代も女性だからなのか、ああ、わかったと言って出ていく彼を呆然と見送ることし
かできなかった。

肩で風を切つて出て行つた漢の背中が見送られる。

少年はその背中にひらめく。

「——実は僕もA Vを見に来たのですが、そういうことなら帰らせてもらいます。では」
少年は胸を張り、堂々とドアに向かう。

先ほどの漢の鏡である正直者な上級生には、悪いが彼の言い訳を利用させてもらう。

「松風、これは、見ないふりをして帰りましょう。」

「おう、ナイスまゆっち。その年で母の優しさを使えるなんて、成長したな」

「私もA Vを見に来ました！」

「ええっ！ 委員長、女の子でしょ！ 何言っているの？」

「う、うるさいですよ、趣味は人それぞれです、いけませんか？ なら私は先に帰らせて

もらいます。付き合ってくれてありがとう、大和田さん」

「待つてよ、置いていかないでよ〜」

少年が去り、次に女生徒が数人教室を出る。

その後も続々と続くAVを見るために来たただけだと主張が続く。

そうになると、さすがの武神も気持ち悪いものを見る目で道を譲る事しかできなかつた。



「ところで、姉さん。最初に聞いておくべきだったんだけど、探してる奴って、どんな顔をしているの?」

疲れた様子の大和が尋ねたこと廊下で足が止まる。

——それは重要である。

話によっては、逃げ回る必要がなくなるかもしれない。大体、メインで戦っていたのは、四番と幹部数人だけだ。

少年は、不意を突いて延髄に蹴りを数度入れただけなのだ。

そんな程度のもので恨まれてたら、死んだ後、天国に行く人間が減少し生まれ変わりの循環に支障をきたす。

——眉毛だって、片方しか剃ってないのに。

それは復讐を試みるには十分な理由ではあるのだが、少年は不満を募らせていた。

もし、これで、恨みを買っているのが己だけなら、どんな手を使つても、奴らを道連れにしなれば、気が済まない。

そう思い、教室前の廊下で止まった。

開いたドアから中をそつと覗き、百代の次の言葉に耳を澄ませる。

「皆さん、パントマイムのように固まっていますが、如何なさったのでしょうか？」

「松風、あなたまで固まる必要はありませんよ」

百代が中空を見ながら、指で何かを書き出すような仕草をする。

「顔は、あれだ。仮面をしていたからわからないが。特徴はだな、そう、風のように速い足を持っていた」

「うわあ〜、松風、荒場さんが倒れ」

「それと、私でも敵わないほどの腕力で」

「てないぞまゆつち。なんとか持ち直したぞ」

「髪型はきれいな黒のロングヘアー」

最初は自分の事かと思ひ、肝を冷やしたのだが、一体、誰の事を言っているのだろう。

「ああ、当時小学生なのに高校生よりも大柄で豪華な体と、浅黒い肌、短めのスカート、きれいな足が印象的だったな」

「姉さん、それ、本当に実在するの？ どんな小学生さ！」

そのような気色の悪い子供が存在するのだろうか。

「ああ、当時小学生だった私と、一対一で互角の戦いを繰り広げた猛者だ」
なおも否定の念が少年の中にもたげるが、一対一という言葉に閃くものがあつた。

「皆さん、何かいいことでもあつたのでしょうか？　小さくガッツポーズをして」
「まゆつちも空気を読んで、しとけ」

唸り、必死に昔の記憶を引っ張り出そうとする百代を見て疑念は確信に変わる
そういえば、あの時の戦いの終盤、百代は目の焦点が合っていなかったのではないだ
ろか。

少年の延髄への蹴りが効いたのか、百代の記憶が正しくインプットされてない。
当時の自分に喝采の声を上げそうになるもグツと飲み込む。

百代の脳内で、戦った鬼面の幹部の特徴を混在し記憶しているのではないか。
これならば、特に警戒する必要もなかったなど、少年は笑みをこぼす。

結局、その日はそのまま、帰宅。

家で、母が作ってくれた季節外れの鍋物を食べ、悩みの種がなくなつたと、居間で寛
いでいた。

そしてよく考えたら、動画を上げた犯人であり、恐らく元幹部が締め上げられれば、百代が戦った相手の誤解が解け、きつと鬼面の幹部である自分に矛先が向かうであろうことに気がついた。



そのことに気づいて数日後、何とかしようと、犯人捜しをするも、さしたる手がかりもなく、そのために寝不足になり、いつもの登校時間よりだいぶ遅れてしまった金曜の朝の事だった。

少年が元幹部であることはばれておらず、もちろんボロを出すような、目立つことはしないと誓う。

だが、あの川神百代が、自分のことを探し回り始めている。
それは、あまり心穏やかなものではなかった。

気が重い少年は自慢の俊足で、多馬川沿いの道を、登校するために疾走していた。

——のだが、右を見れば、白馬に乗った金髪の外国人が、左を見れば、メイド服を着た者が引く人力車が並走している。

——道を間違えてしまったか。

首を傾げ、見回すが、いつもの通学路である。

では、何を間違えたのだろうか。

しばし、考えるも何も浮かばず、馬の外国人を見るも、さつきから『ジャパニーズ飛脚だな、後で写真を撮ってもいいか？ 父様に送るんだ』などと大きな声で話しかけてくる。

制服を着ていることから、川神学園の生徒なのだろうが。

あの学校、馬での登校を許可していたのかと、生徒手帳を確認しようとするが、ポケットにはなく、家に忘れてしまっていた。

それならばと、反対側を見る。

金のジャケットを着た男性が、『そこな庶民、なかなかやるではないか』と引かれる人力車の上で言っているのだが、それ以上に、こちらを凝視、睨みつけていくメイドが気になる。

追い抜いてしまったことが、彼女のプライドをいたく傷つけてしまったのだろうかと推察する。

ついでに異様な集団から抜け出すために速度を落とそうとすると、少年以外の人に聞

こえないほどの小声で、『おい、アタシはお情けで勝つなんていう、みつともないことされたら、オマエの学園生活、灰色にすつぞ!』と脅してくる。

だから少年は、ここから逃げ出せずに、並んだまま、学園に向かっているのだ。道路を走り続けると、やがて学園が見えてきた。

始業の鐘はとつくに鳴っているので、もう急ぐ理由は無いのだが、この集団から抜けるため、一速あげ、城門に似せて作られた校門を抜ける。

だが、思惑も無視し、両隣には速度を上げしつかり付いてきてる人たち。

学園の教室の窓から生徒たちの視線が集まっていた。

馬と人力車と走る人の組み合わせ。

凶らずも、少年は目立ってしまう。

目立つことも悪いが、何より、全校生徒に、このメイド服と、馬と、人力車に乗って高らかに笑い続ける変人と、同類に見られているのは、我慢できない。

同じような状況に追い込まれば、みなそう思うだろう。

そんな奴を見たら、少年は三年間笑いものにする。

だから今すぐに大声で弁解したい。
だが、変人たちはそうではないらしい。

彼等は先ほどから全校生徒に向けて高々と名乗りを上げている。

馬に乗って走るといふ奇行後も、誇らしげにしている少女。

額に傷跡がある、どうやら学園の関係者だったらしい金ジャケットの男。

その両名とも、弾けるような笑顔だった。

それを見た少年の顔は、引きつっていた。

「どうした、貴殿の番だぞ。しかし、自分の馬より速いなんて、さすがサムライの国だな」
クリスと名乗った金の髪にリボンの少女。

変人でもこれだけ美人なひとに褒められると気分がいいなど、数少ない良かった探しを始める少年。

そのため聞き流していたのだが、聞き間違いにして、そのまま校舎に足を進めることにする。

「どうした庶民、車を引いていたとしてもあずみに勝ったのだ。誇るがいい」

そういつて、何かを促していくるのは、人力車の上で腕を組んでいる男。

少年は無視し登校しようとするのだが、メイドがワイシャツの襟を掴み離してくれな

い。

「早くしろ、じゃないと英雄さまが、登校できないだろうが」

少年には理解できないルールがあるようだった。

人殺しのような眼で睨まれ、納得したわけでないが、少年はしぶしぶ前に出た。

羞恥にまみれた顔で、全校生徒に向かつての自己紹介を強制された。

この日、川神学園に『荒場^{あらば}紅葉^{もみじ}』の名が本人の意思とは関係なく知られる事になる。

なお、その日から、クラスメートの彼に対する扱いが少し優しくなったことに、彼は気づいていない。

虎の前に蛇が一匹

グラウンドでの赤面物の自己紹介を終え、少年は足早に教室へ。

戸を開けると、予想していた嘲笑はなく、憐憫の混ざったものと、暖かい物があることに少しひるんでしまう。

HRはすでに終わっており、お喋りをしているものや、一限目の用意をしているものがあちこち見られ、その日常の光景が紅葉の思考に平穏を取り戻してくれた。

紅葉は気を取り直し、自分の席に着き、鞆から弁当を取出し、机に広げる。

遅刻したので、早くしないと授業中も、食事の時間が続いてしまう。

其れはさすがに拙いと、ふたを開け、手を合わせたところ。

『今より第一グラウンドにて、決闘が行われます。見学希望者は……』

どうやら、急いで食べる必要はなくなったようだ。

空いた時間、人の波に逆らって缶の緑茶を買うため自動販売機を目指す。



教室の窓から、決闘の様子が見えるので、唐揚げを摘まみながら、眺めていた。

この川神学園にある特別な制度、決闘システム。

決闘と言っても昔のサムライよろしく命のやりとりをするわけではない。

学校公認で今から楽しく喧嘩しませんか？ という物騒極まりないものである。

何かとゆとりな現代教育に真っ向から喧嘩を売っているシステムである。

どうでもいいことを考えながら、眺めていると、今朝、話をした黄金色の髪にリボンの先輩がもう一人を伴い中央に出てきた。

紅葉は感嘆する。

まだ目立ち足りない、恥をかき足りないみたいだ。

凶太く肝の座った彼女から目を離し、何の気もなく、校門の方を見ると二台の黒のベントツが止まっているのが見えた。

曇りガラスになっていたので、誰が乗っているかは確認できない。

登校時間はとくに過ぎていくに、誰も降りてこないことから、生徒の物ではないのだろう、少し気になった。

歓声上がる。

車から目を外し、そちらの方を見ると、どうやらクリスが勝利したらしい。

馬での登校途中に、名を呼ぶ事を許可された身としては、変な縁のある先輩が勝った

のは、ほんの少しだけ嬉しかったりもする。

空になった弁当のふたを閉じ、もう一度グラウンドに目をやる。

そして決闘の見学者達が、教室に戻ろうとするときそれは起こった。

先程のベンツから、三人の黒スーツの人間が降りてきて、真っ直ぐ第二グラウンドに向かつていった。

それに校舎の方からも歩いてくる者が現れ、合流し、彼等の後ろに付き従う。

紅葉はその先頭を歩く男の容姿に、見覚えがあつたのだが、気にするべきはそこではない。

驚くべきは、男の後ろに続く者共が、皆、昔流行った漫画のお面を付けていることだった。

『耳の穴カツポじって、よく聞けい!! ワシが今日よりこの学園最強となる鬼面のボスの蛇神さまだ!!』

後ろに控えるお面達が用意したスピーカーから、鬼面幹部の中で一番頭が悪かった男の声が学園に響き渡る。

紅葉は目頭を押さえ、眼前の光景を疑う。

何度確認しようと、間違えようがなく、そこに居たのは古い昔なじみのはた迷惑な男

の顔だった。

●
グラウンドが喧騒に包まれる。

どうやら、鬼面の恐怖は、少年がこの町を去った後も続いていたらしい。

どよめく生徒たちの中から、先ほど決闘していた二人が飛び出した。

なにやら、文句を言っているようだが、ここからは何を言っているのかわからない。

『お前等の戦いは、見せてもらったが、あの程度の腕で、ワシに戦いを挑むのは無謀だ、解れい!!』

紅葉の記憶が確かならば、蛇神は言うほど強くなかったはずだ。

クリス達は、おののく必要がないだろう。

なにやら大物ぶっている元ボスに呆れてしまう。

蛇神が鬼面のトップで居られたのは、やくざの息子というステータスともう一つ特殊な事情が有ったからなのだが、阿呆な脳みそにそのことはインプットされていないらしい。

蛇神の眼前、人ごみが二つに割れる。

それを自分に道を開けたのだと勘違いした馬鹿は、クリス達を押しつけ得意満面に歩いていく。

後ろに続くお面達は、紅葉のいる教室まで聞こえる大きな声で生徒に向かい、挑発と罵倒を飛ばしていた。

風間がどうだこうだとか言っているのだが、紅葉には聞き覚えのない名前だった。

先頭を行く蛇神がようやく道の先、一人だけ道を譲っていないことに気づいたようだ。

脇の黒スーツを着た仮面が、大きな声で威嚇しながら、その一人に近づいていき、大きな声を上げ、空を飛んで行った。

そう、彼女のために開けられた道の先で、武神が楽しそうに笑っていた。

「お前は初めましてになるのかな？ 其れとも久しぶりかな。なあ、けちけちしないで教えてくれよう」

スピーカーも無く、声を張り上げたわけでもないのに、その甘い声は紅葉の耳までなげか届いた。

——次に飛ぶのはどいつだろうなあ、少年は彼等の行く先を危惧する。

●
幸運なことなのか、不幸なことなのか、あの場では、教師たちが止めに入ったことで、それ以上の犠牲は出なかった。

クリスの決闘のため、授業時間が押していることもあり、お前らの因縁話は昼休みにしろと、学園長に言われ、しぶしぶ校舎に戻る川神百代。

授業が終わり、仕切り直した昼休みのグラウンドに大きな人だかりができていた。無関係ではない紅葉は、人だかりの中心を目指す。

なぜか紅葉が進むと、人並みが引いていく。

最前列近くまで進めた上、隣とはだいぶ余裕ができていた。

『あ、あの、お隣失礼しまーす』

『まゆっち、そこは隣じゃなくて背後っていうんだぜ。あと、声がすぐくちつきい』

その理由に思い当たらず首をかしげるが、今はそれよりも重要なことがある。
紅葉は前を見る。

そこには、二つの集団があった。

一つは蛇神が率いる肉男シリーズのお面軍団。

もう一つは武神とどうやらその取り巻きらしい。

面を付けた男たちと赤いバンダナを巻いている上級生が睨み合ってる。

その中にはP Cルームで出会った直江大和の姿もある。

大和も何か因縁があるみたいで、バンダナの後ろから強い視線を放ち牽制していた。

蛇神の馬鹿は集まったギャラリーの数に納得がいったのか、辺りを見回し、宣言する。

「お前が武神じゃってなあ。昔、ワシが居ないときに、こいつらが世話になったそうじゃの。そこの風間とか言う奴もじゃ。礼をさせてもらおうか」

三対三の決闘、それが蛇神の提案だった。

武神はそれを了承し、決闘は休日の明日、この学園で行われることとなる。

その後、用は終わったというばかりにすぐ帰っていく蛇神に、百代が尋ねた。

「おい、お前のところに居た、あの怪物は今どうしてるんだ？」

興奮を抑えきれないといった様子の百代。

誰の事を言っているのかわかっていない蛇神に、昔彼女が、鬼面に殴り込みをかけたこと、あの勘違いの特徴を話す。

紅葉の行動は迅速であった。

「ああ、お前はあの時の、くくく、阿呆だな。お前は勘違いをしている、ソイツはなあ——」

咄嗟に近くにあつた物を投げつける。

周りには誰もいないので、それはきつと紅葉の私物だ。

「ああつ、それは、私の大事な」

蛇神より先に、誰か少女の小さな悲鳴が聞こえた気がした。

気にせず、くるりと方向転換して逃げる背に、予想以上に大きく鈍い音と元ボスの苦しみの叫び。

「ええつ、違うんです。投げたのは私じゃ、それにサッカーボールや砲丸なんて知らないです。いえ、確かにそれは私の大事な——でも」

これは厄介なことになりそうだと少年はため息をついて、校舎に戻っていった。

●
放課後、明日の事を考えていたらすぐに過ぎてしまった授業。

ふと気づけば、クラスメートの視線が、少年にそそがれている。

「刀を投げつけたんですって。マジで怖いわ」

「えつ、切り掛かったって聞いたんだけど？」

「ああ、俺の聞いた話じゃ、首を落としたらしい」

「ええ、それ殺人じゃん。さすがにうそでしょ。……えつと、もしかしてホントなの？」

距離のある紅葉にはひそひそ話なので、よくわからなかったが、投げるといふ単語が拾えた。

——昼の事が誰かに見られていたらしい。

皆が蛇神に注目している状況。

すぐに逃げれば大丈夫だと、高を括っていたのだが。

「ああ、おほん。みんな昼休みに蛇神に物を投げたのは僕だ。百代先輩が侮辱されたのが許せなくてね。頭に血が上っていた軽率な行動をしてしまったと反省している。だが、奴らの復讐が怖いんで黙っていてももらえないだろうが、頼む」

それならば、素直に自白、適当な理由をつけて言い訳すればいいと、紅葉は深く頭を下げる。

「ああ、松風！ 自分から名乗り出てくださいました。これで誤解が解けます。やはり荒場さんは良い方です」

「おう、自分でやったこととはいえ、なかなか言い出せる状況じゃないぜ」

顔を上げた少年の肩に暖かで優しい手のひらが乗せられる。

クラスを中心人物である野球部のルーキーだ。

「ああ、わかった。お前がやったんだな。もう何も言わなくていい。みんな誰にも話す

んじゃないぞ、いいな!……ごめんな」

最期の方が聞き取れなかったのだが、紅葉の要求は通つたらしい。

安堵のため息が出る。

明日のこともあるし、紅葉はすばやく帰り支度を整えた。

——皆の横を抜けるとき、何故か彼らは涙目で、「身代わり」「やくざの手口だ」「あたしたちにもっと勇気があれば」と云つた言葉が聞こえ、物騒な発言に首を傾げる紅葉だった。

着飾った蛇に、困惑する虎（表）

決闘の日、第一グラウンドは大勢のギャラリで賑わっていた。

生徒の中には、教師たちの目を盗んで、賭けを行う者、観戦用の弁当を売りさばく者、果てはビールなどの酒類の類まで売りだす者もいる始末だ。

この学園に入学して一年、こういったお祭り体質には慣れるにはまだまだ時間が掛かりそうだと直江大和は独り言ちる。

グラウンドの中心を挟んで、校舎側にキャップこと風間翔一が率いる大和の仲間である風間ファミリーが、その反対正門側に小学生の頃の因縁がある、蛇神を囲む鬼面の連中が陣取っている。

鬼面という名は、当時の小学生にとっては恐怖の象徴であった。

抵抗するものは居らず、どこに潜んでいるかわからない彼らに陰口の一つも叩く者はいない。

その名のとおりの鬼どもの悪逆な行い。

誰かわからない神出鬼没の存在に、子供たちは大人に頼ることもできず、つらい日々

をすこしていた。

そんな暗雲立ち込める時代。

奴ら鬼面との戦いは、風間ファミリーにとって川神界限に名を売り出す足がかりになつたのだつた。

きつかけは、鬼面の上納金というカツアゲが、大和達の学校にも及んだことだつた。

これは後から知つた事だが、風間ファミリーの頼れる武神こと、川神百代が居たおかげで彼女の活動範囲内の小学校に奴らの手が伸びるのが大幅に遅れたらしい。

そのためこの日まで、風間ファミリーは鬼面とぶつかることなく過ごしていた。

● 「気に入らねえな、よし！俺たちで奴らをぶつ潰すぞ。みんな、いいな！大和、策を考えてくれ」

その日、同じクラスの子から相談を受けた風間翔一はひどく興奮し、今にも飛び出していきそうだった。

冷静さを欠きながらも、彼がファミリーの皆に話を持ってきたのは、大和や師岡卓也の日頃の教育のおかげだったのかもしれない。

教育の成果を目にし、目を合わせ領きあう。

自分の提案に反応しない大和に焦れたのか、翔一は顔を覗き込んでくる。

大和はそれを手で制し、鬼面の情報を集める時間をくれと仲間の皆に提案した。

翔一や当時既に脳筋が開花し始めた島津岳人は、すぐに突撃するべきだと意気込んだが、敵の人数はおろか根城や頭の正体すら知らないで、どこに行くんだと問うと頬を掻きながら、その場に座り込んだ。

翔一たちの頭が冷え、その場は解散。

なるべく早く、大和や卓也が情報を集め、鬼面を潰す方策を立てることで納得させる。相談を受けた女子の話からかなりの規模、統制がとれた組織であることがうかがえ、長期の情報収集が必要になると推測された。

だが大和のそんな懸念もなんのその、水面下でばれないよう慎重に情報を探っていたのにもかかわらず、一週間やそこらで必要な情報が集まってしまう。

当時の大和は、何も疑問に思わず自身の優秀さに鼻を高くしていた。

今、考えるとあれほどの組織を作り上げていたにはかなりお粗末な隠蔽技術に思える。

それはそれとして、大和が、鬼面の被害をこうむっている各小学校のボスたちとの連合を呼びかけ、奴らのアジトに襲撃をかける計画が実行されたのはそのさらに一週間後のことであつた。

旗頭は当然提案者である風間ファミリーであり、その中心である翔一、荒事になるこ

とを考え仲間の女子はお留守番となった。

ちなみに当時のフアミリーの名より百代が有名だったため、それが気に入らない岳人の提案により彼女には内緒での出撃になった。

——まあ、待ち合わせ場所に着いたら、アイアンクローをかけられている岳人と笑顔の百代がいたのだが。

●
彼女を落ち着かせ話を出来る状態にまで、弟分の大和がなだめる。

落ち着いた百代から話を聞くと彼女自身に鬼面の中の一人と因縁があるとのこと。

それ以外には手を出さないといつているので、大和は彼女の参加を了承する。

岳人をいたぶっているのは、内緒にされたのが寂しいからだそうだ。

寂しいから、仲間をサンドバッグ代わりにする姉貴分に背筋が寒くなるが、すでに半泣きなのにジャイアントスイングをかけられている幼馴染を見るに抗議しても意味はないのだろうとあきらめる。

彼女が技をかけるのに飽き、岳人が朝ごはんを戻し終わる時、連合の全員が集結した。

各小学校の喧嘩自慢がそろった総勢五十名にもなるだろうか。

翔一の号令で敵のアジトの廃工場に、一斉に走り出す。

皆、雄たけびを上げること、鬼面の恐怖を振り払っていたのだと思う。

激戦が予想されたが思いのほか、鬼面の連携はとれておらず徐々に追い詰めていく。

さすがに一般兵とは違い上位の数字を刻んだお面の幹部は強く、岳人や翔一と熱戦を繰り広げることになった。

しかし、二人が勢いに乗っていたこと、その時点で組織の敗戦濃厚だったこともあり、これを撃破することに成功した。

鬼面の頭である一番と二番が見当たらなかったことが気がかりだったが、組織の幹部の殆どは倒れ逃げ出し、連合の勝利が確かなものであったため、誰もそのことには不満を言うものはなかった。

こうして、『廃工場の戦い』は幕を下ろす。

逃げた幹部連中を捕まえ、仮面を剥ぎ制裁するべきだとの意見もあったが、完全勝利したことで十分であり、そんな虐めみたいなことは嫌った旗頭の翔一の意見、これ以上やると魔女狩りになる可能性がありそんな疑心暗鬼な状態は避けるべきだという大和の発言もあって議論は決する。

戦いのさなか百代が何人かシバキあげて、質問を繰り返していた事が気になり訊いてみたが、何も教えてくれなかった。

こうして、勝利の立役者である風間フアミリーは、惜しめない賞賛を学校中、そして校外からも受けることになった。

これが過去の戦いの顛末。

「大和、見つかったよ。昔の段ボールをひっくり返して、大変だったんだからね。はい、これ。懐かしいよねえ」

そういつて、卓也は裏にらくがきの描かれた古いチラシを差し出してくる。

らくがきには『一番、賞金一万円ナリ 情報もとむ』など、色鉛筆で描かれた鬼面の幹部連中のイラストがずらりと並んでいた。

結局、恨みというものはそう簡単に消えることはないという証明がそこにはあつた。鬼面の悪行に腹が収まらなかった者たちが集まり、奴らに賞金を懸けたのだ。

このチラシが各小学校に配られてからの数カ月間の諍いを『仮面狩り事件』と呼ぶ。

大和の学校ではそこまでのものはなかったが、酷いところではいじめにまで発展したらしい。

大和は小学生時代の遺物を片手に、グラウンドの反対側にいる鬼面を見る。

「ワン子のやつ大丈夫かな？」

グラウンドについてすぐ、鬼面から決闘方法の変更を言い渡されたのだ。

三対三を百代と蛇神の一对一にするというのだ。

これに納得のいかない川神一子が、今相手方に詰め寄っている。

幼馴染の少女の赤みのある束ねた髪が、勢いよく揺れている。

一子は前日から遠足に行く子供の様にはしゃいでいたので仕方のないことだ。

相手の用意したなにかの策略かもしれないと疑念があるものの、それより気になることが多すぎる。

隣で胡坐をかいて蛇神を見つめ、頬を搔いている姉に尋ねる。

「あれって、姉さんの言ってた？」

先日とは『明らかに』違う蛇神を指す。

「いや、うーん。でもあんなトラウマものを覚えていないとか。しかし、子供の記憶だからなあ？」

問われた百代は要領の得ない返事を返してくる。

蛇神の恐ろしさを肌で感じた大和は、それ以上追及しない。

しばしの沈黙。

すると抗議に行っていた一子が、満足気な顔で帰ってきた。

三対三に変更し直したのだろうか。

「大和！ お煎餅もらったわ。食べてもいいわよね？」

買収されたらしい。

「はあ、知らない人から物をもらうんじゃありません！　って、キャップも、もらいに行くな！　後、あんたもカバンの中探さなくていいから」

走っていく翔一とお菓子を留意しようとするお面の男に声を上げる。

敵と仲間両方から緊張感がゴリゴリ削られる。

煎餅を食べ始める一子とそれを羨ましそうに眺める翔一を無視し、卓也に話しかける。

「あれは、どういうことなんだろうなあ？」

「あれってどれ？」

大和は友人の返事になんと返していいだろうか詰まってしまう。

卓也の答えは予想の範囲内から逸脱するものではなかったのだが、それでも返事をためらうのは仕方のないことだろう。

まず第一に、鬼面の人数が昨日とは明らかに少なくなっている。

これが総力戦であるなら、伏兵かと疑いもするが、決闘は一对一。

公の場であるので、これを破ることはないだろう。

万が一破り、多対一となれば、川神学院の生徒全員が敵に回りかねない。もつとも、百代であれば喜んで受け入れそうだが。

だがそれよりも、もつと不可解なこと。

第二に、奴らのボス、蛇神が白目をむいて椅子に縛り付けられていること。

ここから相手の意図が読める奴がいたら連れてきてほしい。

もし最適解を導き出せるものがあるのなら軍師の称号を、大和は喜んで譲ることだろう。

それだけではない。

「ねえ大和、さつきから難しい顔してどうしたの？」

煎餅を食べ終わった一子が尋ねてくる。

「お・ま・え・は、自分が戦う予定だった相手が別人になってることぐらい気づけよお!!」
大和は理不尽な八つ当たりを執行し少女のポニテールを掴み頭ごと揺らす。

目を白黒させる一子。

「お、俺様は気づいていたぜ！ ワン子はしようがねえなあ」

得意気に胸を張る岳人。

「はいはい、嘘つかないの。さつき岳人『やべえな、なかなかの鍛えられた筋肉だ、たつ

た数日であそこまで鍛えてくるとは』とか何とか言つてまるで気づいてなかつたよ」

「あ、モロ、てめえ！」

身長が明らかに高くなっているのに気づかないものがあるのか。

信頼すべき仲間の頭が軽いという事実は大和の腹に重い何かを残してくれる。

「ア、アタシだつて気づいてたわよ！ あ、明らかに違うでしょ！」

焦り言い訳をする一子に疑いの目を向ける。

「ま、まず、身長が低くなっているわ、それ、と——首回りも細くなっているわよ、ね？」

大和の顔色を窺いながら、解答を述べていく一子。

彼女の発言は間違っていないのだが。

「ほ、ほら、アタシを岳人といつしよにしないでほしいわ！」

面目が保てたと、一子は胸を張る。

確かに身長が低くなっているし、首も細くなっている。

ただ、一番変わっているのは『性別』である。

男が女に変われば首の一つや二つ細くなるに決まっている。

一番の変化を指摘せず、得意気になっている一子をどうしてやろうかと考えていると、鬼面の人間が提案があるところちらに話しかけてきた。

—— 図々しくも何を言ってくるかと思えば、大した提案ではなかった。
—— 奇妙といえば奇妙だったが。

奴らの要求は勝ち負けに関係なくこれから先の武神の決闘要求を無条件ではねつけられる権利がほしいというものだった。

決闘の勝敗がつくまえに、要求するものではない。

まるで、これから戦う己の大將が負けるといつているようなものではないか。

そう問うと、そんなことはない、蛇神が勝った後、弱い自分たちに、武神の負けた腹いせがくるのを恐れてのことだという。

百代はそのような弱い者いじめはしないとやうも、書かないなら決闘は中止だと、頑として譲らない。

大和達の間答に焦れた百代が要求をのむから早くしろと急かしてくる。

鬼面の連中はどこからか用意したのであろう紙に、さらさらと内容を書き、百代に署名と拇印を求めてくる。

そのあまりの手際の良さに目を丸くする風間ファミリー一同。

相手の考えが一ミリも読めず大和の頭が熱を持ち始めた。

「つて、何帰ろうとしているんだ!!」

百代がサインすると、一仕事終えたとばかりに、椅子に括り付けたボスを残して帰ろうとする彼らに悲鳴に似た声をかける。

本当に何を考えているんだろうか、考えが読めず、大和の動悸が激しくなる

「——もういい、要求は呑むから、いくつか質問に答えてくれ。まず、なんで蛇神が椅子に拘束されているんだ?」

大和は痛む頭を押さえ尋ねるのだが、誰も顔を合わせてくれない。

もうそこのお前でいいと、先程煎餅をくれた者に指をさす。

「えっと、その、戦いが始まるまで荒ぶる力を押さえておくためとか? そ、そう! あれだ。外すとパワーが溢れてくるやつ」

最初は自信なさげに喋っていたが、周りの者の顔色を窺ったあと、急にハキハキ喋りだす。

「じゃあ、なんで、蛇神が白目むいてるんだ? とうるか病院行かなくていいのか?」

「さ、悟りを開いているといいなあ? うん、精神を集中させているんだ、な、なあ、みんな」

再度、周りの反応を窺う彼を不審に思う大和。

「もういいだろう、大和。おい、お前らも早くそいつを起こせ。私は我慢の限界だ！」

——風間フアミリーのボス、川神百代がお怒りだった。

それが鬼面にも感じ取れたのだろう、蛇神の頭をけりつける一同。

——ひどく乱暴な起こし方だった。

● 目覚めた蛇神に事情説明がされる。

まだ、ちゃんと目覚めてないのか受けごたえがうつろだったが、そのたびに仲間に殴られ蹴られ意識を戻して、失って、戻していく。

敵でもそこまではしない。

大和の背筋に冷たい汗が流れた。

意識を戻すのに五分、その後ようやくこちらを睨みつける。

「ワシが勝つたら、この学校の全員に舎弟になつてもらうからな。いいな！」

少しうつろな瞳の蛇神はとんでもない要求を突き付けてきた。

散々待たされて、イライラしていた武神の顔がその言葉に反応し獰猛な笑みに歪む。

「おもしろいことをいうなあ。じゃあお前が負けたらなにをしてくれるんだ？ ん

んっ」

要求を返されるとは思っていなかったのか、蛇神が口ごもる。

——その時、蛇神の仲間の声がグラウンドを駆け抜けた。

「いいだろう、もしボスが負けたら、両の腕を折ろう！」

「耳をそぎ落としましょう！」

「いいわ、両目を潰しましょう」

「腹を切らせます！」

異なる宣言に奴らは顔を見合せて。

「腹を切りましょう！」

より重い方に落ち着く。

顔を青くする蛇神。

鏡がないので確認できないが大和の顔色も悪くなっていることだろう。

『ボスが負けるはずがない』『だから要求はなんでも構わない』『大丈夫です——急いで死んでください』

仲間 に説得されて持ち直す蛇神。

そして早く戦えと促す部下たちに、大和は戦慄を覚える。

つまり 奴らは、蛇神の勝利を疑っていないのだ。

武神との戦いになっても、自分たちには何一つ傷がつかないとそんな自信が見え隠れしている。

挑発を聞き、百代が彼等を面白そうに眺めていた。

その姿には余裕があつた。

彼女は、相手方の策が読めない事をよしとする。

戦うのは最強の武神、我らの頼れる姉貴分川神百代なのだ。大和は己を落ち着ける。

もうこれ以上、横やりは入らない。

風間ファミリーは武神に声をかけ、グラウンド中央に送り出す。

相手を見るとまたトラブルだろうか、蛇神が、励ましの握手を仲間に向けているがこことよく断られているようだ。

本当は信頼関係があるのか、ないのか、わからない。

泣き顔で中央にくる蛇神は、今度は百代にまで握手を求めている。

訳が分からないがもしかしたら、寂しがり屋なのかもしれないなどと大和に気持ち悪

い考えが浮かぶ。

あわれに思ったのかそれに応じる優しい大和の姉貴分。

——早く離せ。

いつまでも百代の白い手を握っている蛇神を大和は睨みつける。



学長の注意にようやく手をはなす蛇神。

どうやら決闘の準備が整ったみたいだ。

『それでは、これより決闘を開始する。たがいに名乗りを上げよ』

『川神流、川神百代、参る！』

『喧嘩殺法、鬼面がカシラ、蛇神、潰す！』

高らかに名乗り上げ、子供の頃の因縁を清算する戦いが始まった。

着飾った蛇に、困惑する虎（裏）

決闘の日の朝は、雲一つなく強い日差しが、これから行われる戦いを後押ししていた。開始の時刻よりだいぶ余裕を持ち、紅葉の部屋の目覚ましがあなり声を上げた。

ベッドの中から、手探りで時計を探し当て、時間を確かめる。

準備に必要な時間は、イレギュラーな要素のことも考慮し、かなり取っておいた方がいいだろう。

紅葉はさっさと制服に着替え、部屋を出た。

リビングに向かうと、母が紅葉の朝食を用意している。

父は休日出勤らしく、すでに朝食をとりおえ、玄関に向かうところだった。

トーストにかぶりつきながら、片手で父を見送る。

紅葉自身が他人と比べたわけではないが、親子の関係は良好なものだと思っている。

朝食を三分そこらで食べ終えて、紅葉は台所に向かう。

サラダ油とオリーブオイルを手に取り、どちらにしようか紅葉が迷っていると、母が不思議そうにこちらを見ていた。

紅葉には判断がつかなかったもので、どちらの油が必要ないのかを尋ねてみる。

両方必要だという母の言葉に、それはそうなのだろうと紅葉は納得した。主婦として当たり前前の答えを聞くと、紅葉の手の中にあるたかが食用油でさえ惜しくなってしまう。

紅葉は代わりになる物がないかと、台所を見回した。

すると、ゴミ箱の横にある缶が目に入った。

母に聞くと昨日の夕食の天ぶらを揚げた後の廃油だそうだ。

これならば惜しくはない。

母が不思議そうに、石鹸でも作るのかと紅葉に尋ねる。

そんなところだと返し、紅葉は廃油を缶ごとカバンに詰める。

その他に、ハサミに、ガムテープ、荷造り用のひも、観戦用の菓子など適当に詰めつけた。

——後はストッキングでもあればよいのだが。

だが、母に借りるのも、お店で買うのも男子高校生である紅葉は遠慮したい。

しょうがないので、黒のごみ袋を代わりにカバンに詰め込む。

結局、紅葉が用意したもののすべてが代用品になってしまふ。

だが、使用する相手を考えると妥当。

——いや、上等か。

リビングの時計を確認。

母に声をかけてから、少し急ぎ足で川神学園に向かった。



紅葉が学園の正門につくと、すでに蛇神の家の黒い外車が止まっていた。

最悪、学園外を探すことも覚悟していたので、手間が省けた。

遠目がかがう限り、車の中は無人。

蛇神の子分である現鬼面の者は、すでに決闘の場であるグラウンドに集まっているの
だろう。

学園に来るのが少し遅かった。

紅葉の計画を実行するには人の目が多いと都合が悪い。

そういつたことも考慮して、紅葉は早めの時間に登校したのだが。

校門を抜け、グラウンドに向かう道の途中、大きい看板が立てかけられていた。

『鬼面御一行様 休憩所こちら 武器や貴重品等はこちらのロッカーにお預かりします。最近学園などで、盗難被害が出ているので必ず、必ずお預けください。大切に使用していただきますのでご安心を』

看板と云つても、適当に切ったダンボールに赤マジックと、子供の工作レベルの代物である。

決闘の運営者は、やる気が無いのか、それとも人手不足で手が回らなかったのか。

紅葉は矢印の方を向く。

矢印のさす方向は、人気のない体育倉庫に続いていた。

——とても都合が良い。

己の日ごろの行いの賜物だろうと納得し、人の気配を窺いながら、歩みを進めていく。紅葉は、規則正しく植えられた木の陰から、倉庫を確認する。

そこには、面をかぶった手下共が蛇神を中心に、輪を作り何やら話し込んでいた。休憩所とあつた割に、椅子の一つも用意されていないのか、全員地面に座り込んでい

紅葉が耳を澄まして話を聞いていれば、内容は決闘のことではないようだ。

『おい、この暑い中、いつまで待たせる気だ！ 何だ、奴らはパシリ一つ満足にできないのか。お前らの教育はどうなっている！』

蛇神と面に刻まれた番号の若い奴らが、飲み物はまだかと騒ぎ、周りの者がそれを宥めている。

飲み物ぐらいで、これほど騒ぎ立てているところを見るに、頭の成長は、ガキの頃からストップしているようだと思われてしまう。

待つ事に蛇神の短い堪忍袋の緒が切れたのだろう、二人のお面の手下を共に、紅葉の隠れている方へ歩いてくる。

紅葉はカバンに手を入れる。

口の端を吊り上げこっさり回り込み、彼らの後ろをつけていくのであった。

校舎の食堂の外にある自動販売機で、蛇神は飲み物を選んでいた。

連れ立った二人は、先行させ飲み物を買に行かせた者を探している。

倉庫から、ここまで最短の道を移動してきたのだが、すれ違うことはなかった。

だが、紅葉には関係のないこと。

風が木々の葉を揺らす音と、短い生涯である蟬の求愛の歌、そして蛇神と取り巻きの話し声しか聞こえない。

——絶好の機会であつた。

蛇神の頭はこちらを向いていない。

紅葉は軽くしゃがみ、爪先に力を込め、一息より短い時間で、蛇神との間合いを殺す。強い風が吹いた。

蛇神は振り向いてすらいない。

たった一步、飛ぶように詰める。

知覚外からの一撃。

音もなく跳んできた爪先は、蛇神の脇にめり込んでいた。

蛇神の両目が白一色に変わり、なすすべなく倒れ伏す。

蛇神が地面に倒れ、その音で初めて、手下は紅葉に気付き、視線をくれる。

「お、おい、何だお前は！　うちのボスに何をした！」

紅葉は足の下で動かなくなった蛇神の頭を踏み潰し、彼らの反応を見る。

一瞥した後に視線を下に戻し、愉快な顔で白目をむく蛇神にため息をこぼした。

「おい、早くボスから離れる！　川神百代の手の者か！　畜生、此処まで直接的手段で来

るなんて、——おい、いい加減、タバコの火を消す要領で、ボスの頭を踏みにじるな！」昔から特別に強くはなかったが、武神に喧嘩を売るのだ、何かしらの勝算あつてのとだろうと推測はしていた。

だが、この程度の不意打ちで、地面に顔の半分が埋まり始めている蛇神ではどうやっても武神に勝てそうにない。

それに敵がいるのに問答無用で殴りかかってこず、律儀にこちらの反応を窺っている二人など、糞の役にも立ちそうにない。

紅葉は改めてゴミ袋に空いた二つの穴から、彼らに視線を向ける。

「山賊です、身ぐるみを剥ぎにまいりました——とか言ったら素直に従ってくれてたりしなかったよね？」

ちなみにこの質問は、二人組の足を払い、倒れた頭を交互に踏みつけながら、投げかけられた。



近くの空き教室、そこで紅葉は次の行動を確認する。

使用し、空になった廃油の缶は此処に置いていくことにする。

剥ぎとった三人分の服も特に必要ないので、ゴミ箱に突っ込んでおけば問題ないだろ

う。

流石に三人の高校生男子を運ぶのは疲れてしまう。

なので、石蹴りのように、転がしならが運ぶ。

紅葉は、教室にある時計を確認した。

——どれくらい時間がかかるものなのだろうか。

パンツ一枚になった蛇神を、廃油をぶっかけ日当たりのよい木に縛り付けておいたのだ。

今日の朝食のトーストに乗っかっていたベーコンは、フライパンですぐに色が変わったのだが。

夜空の星ではなく、真昼の太陽に願いをかける。

そして、呻きながら転がっている、蛇神の手下を見た。

こちらも蛇神同様に、パンツ一丁である。

だが、お面を外していないので、異様な見た目になった。

——とても関わり合いになりたくない。

紅葉は彼らを変態だと思った。

ちなみに面だけを残しておいた理由は特にない。

顔と面の隙間に、指を入れ、つまんで剥がす。

ゴム紐で、固定されていただけで、簡単に取れた。

面を外せばそこいらの学生と何ら大差のない平凡な顔が出てきた。

その顔を、もう一人の股間に挟み、ガムテープでぐるぐると固定する。

そしてもう一人の顔も、相手の股間に固定した。

——特に意味はない。

逆さまに向かい合い、顔を股にはさみあう形に固定された男たち。

昔のように、悪戯を試してみたのだが、見ると、吐き気と殺意がわいてくるだけで、愉しくはなかった。

——これが大人になるといふことか。

歳を取るとは、寂しいことなのかもしれない。

紅葉は遠い日に笑っていた自分を思い出し、感慨にふける。

その気分のまま、再び転がっている男共を見ればどうだろう。

紅葉は不快になったので、蹴り飛ばした。

こういった物の処理は、ミンチにして養殖場のアサリの餌とか、ダム建設のコンクリートの中が、一般的なのだろうが、紅葉にはそんなコネはない。

——時間も無い。このまま、捨ててしまおう。

だから、教室の隅にある掃除用のロッカーに目をつけた。

——勢いよく開けて、勢いよく閉めた。

紅葉は、顎に手をやり、自問自答する。

ロッカーの中には荒縄で縛り上げられている全裸の男が、二人ばかり詰まっていたように見えた。

安らかな寝顔であり、パンツも穿いていない。

学園でこのような行為を行うなど、かなり上級の倒錯者だった。

二人は身動きができないように、完璧に縛られていた

どうやって自身を縛ったのかわからない。

だが紅葉にそのような趣味はないので思考を遮断する。

「——仲良くするんだぞ」

——ロッカーに二人を放り込み、見なかったことにし、次の目的地である演劇部に足を向けた。

● 紅葉にとっては幸運なことだが、不用心なことに演劇部の部室は鍵が閉められていなかった。

都合はよいが、学園生としては眉をひそめてしまう。
隣接する衣装部屋に入り、紅葉は物色する。

だが、十中八九あると踏んでいた目的の物が見つからない。

棚のほうに目をやって、手を動かす。

マネキンヘッドはいくつかあるのだが、目的に叶うものはない。

妥協し、一番近いものに手を伸ばす。

これにハサミを使って何とか代用するしかないだろう。

ここで得られる必要なものは揃った。

次に紅葉は購買に向かう。

その途中、二階の廊下から見渡せる庭で、大柄な男がたき火をしていた。

季節外れの焚き火に、紅葉は首をかしげる。

『なあ、なんで、喋り方変えたんじや？ ワシと被ってるじやろう。特に一人称とかモロ

に。昔は俺って、言っとったのに。いや別に怒つとるわけじゃない。だからこのことにも悪気があつたわけじゃない。じゃから、お前は許してくれるだろう、なあ？

軽く炙るつもりだったんじゃが、思ったよりよく燃えることなあ。まあ、頑張ったワシも手に少しヤケドしたわけだし、お互い様だ、なっ！——よし！ 反論もない！
ところでおまえ、なんか油臭いのう』

新聞紙や雑誌類のインクの焦げるにおいの中、色黒の男は、太い木の棒にくつついている人間大の黒焦げの何かを前に独り言を話している。

春になるといろいろな人が湧いてくる。

陽気の良さも考えものである。



購買に向かうも、休日のためか開いていない。

たとえ開いていても紅葉が必要としているものは、男子が買うには度胸がいる。立ち止まって一度考えてみれば、財布の中の手持ちでは足りないかもしれない。

三度、時計を見ると、決闘まで時間も余りない。

——仕方がないあるものだけで何とかしよう。

紅葉は開き直る。

だが、蛇神を縛り付け付けた木にたどり着いた時、そこに彼の姿はなくなっていた。

——断りもなしに、いなくなってしまうなんて。

紅葉は理不尽に、腹を立てる。

声を上げられないように鼻と口にガムテープを張り付け、縛る際には、関節も固定していたのだが、蛇神には足りなかつたらしい。

——逃がさない。

紅葉は、手下から奪っておいだ面で顔を隠し、おそらく蛇神がいるであろう体育倉庫の休憩所に走った。

休憩所、お面をつけた幾人かが、円になって誰かを囲んでいる。

皆が皆、首を傾げていた。

面で顔はわからないが、最初から休憩所にいた人間とは体格が違うことがわかる。

面をしているので意味はないのだが、紅葉は何食わぬ顔で、とことこと近づいていく。

円の中心、椅子に座っている人物を確認した。

——そして紅葉の予想通り、そこに蛇神はいた。

紅葉も、首を傾げる。

——シャツの下に明らかな詰め物をしているせいで大柄に見えなくもない上半身。

——浅黒いというか、墨色の肌は、香ばしい薫りがする。

——演劇に使うようなド派手なスカートを穿いて。

——足はきれいに剃り上げられ、ムダ毛がないことが逆に気色悪い。

つまり、蛇神は変わり果てていた。

だが、紅葉は不足感を覚える。

——紅葉は、最後のピースをはめ込んだ。

演劇部で見つけた、舞台用のカツラを、そつと彼の頭に載せてあげる。

——場に賞賛の拍手が響いた。

放送により決闘の時間がきたことが知らされる。

蛇神の手下が、なぜ紅葉の行動を褒めるのか。

そういった、特にどうでも良いことを、紅葉は気にしない人間だった。

泣き顔の蛇神が、スカートをはらひらさせながらグラウンド中央に向かっていった。毛量が多いため、紅葉がカットした黒髪のカツラは、頭皮に直付けした接着剤のおかげで取れる心配がない。

蛇神が、紅葉に求めてきた握手。

求められると、断りたくなるので、紅葉は拒否した。

紅葉の周りの蛇神の手下たちも断っていたのはすこし意外ではあった。

——いや、蛇神の命令を聞くやつなんて昔から少なかったつけ。

意気消沈した蛇神は、グラウンドで武神との握手を交わすと、なぜか顔に生気が戻っていく。

変化を怪訝に思ったが、学園長の号令がかかる。

静まりかえる中、戦いは始まった。

紅葉はこの戦い、すぐに決着がつくものだと見込んでいた。

いつかの朝の登校中、河原で見た百代の戦う姿はひどいものであり、あの蛇神ごときでは一分も耐えられるはずがない。

しかし、紅葉の眼前、グラウンドの中心、そこで一步も引かずに拳打を叩きつけあう二人の姿があつた。

百代の高らかな哄笑、鈍い打撃音、そして蛇神の雄叫びが上がる。

蛇神は拳を全身で受けながら、緩慢な動作で大振りの一撃を返す。

意外なことに百代は其れを躲そうとはしない。

蛇神の一撃を身体で受け止め、そして拳打を浴びせ返すだけだった。

互いに守りを捨てた、技術のない子供同士の喧嘩。

——だけど蛇では虎には敵わない。

紅葉は蛇神が負けると、確信した。

根拠は単純。

紅葉は、蛇神と百代、互いに当たった拳の数を数える。

蛇神が一度、百代の腹を殴れば、その度、百代が三発、頭に、胸に、腹へと、拳を射し込む。

手数において蛇神は分が悪く、時間が経つに連れその差が明らかになるだろう。百代が勝利した後のことを考え、紅葉は逃げ出せる準備を始める。

「これは、モモのやつ遊んでおるの」

歓声の中、学園長のため息が、紅葉の耳に届いた。

同じく聞こえたのだろう、先ほど煎餅を、持って行ったポニーテールの少女。

川神一子が質問する。

「遊んでるってことは、お姉さまが勝ってるのね？」

あえて百代は防御を一切してなかったのか。

ハンディキャップを己に課すことで、格下との戦いを楽しんでいるということ。

おそらく好戦的な気性であろう百代。

学園長の言葉に紅葉は納得する。

「いや、今有利な立場におけるのは、蛇神じゃ」

その意外な言葉に紅葉は驚き、そばで耳を立てた。

「どういうこと、お姉さまの拳のほうが多く当たってるのに。其れにあんな素人同然の

大振りな攻撃がお姉さまより強いはずないし」

一子のすぐ後ろで、紅葉は首を縦に振り同意する。

戦いを楽しむのは強者の特権。

だが、楽しみすぎて負けるなど、笑い話にもならない。

「なぜかわからんが、モモの気は減っておるのに、蛇神の気はひとかけらも減っておらん
のじゃ。それに付いた傷が片つ端から治っていく。百代だけでなく、蛇神のものもな」

「じゃあ、お姉さまと同じように蛇神も瞬間回復してるってことー！」

瞬間回復がなにかは想像もつかないが、其れは驚くべきことだったのだろう、一子が
興奮し声を上げる。

二人の戦いに目を向けると、拳が当たった後にかすかに光り、傷が消えていく。
百代よりゆっくりであるが蛇神の物も同様に。

紅葉は目を拭い、もう一度確かめるように確認した。

——人間の傷はあのような速度で塞がるものだったのだろうか。

紅葉の疑問を無視して、戦いは続く。

「お姉さまが負けるはずない！」

力強い言葉とともに、いつのまにか紅葉の横に一子がいる。

一子は観戦に必死で紅葉を見ていない。

だが彼女の手は、紅葉の摘んでいる煎餅袋から、煎餅を抜き取っていく。

学園長の話を聞くため、紅葉は何時の間にか、百代の応援席にまで来てしまっていたのだ。

——これはまずいのでは。

逃げるよう、逆のほうに体をずらすとすると、そちらの方からも手が伸びる。

バンダナを巻いた上級生らしき男性が笑顔で紅葉の煎餅をかじっていた。

——そしてその隣にずらりとお面をかぶった蛇神の手下たちも並んでいる。

戦いのほうが大事なのか、武神の連れは、誰も文句を言わない。

紅葉は気にしない事にした。

歓声が響く。

決闘に動きがあったのか。

大きく五歩、距離を取った百代の右拳が肩から上に持ち上げられ、光を纏う。今日何度目か、紅葉はまた目を擦り、もう一度百代の方を見るが、光っていた。そして、グラウンド上、大地と平行にを白いレーザーがほとぼしった。

開いた口が塞がらない。

蛇神の立っている方向に向けて地面が抉られている。

——人間の手からは、汗以外に、ビームが出る。

その驚くべき事実。

不思議なことにお面を付けているものと紅葉以外誰も驚いていない。

「やった、お姉さまの奥義がきまつたわ！ これでこつちの勝ちね！ あなたたちも文句はないわね？ って何やってるの手を突き出して？」

——汗しかでない。

恥かしくなつて顔をそむけると紅葉と同じように手をかざしているお面たちと目が合った。

両手を使い、似たようなポーズをとっているバンダナの男、彼は百代側の人間だが、この事実を知らなかったのだろう。

視線を向けるも、男のさわやかな笑顔にサラリと流され、紅葉は閉口する。

——蛇神もレーザーを受け蒸発したことだろう。帰るか。

百代から一筆受け取ったことで、目的は果たされている。

後は、犠牲になった蛇神のため、念仏の一つでも唱えながら、帰宅するのみ。

紅葉は腕を上げ、体を伸ばし、息を吐き出す。

——死体が蒸発したなら、葬儀屋も手間が省けるな。

他愛もないことを考えていた。

だが、紅葉は武神の姿が光に飲み込まれ、思考を遮られる。

「お姉さまー、あれはー」

一子は、過ぎ去った光の後、制服が焦げて破れた百代が無事に現れたことを確かめると、次に光が飛んできたほうを見ると、

先程の百代の放ったビーム、そのせいで舞い上がった土煙が晴れ、一人の男が五体満足で現れる。

光線を受けて蛇神に大したダメージはないらしい。

そればかりか口元からプスプスと煙が上がり、淡く光をこぼしている。

あそこから先ほどの光線を吐き出したのだろうか。

今日の朝に紅葉がかかる蹴り倒し、しばらく踏んづけていた人物とは思えない。そこからは喧嘩ではなく、ただの光線の打ち合いになる。

百代が撃てば、間髪入れることなく蛇神が撃ち返す。

飛び交う光線は、熱量を伴っているのか、グラウンドを熱くしていく。温度だけではない。

ぶつかり合い、弾けた光は、そこいらにクレーターまで残していた。

観客は紅葉と鬼面、百代の身内を除いて屋上に避難しそこから試合を眺めてる。

何度、打ち合いが続いただろうか。

怒号の如き光線に気を取られ、避難することを忘れていた。

煙が晴れ、乾いた笑いが響く。

非現実的な光景のせいで、紅葉自身の口から笑いが漏れたと思っていた。

だがそれは、徐々に音を大きくしていく。

ようやくその笑いが、この景色を生み出した百代の物だと気付く。

「何がおかしい！ お、お前はワシに追い詰められているんだぞ！ 気でも狂ったか？」

戸惑う蛇神、いやあれは焦っているのだろうか。

蛇神の表情に余裕がなくなっている。

「ああ、そのの、からくりが分かったんだ。この撃ち合いも、それを確かめるためにやったんだが。私と撃ち合える人間なんて、しばらくいかなかったからなあ。つい、興が乗って、楽しんでしまった。だけど、それもここまで。このままじゃ、千日手になってしまおう。こんな手に最後まで付き合うようなお人好しに私が見えているわけじゃないんだろう？　なのに、それを崩さずにこちらの自滅を待ったという事は、おまえの方に、もう隠し玉はないのかな？」

百代は、少し期待するかのような顔で、蛇神に問いを投げる。

だが、答えを返せない蛇神を見て、表情からそれを消す。

「そうか、残念だ。じゃあ、種明かしだ、蛇神。そんな技術は見たことも聞いたこともないが、珍しい。おまえ、私の放った気を自分の中に吸収していたな。それを己の身体強化や回復に回している。違うか？」

百代の言葉。

気というものは漫画でよくある、いわゆる気というやつだろうか。

そうだとしても、紅葉に詳しいことは分らない。

だが、蛇神の焦る顔色からそれが凶星なのだと容易に想像がつく。

「だ、だから、どうした！　そうだとってもお前に勝ち目がない事にかわりはない。この

まま削り合いを続ければ、お前の気で戦っているワシより先に、おまえの気が底をつく。なあ、そんな簡単な理屈もわからないのか？　だが、少し待て。もし、今、白旗を振るならば、トドメは刺さん。そしてワシの女にもしてやる。どうだ？」

蛇神が吠える。

その内容は傲慢なものだったが、声音はまるで命乞いをしているように聞こえた。

武神の言葉は止まらない。

「で、さらに、ネタばらし。実はお前、自前の気の量は大了たことないだろう。お、まます顔が青くなつたな、凶星か。その上、一度に吸収できる気の量にも限界がある。しかも両手からしか気を吸収できないのかな。なんだ、欠点だらけじゃないか。おや、足が震えているぞ。反論があるなら絶賛受付中だ。まあ、反論があるのなら、まずその前に気弾を一発でも放つてもらうがな。——ふふつ、それすらできないだろう？」

さっきの撃ち合い。おまえは私が放つた後に続く様にしか気を放つてこなかった。いや、必ず私が二発目を撃つ前にだけだったか。つまり吸収できる量は一発分より少し多めといったところかな。それ以上は無理なんだろう。吸収して、放つて、空になつたタンクでまた吸収のサイクル。だから一発放つたお前には、わたしが注ぎ込んでやるまで、二発目を打つタンクは残つてない。——しかしそう考えると笑つてしまうな。だつたら決闘が始まる前、おまえは、空っぽの状態で私の前に来たんだな。そりゃあ、涙目

で握手を求める訳だ」

最低限、徒手で戦うための力を百代から吸い取るつもりだったのだろう。

だから朝とは違い、蛇神はこんなに打たれ強いのか。

不意に、百代の笑いが消えた。

「なっ、なんのつもりじゃ!」

瞬間、距離を詰め、日本の腕で、ガツチリと蛇神を抱きしめている。

蛇神が焦る。

—— 少しでも羨ましい。

「そして、最後の欠点。打ち合い中にわかったが、おまえは口からしか大量に気を放つ事ができないだろう。ああ、ところで穴をふさいだ風船に大量に空気を送ったらどうなると思う。あれでもいい、カエルの尻にストローを突き刺して空気を送るやつ! ちなみに実験の結果を、お前に見せてやれないのがすごく残念で仕方ない」

万力の片腕で蛇神を拘束し、もう一方で口を塞ぐ。

蛇神の目が見開かれ、光るしずくが流れる。

あれでは、降参を宣言することができない。

周りのみんなが手を合わせているので、それに倣い紅葉も合わせる事にした。

『川神流人間爆弾 五連発』

蛇神の音のない悲鳴のあと、世界に爆音が響いた。



せつかく、用意したいつかの日の『衣裳』はすべて真っ黒な灰になった。役目を終えた彼らに感謝の祈りを捧げた。

そして紅葉の眼前、残ったのは蛇神の亡骸だけだ。

「いや、そんなにお前のところの大将を死んだことにしたいのか？」

これからのことを考えると幸いなことであるが、残念なことに蛇神は息を残していた。

口から蒸気機関車のような煙を吹きだしたままピクリとも動かないが。

蛇神の状態を確認した後、グラウンドの中心、さらにその真ん中で、バンダナが高らかに腕を突き上げる。

響く歓声、拍手の嵐、そのどれもが彼らの勝利を讃えるものだった。

「ん、何か文句でもあるのか？ ポスの敵討ちでもするか」

武神は何故か嬉しそう。

——滅相もない、紅葉にそのような義理は一欠片もない。

仮面を付けたままの紅葉は、恨みつらみは此処で清算しておきたいのだと、嘘偽りのない言葉を百代に告げる。

そして引つ張つてきた蛇神の死体のようなものを彼女の前に放り捨てた。

百代は紅葉を見て、死体を見て、もう一度紅葉を見る。

理解が追い付いていないようだ。

確かにこれだけではわからないだろうと反省する。

——それならば、できるだけわかりやすく。

紅葉が準備を始めようとする前に、横のお面の大柄な男が蛇神の体を起こし、ボロボロになったシャツの前を開き、腹を百代に向ける。

なぜ紅葉の手間を男が省いてくれたのか。

気にせず、それでも理解できない百代に、これまたお面の女が、どこで用意したのだろうか、出刃包丁を手渡した。

そして告げる。

「さあ、あの時の恨みもあるでしょう。ぐいっと、一思いにどうぞ」

—— 一歩足を後ろに引く武神川神百代。

学園に入学して以来この女が歩を後ろに進めるところを初めて見た。

「ええつ、と、ん、ん、と。もしかしたら私の勘違いもしれん。つまり、だから、—— お前から私に、一体何を期待しているんだ？」

武神は困惑しているようだ。

右手に受け取った包丁を持ったまま。

武神と、紅葉と、なぜか協力してくれている蛇神の手下。

三者三様、思いが伝わらない。

此処でようやく紅葉は、百代の気持ちを感じた。

女性が魚をさばくときに死んだ魚の目が怖くて、できないという人がいるらしい。

気を使い、蛇神の表情を遮るために、カバンから黒のゴミ袋をだし、丁寧に蛇神の頭を隠す。

正解の確認を取る。

「いや、なんで全員こつちを見る。私はやらないぞ！」

——どこかに、齟齬があるはずだ。

紅葉と、蛇神の手下たちは、互いに面を突き合わせ、思案する。だが答えは出ない。

紅葉としては、蛇神を昔の因縁ごと、百代に葬り去ってほしい。

そうすれば、決着が付き、百代と紅葉の精神も晴れ晴れとするはずなのだ。

つまり紅葉は、誠心誠意、蛇神に死んでほしいだけなのだ。

——どうして、そんな簡単なことが伝わらないのだろう。

言葉があつても意思疎通は難しく、両勢力とも動けず時が経つ。

そんな沈黙の中、校舎の方から、男の声が響いた。

「騙されるな、そいつは偽者だ！ 誰かそいつを捕まえてくれ！」

男はブリーフ一枚しか履いていないほぼ全裸の変態であった。

変態の指が紅葉達のいる方に向けられているのが、とても不本意で不愉快だった。

虎と蛇の終わりに

●
休日の学園、友達もおらず、部活動にも所属していない黛由紀江は、一年生の下駄箱の前にいた。

何の目的もなく散策をしているわけではなく、今日この日に行われる、武神川神百代の決闘を見学に来たのである。

劍聖黛十一段の娘であり、自身も劍術家である由紀江は、ほかの野次馬とは違い、この決闘を見なければならぬという義務感の方が強い。

娯楽の意味合いで集まった一般生徒たちとの間にある温度差、父親譲りのこういった生真面目さが余計に友人作りの邪魔をしているのかもしれない。

時計を見れば、決闘の時刻には、だいぶ余裕があった。

早く来るつもりはなかったのだが、普段どおりに朝の支度をして、寮の先輩たちの後を追って出たら、開始時刻まで空気ができてしまった。

グラウンドはすでに多くの観客で賑わっている。

由紀江のクラスメートもいたのだが、彼女が近づいた分だけ距離をあけられるのに耐えかね、校舎の方で時間を潰すことにしたのだ。

「まゆっち、元氣出せよ。オラ、積極的に近づいて行つたまゆっちのこと評価するぜ！」

木彫りの馬のストラップは、由紀江と寸分たがわぬ声を返してくる。

励ましてくれる小さな友人がいるのに、心が冷めていくのはなぜなのだろう。

その理由を深く思索すると、さらに冷え込みそうなので、気持ちを切り替え下駄箱を覗く。

由紀江が、下駄箱を覗くと黒の外靴だけが置いてある。

「毎朝の日課が他人様の下駄箱の確認。高校生女子として、間違っているような、正しいような」

友人の指摘をスルーして、人に見られないうちにその場を後にする。

下駄箱の主は、入学以来、目を付けている男子の物だ。

毎朝一時間目の授業が始まる前の時間は、由紀江にとつて最初の試験であった。

教室の一番後ろの由紀江の席は授業の開始まで、クラスメートが誰も近寄つてこない。

当初は不思議であつたが、今はただ悲しい。

由紀江の席から二席分の持ち主さえ、教師が来るまで絶対に席に着かない。

自分が原因で不自然に出来たスペースにいたたまれなくなり、由紀江はなるべく教室の外で時間を潰すことにしている。

そんな中、登校時間が遅めの彼が来るのを由紀江は待ち焦がれていた。

彼とは、さきほどの下駄箱の主であり、由紀江の友人第一号——になる予定の人物だ。

入学式からこの日まで、彼は由紀江に対して無頓着であった。

他の皆が由紀江に対して距離を取っているのに、彼だけは毎日、何事もないかの様に席に座り続けている。

「入学式からこれだけ日数が経っているのに、未だに警戒されてるって、逆にすごいな」

——とにかく、由紀江は、下駄箱に彼の上履きがないことを確認してから、教室に向かう事になっている。

由紀江のせいでできたクレーターの中でも、二人ならいくらかは、寒さを凌げる。

由紀江にとって、偏見を持たない彼は、心の拠り所の一つになっていた。

——まずは教室に行ってみよう。

グラウンドでの苦い出来事を忘れるため、由紀江は握った両拳に力を入れて、彼女にとっての松明を探しに出たのだった。

決闘の時刻が来てしまった。

思いつくところはすべて回ったのだが、結局彼のことは見つけれず、下駄箱をもう一度確認すると、外靴はなくなっていた。

どうやら入れ違いになったようだ。

由紀江は落胆するが、帰宅したわけではなく、決闘の観客に中にいるはずだとあたりを付け、彼を探す。

川神学院の生徒の大半が集まっている中で、一人の生徒を探すのは至難の業に思えるが、観客達は学年ごとに固まっているので、そこまでの時間はかからないだろう。

くわえて、彼も由紀江と同様に、いや、由紀江より小規模ではあるが、クレーターを作ってしまうので、すぐに見つかると思っただ。

だが予想に反して彼は見つからなかった。

「あの糸目野郎いないな。まゆつち、なんやかんやで遅れていた決闘も、ようやく始まるみたいだぜ」

目が細いというよりは、意識して細目にしてるのでないかと、由紀江は感じている。——もう帰ってしまったのでしょうか。

仕方がないので、彼を探すことをあきらめ、クラスメートの中にまぎれる様に足を進

めるも、絶対に由紀江と交わらない彼らの視線に、言葉よりも明確な声が聞き取れてしまふ。

抗議の視線を受けてではなく、視線がないために、由紀江のつま先の向かう方向を曲げていく。

そんな内気で不器用な少女に声をかけてくれたのは、同じ寮の直江大和とその友人の川神一子であつた。

由紀江の顔が上気する。

彼らの計らいで、選手席のすぐ隣、観戦するには最適な場所を提供される。

丁度、観客席と決闘の行われるグラウンドとの中心、由紀江は寄り添うように大和のそばに近づいた。

自分などが注目されているはずがないのが分かつていても、大和たちと一緒にいるだけで、観客の視線が注がれる。

それが重圧となり由紀江を心細くさせる。

そんな状況なのに。

「うおお、オラたちに熱い眼差しが！——でも、C組の奴らだけはこつちを見てないんだな」

木彫りの友人は、いつも通り無神経であった。

涙を流さぬように、自分を奮い立たせ、由紀江は武神とその挑戦者に目をやる。

由紀江の横顔、いつもより少し顎が高くなっていたのに気付いたのは、このグラウンドで、彼女の親友だけだった。



由紀江の眼前には、月面の如くクレーターが広がっている。

これではグラウンドを利用する部活の、週明けの活動に支障が出る。

由紀江の心配は的外れなものではないのだろう。

学園長に詰め寄っている陸上部の顧問だっただろうか、それは続く他の教師の剣幕からもわかる。

決闘は川神百代の勝利で終わった。

由紀江から見て、戦いその物のレベルは決して高いものではなかった。

技術だけに目を向ければ、街のチンピラの喧嘩と大差ないものである。

ただその中で目を見張るものが有ったとすれば、二人の尋常ではない気の運用と、武神の真つ直ぐに好戦的な性格である。

自分の武道には向かない気性を理解している由紀江。

ゆえに、今日の決闘は、その問題点を突き付けられているようで、考え込んでしまう。己のうちに没頭してしまった由紀江を現実に戻したのは、男の野太い叫び声であった。

「騙されるな、そいつは偽物だ！ 誰かそいつを捕まえてくれ！」

剣術に己がすべてを捧げてきた由紀江に、同性の友達はおらず、いわんや、異性のそれがいるはずもない。

つまり、いま彼女の目の前にある、純白のブリーフが由紀江が初めて見る異性の裸である。

頬があつくなり、必要以上の血液が脳に流れ込む。

「まゆうち、冷静になれ。男の裸なんて父親のそれと大差ないぜ！ だから、すぐに柄から手を放すんだ！」

「松風、私は落ち着いています！ こういう時は冷静に携帯で百十番を！」

そういつて、刀の柄を耳に当てる由紀江。

刃は天高く突き上げられ、振り下ろす一步手前にしか見えない。

真つ赤になった彼女の顔もあいまって、その姿は、薩摩示現流を彷彿とさせる。

観客、主に一年C組の方から悲鳴が流れるが、彼女の耳には届かない。

真つ赤になった由紀江は、小声で早口に相棒に質問する。

「松風、電波が悪いのでしようか、いつこうにつながりません!!」

刀を振りかざし念仏の如く何かを唱える女と、身を守るものが、文字通り一つもなく、腰を抜かしたのか青い顔で、その場から、一步も動けない下着一枚の男。

その硬直を解いたのは、由紀江の先輩である直江大和が、体を張って彼女を変態から引き離したこと。

そして見守っていた観客の一人の言葉。

「えっと、あのさつきそこの変態が指さした三人が——」

その生徒の指し示す先、校門に向けて、走っていく面をつけた者たちの後姿であった。



大和が間に入ったことで由紀江の脳が冷静さを取り戻す。

まだ若干、頬に熱は残るものの、視界の端に極力変態を映さぬよう、走っていく三人を見る。

「よし、六番、七番、早くそいつを捕まえるんだ!」

視界の端のブリーフ姿の変態は大声を上げ、存在を主張していた。

裸のまま指しを出す。

どうやら、開き直っているようだ。

そしてその指示は、前を走る三人のうちの二人に向けたものだと思う。

思うというのは、由紀江に確信がないため。

だって由紀江には、三人全員が逃げているように見えるのだ。

由紀江は、友人に尋ねてみる。

「松風、可笑しなことを言います。皆さんの話を総合すると、あの先頭を走っているのが六番で、今、五番を追い抜いたのが七番で間違いないですよね？」

今は六番、七番、五番の並び順で、校門に向かっている。

「ああ、そして、数秒前まで先頭を走っていたのが五番だった。——さてここで問題。逃げ出したのはいったい何番で、それ以外の彼らはどこに向かい、何時になったら彼を捕まえられるのでしょうか？　ただし地球は丸いものとする」

三人の走る方向から考えると、世界を一周しない限り、再会は絶望的だろう。

「ちがう！　お前らの横にいる奴を捕まえろと言っているんだ！　六番！　なんで七番にタックルしている！」

今は三人が走りながら一列に並び、真ん中の者が右端の者に体当たりをしている。

そしてなぜか、左端の者も、真ん中の者に向けて体当たりをしていた。

指示が混迷していた。

まるで三人が三人共、己が何番かをわかっていないみたい。

伝わらぬ指示に、変態は怒声を上げる、ブリーフ一丁のままなのに。

そうこうしているうちに、三人のうちの一人が校門から学外に出て行ってしまった。

そこでようやく変態の指示を理解したようで、残った二人は立てた親指を突き出し、

任せるとばかりに彼の後を追って、学外に出ていった。

それを見送ってから、変態は気が立っているのか近くのお面に罵声を浴びせた、やはり白いブリーフで堂々と。

「おい、お前ら、なんであれが偽者だと気付かない！ チツ、帰ったらしつかり教育してやるから覚悟しろよ！ 大体お前らヴァ——」

変態の話が途中で止まる。

気になったが、またブリーフが目に入るのは避けたかったので、由紀江は耳だけを貸す。

「おお、こりや大変じゃ！ このような怪我で今まで動いておったのか。なんとという精神力じゃ。ワシはこいつを保健室に連れて行く。すまんが後のことは頼んだぞ」

あまり感情のこもらない驚きの声が聞こえた。

そちらに顔を向けると先程、罵声を上げられていた大柄な男が、変態を肩に担いでいるところだった。

由紀江はそこで初めて変態の顔を見た。

白い下着にばかり目が向いてしまっていたが、意識をそこから無理やり外す。すると男の顎骨が異様な方向にずれている事に気がついた。

このような状態で流暢に指示を出していたとは、その痛みたるや並大抵のものではないだろう。

その強さに、由紀江は感服し、胸中で罵っていたことを深く反省する。

「あの、私もお手伝いします。傷の手当の心得も一通り学んでるのでお役に立つはずですよ！」

心優しい由紀江だ、反省すると助力を申し出た。

だが、彼らのプライドがそれを許さないのか、由紀江の提案は固辞されてしまった。すぐに治療が必要なはず。

それなのにあえて施しを断る。

破れた者が慈悲を乞うことの惨めさを許さない。

そこにまた気高さを感じ、由紀江は彼らを見直す。

「——ああ！　そういう事なら私はこのゴミを回収車に、ではなくボスを病院に捨てて

きましよう！」

蛇神の手下のうち、お面の女が、蛇神の片足を持ち、引きずるようにして、校門に向かう。

做うように、それぞれが、宣言し、グラウンドから去っていく。

「僕も逃げた奴を追って、家に帰ることにするよ」

最後に残った男が、グラウンドの野次馬に言い渡すように宣言し、校門に走っていった。

そのあとを、後ろ髪を揺らしながら一子がついていった。

「大和、アタシ気になるから、ついていくことにするわ」

大和に手をふりながら校門の外に彼女の影も消えていく。

その様子を思案したままの直江大和が見送っていた。

当事者の片方である鬼面が全員いなくなったことにより、決闘はお開きになった。

解散する観客、勝利に沸く風間ファミリーの中、百代と大和だけが納得いかないよう

だった。それが何かと尋ねねてもよい物なのか判断がつかない。

だから由紀江は礼を言い、その場を後にすることにした。



自販機で飲み物を買ひ、中庭のベンチで一息をつく。

由紀江が今日の出来事をゆつくり反芻していると、校舎の壁を飛び越え、紅い髪を翻し、少女が眼の前に着地する。

由紀江の入ったことのないファストフードの牛丼屋の袋をもった川神一子は、左右を見回し、ベンチでくつろいでいる後輩に気付き声をかけた。

「あなた、まゆっちだったかしら、あつてるわよね。えっと、お面の男、あの最後に校門を出た子が、こつちに来なかつた？ 見失っちゃつて」

頭を掻きながら、舌をだし、一子が尋ねてくる。

由紀江は口下手で、でも一子は急かすようなことはない。

見ていない旨を伝え、なぜ、逃げたお面の男ではなく彼を追っているのか、疑問をたどたどしく尋ねる。

「もう、しようがない子なのよ、彼。逃げた奴には、早い段階で追いつけたんだけど、曲がり角に来るたびにその子は、逃げた奴とは逆方向に行こうとするの、すごい方向音痴でしょう。だから、迷子にならないようにしっかりとアタシがついてあげてただけど。このあたりでまたその子を見失っちゃつて」

一子は言葉とは裏腹に、どこか自慢げであつた。

その子はおせつかいに見える彼女の自尊心をくすぐつたらしい。

しかし一子の言うとおりにならば、とんでもない方向音痴である。

その後、直江大和との関係を伝え、少しだけ仲良くなることもできた。

名残惜しかったが、一子はまだ捜索を続けるようだし、由紀江の緑茶も空になったので、別れの挨拶をし、足を下駄箱に向ける。

今日一日、探したが、友人予定の彼には、とうとう会えなかった。

明後日になればいやでも教室で会えるのに、由紀江は少し意固地になり、最後のチャンスとばかりに彼の下駄箱をあける。

● 由紀江は今教室に向かっている。

賭けに勝った彼女の足取りは軽く、口角も上がり気味だ。

由紀江の調べでは、彼は部活動に入っていない。

なら、グラウンドのイベントが終わった今、校舎内で彼がいるのは、由紀江たちの教室だろう。

——会える予感がする。

妙な確信が、由紀江の胸に芽生えた。

これは、期待かもしれないし、第六感というやつかもしれない。

そんな、上機嫌の彼女が、窓から見える向かいの教室棟にお面の男の影を見つけたの

は、運が良かったのか、悪かったのか。

あわてて携帯を出すも、

「そうでした、一子さんの番号は登録してませんでした」

「うん、そこは一子のも、だな。家族以外の番号が登録してあるような言い方はやめような、まゆっち」

無情な指摘がなされる。

相方を無視し、思案する。

数秒考えた後、お面の男が空き教室に入るのを見て、とりあえず。彼のもとに向かう事にする。

彼の方を押さえそのあとに、一子を探すのが行き違いがないと由紀江は考えた。

——親しくしてくださいだった先輩に、お礼ができる。

嬉しくなり、空き教室の前に急いでしまう。

由紀江が到着すると、教室の前で三人の男が睨み合っていた。

一年の廊下では見かけない顔なので全員上級生なのだろう。

ちようど、空き教室の入り口を挟むように、二対一の形でいるため、教室に入る事が出来ない。

見ず知らずの上級生の間を通り抜けるほど、由紀江の心臓は強くない。

「九鬼の腰ぎんちゃくの久遠寺と葵が俺の道を阻むんじゃねえよ」

茶髪の青年が鼻息荒く二人を罵倒する。

彼らはあまり仲がよろしくないようだ。

どうすることもできず、由紀江は三人を静観する。

「あん、業突く張りの霧夜は、廊下にすら権利を主張するらしいな。葵、英雄に伝えとけ。そのうち学校の便器ですら自分の物だと言い始めるぞ。落ち着いてくそも出来ねえ」

「まあ、まあ、久遠寺先輩、落ち着いてください。口調がいつもより悪すぎます。霧夜先輩、僕はその教室に用があるだけです、失礼させてもらいます」

そう言つて、二人の間を通り抜けようとする葵を二人が手で制する。

霧夜にだけではなく、仲が悪くなさそうな久遠寺にも止められたことが意外だったのか葵は不思議そうに久遠寺を見た。

答えが返せず、ぼつが悪そうに久遠寺が目をそらす。

「そうかわかったぞ、お前らの目的が。なら、お前らは『誰』なんだ。」

目的が分かったと言っているのに、相手のことを問うといった意味不明の質問。

廊下の陰から様子を窺っていた由紀江が首をかしげる。

質問を受けた二人は心当たりがあるのか、ないのか、全く変わらない表情で、由紀江では、その心中を判断することはできない。

由紀江が頭を捻っていたその時、相手の目的を判断できたと、余裕を持ってしまった霧夜の隙をついて久遠寺が行動を起こした。

『おい、鬼面の幹部さんよ！ そこにいるは分かっているんだ。もうここに武神も向っている。袋の鼠だ！ 観念しな！』

空き教室の壁を乱暴にたたき、大声を上げる。

由紀江には意味が分からなかったが、焦った霧夜が久遠寺を押しつけ、教室のドアを乱暴に開いた。

開くと、霧夜に続き、二人もそれを追う。

どさくさに紛れ由紀江も教室に入るが、そこには三人以外誰もおらず、開いた窓から、風が流れ込みカーテンを揺らしていた。

「やってくれたな、久遠寺！ てめえ、今日のことは覚えておけよ！」

机を蹴飛ばし、霧夜が教室を出ていく。

「百代先輩がここに？」

「いや、ただのハッターだ。武神と渡り合うような悪党がいると思うと一般人な俺は怖くてな。つい、かましてしまった。ところで、葵、お前の方の用事は良いのか？」

「ええ、僕の方の用事は先程終わりました。鬼面の方が残っていると怖いので、僕もこれで失礼させていただきます」

そういうと、葵は微笑み、久遠寺と共に教室を出て行つた。

「松風、どうやら気づかれなかつたみたいですね。」

戻つてきた先輩方の邪魔にならぬよう、教室の壁に張り付いていた由紀江が、友人に同意を求める。

「いや、全員変なものを見る目で、まゆつちのこと見てたからな！」

——ですよね。

否定してほしかつたが、三人とも由紀江のことを無視していたのだろう。気づいているなら、せめて咎める位はして欲しかつた。

同級生に続き、上級生にまで。

帰り際、葵だけが少し困つた笑顔で手を振つてくれたのが、せめてもの救いだ。

それだけを心に刻み、トボトボと玄関に戻る。

下駄箱を確認すると紅葉の上靴がなくなつていた。

——予感の外れ。

「——松風、帰ります」

当初の目的が何一つ果たせず、由紀江は肩を落とし家路につくのだった。

『おい、鬼面の幹部さんよ！　そこにいるは分かてるんだ。もうここに武神も向っている。袋の鼠だ！　観念しな！』

紅葉の背筋が凍りつく。

その言葉を聞き、脊椎反射で三階の窓から飛び出した。

自分をしつこく追ってきたポニーテールの上級生をやつと撒いて休憩しようかと、空き教室についた数分後の出来事である。

決闘の後の逃走。

笑顔で親切に何度も道を教えてくれる川神一子、十割善意のみで行動する人間を紅葉は初めて見た。

曲がり角に来るたび、紅葉は何か逃げようとするのだが、それでもついてくる彼女を振り切るのに全力を出すのは気が引けてしまった。

もしか、これは親切の皮を被った、意地悪なのではと疑いもした。

だが、悪人の顔から悪意が滲み出してしまうように、善人である一子の表情には素直な善意が溢れている。

これほどのものであれば、紅葉でも疑うことが馬鹿らしいと思えてくる。

だからといって、いつまでも追いかけては、困ってしまう。

結局、牛井屋で飯をおごると言い代金を払い、素直に騙されてくれた一子を置いて走って逃げることにした。

商品が来るまで、律儀に待ち続けた彼女に、珍しく紅葉の良心がチクチクと痛む。

——少しくらいは疑ってくれても。

初対面の紅葉の言葉を素直に受け入れ、はしやぎ喜ぶ姿。

——いや、面を被っているの、正確には対面すらしていない。

振り返れば、一子は嬉しそうに牛井の容器から漂う匂いを楽しんでいる。

それを見て、騙した事実が、少しだけ和らいだ。

一子を撒くため、川神を出鱈目に走っていた。

紅葉は目的地を考える。

全力で走ったわけではないが、朝から活動的な日だった。

落ち着ける場所に行きたい。

そう考えると、この牛井チエーンは、川神学院から遠くない。

しばらくくつろぐ為、入った空き教室。

そこで先程の声だった。

庭に着地したその足で、横っ飛びをかまし植木の影に隠れる。

心臓の鼓動が早い。

顔だけだして、川神百代がやってこないか、右に左に目を凝らす。紅葉が猫であれば、耳を後ろに向けて寝かせていたことだろう。

そして不意に気付く。

今日手に入れた一枚の紙切れの存在に。

——ああ、逃げる必要などなかったのだ。

もう百代が紅葉に危害を加えることはできない。

この紙は、霊験あらたかなお守り。

とり出したそれを眺め、満足した後、きれいに伸ばし再びカバンの中に。

——紅葉は今日の勝利を表現するため、握った拳を強く天に突き上げた。

そして、そろーり、そろーりと、足音を忍ばせ、植木から離れる。

無意識に警戒は続けてしまう。

下駄箱に戻り、靴をはきかえ家路につく。

その途中にお面をフリスビーの要領で、川に投げ捨てた。

これでもう明日から、こそこそ生きなくていい。

達成感から、緊張が解けお腹が鳴る。

家路にて紅葉は今日の夕食に思いを馳せた。

決闘の翌日、日曜の朝、寝坊した紅葉に、台所の母が苦笑している。

遅めの昼食をとる息子。母はひどい寝癖を直すよう、己の髪を指した。

紅葉は苦めのコーヒーを飲み干した。

それでも覚めぬ眠気に、洗面台に向かう。

半覚醒のまま、家の電話が鳴るのを聞きながら髪を整えた。

「紅葉、あなた、同級生の——君で知ってる？ 昨日から帰宅してないらしくって、確認

したいんですって」

学院からの連絡。

紅葉の聞き覚えのない名前だった。

母に一日二日の外泊くらい今どきの高校生ならそう珍しくないのでは、と尋ねてみ

る。

だが、無断外泊をしているのは彼一人ではないらしい。

川神学園の生徒十数人が昨日から帰宅してないらしいのだ。

一人二人なら、事件性は低いが、これほどの人数になるとそうは言ってもらえない。

川神には、青少年に対して悪い誘惑や、治安が悪い場所も少なくはない。

紅葉の胸中、予感があつた。

行方不明者の居場所に心当たりがあったわけではない。

だが、あの動画の投稿に、そして蛇神の登場。

事件が続けば、その流れを誰かが意図しているように思えてくるのだ。

きつとこれは、次の事件の前触れなのかもしれない。

紅葉にはある種の確信があった。

「ねえ、紅葉。ガムテープどこに行ったか知らない？ ダンボールを蓋するのに使いた
いんだけど」

——行方不明者の内、二人の行方が分かった。

確信は、勘違いだった。

問話 勤労少年

決闘の日から数日、友人が出来ないこと以外は平凡な日々が続いていた。

あの日以来、転校、不登校の生徒が増えたらしいが、その原因については、その関係者全員が揃って口を閉ざしている、というまことしやかな噂が生徒の間で流れたらしい。

らしい、というのは、廊下での立ち話がたまたま間接的に耳に入ってしまったのであって、友人のいない紅葉には詳細がわからないからである。

物騒な噂が流れる中、紅葉といえば、苦労の末に手に入れた免罪符を振りかざし、教室の下位カーストで革命を起こすことを考えもした。

だが、もともと人付き合いが多い方ではない紅葉にとつては、面倒くさくもあつた。週末の自宅、居間に家族三人がくつろいでいる。

母は三人分の緑茶を入れ、それぞれの手元に置いた。

ちやつかり自分の前にだけ、皿に盛られたおはぎを置くが、いつものことなので父と息子はそれを咎めることはない。

テレビには紅葉と同年代のアイドルグループが、番組の撮影中に動物園の虎に噛みつかれ重傷だという何とも言えないニュースが流れている。

BGM代わりに流しているだけなので三人の内の誰も言及することはない。

父はテーブルに載せたノートPCとにらめっこをしていた。

昔なじみの裏通りなどをうろつき、見つけた明日の日雇いのバイトのスケジュールを確認し終えやることのない紅葉は、父の態度に興味を持ち尋ねてみた。

「ああ、これかい。明日、お上が発注した大規模な工事の入札日なんだよ。僕の会社は直接関わっているわけではないんだけどね。興味があるのかい？」

普段、父の仕事に興味を示さない息子が示した珍しい行動に、父は懇切丁寧に、且つ、簡潔に説明してくれた。

十中八九、九鬼財閥の関連会社がとることが決まっているそうだ。

九鬼といえば、社会生活を送るまでの猶予期間であり、経済に何の関心のない高校生でも、認知している大企業である。

本来であれば、正当に、提示金額が最も近い入札をしたものに工事が発注されるものなのだが、建設業界の昔からの慣習により、横のつながりが果てしなく広く、昔ながらの地盤が固い九鬼に決まりなんだと父は言う。

無駄に価格争いをするにより利益が減るのを防ぐためである。

すでに、決まっていることに、父は頭を悩ませていたのだろうか、そう問えば、PCの画面を指で軽くたたく。

画面を覗くと、小難しい肩書を背負ったおっさんのコラムが表示されていた。

文章をざっと斜めに読むと、九鬼の他に、霧夜カンパニーの名が記されていた。

九鬼と同じく霧夜も一般に広く認知されている。

どうやら明日の入札に対しての記事らしい。

実質この二大巨頭の争いになると、筆者は語っている。

父も同意見なのだろう、画面を畳み、紅葉の疑問に答えてくれた。

「ああ、確かに、明日の入札の勝ちは九鬼に決まりなんだ。なのに、霧夜が名乗りを上げているのをみんな、疑問視しているんだ。霧夜の歴史は九鬼ほど古くなく、そのうえ、川神に顔が利くわけでもない。二つの企業が顔を出せば、みな九鬼に尻尾を振るだろう。そんなことは霧夜もわかっているはずなのに、今回の入札に臨んでいる。そこに一抹の疑念が残るんだ」

父は眉間にしわを寄せ、霧夜について話してくる。

成り上がりの霧夜。

紅葉は知らなかったが、数代でぐんぐんと業績を伸ばしていく彼らは、業界でそう擲擧されている。

豊富な資本を盾に強引に、禿鷹の如く根こそぎ奪っていく。

時にはネタを使い脅し、時には実弾をばらまき、そういつた汚さから、そう呼ばれるようになった。

事実、数多くの会社を彼らは乗っ取り、悪名をはせている。

だからこそ狡猾で、端的に表して負けず嫌いの霧夜がこの入札にいるのは不可解であった。

実弾をばらまこうにも、血族の信頼で固められた九鬼には、そして忠義で結ばれた傘下には効果が薄く、脅しにも、それ相応の対策がとられているため、意味はない。

霧夜はジョーカーを隠している、そう父は目を輝かせ息子に語る。

——なんだ、只の好奇心なのか。

一家の大黒柱が真剣な顔を晒していたので、もしや、我が家に影響のある事なのかと真剣に聞いていたのだが、当てが外れた。

母は、長年の付き合いから、そのことに気付いていたのだろう、話につき合わされる前に、キッチンの方に消えていた。

まだ話したりないといった父に、明日のバイトが早朝であることを理由に、紅葉は席を外す。去っていく息子に意気消沈した父を見かねたのか、お盆に酒とつまみを載せた母が紅葉と入れ替わりに居間に入ってしまった。

大黒柱の話をして息子が半分、母が半分と受け持つ、いつもの土曜日が過ぎて行つた。

電気が通っているのかすら不安になる田舎風景が続く。

早朝、いや深夜といった方が正しいだろう、駅近くのコンビニに集合し、そこから、ワゴンボックスに乗り、どンドン山奥に入っていく。

集落につくと、活気にあふれる老人たちが紅葉達、アルバイト勢を迎えてくれた。

かやぶきの屋根の下、老人たちが草を刈り取るのを、老婆が漬けた沢庵をつまみながら、眺めていた。

いかにもな田舎に、深呼吸をし、空気を味わう。

この集落は、過疎にも負けないといった意気込みを感じさせる。

刈入れが終わつたそばから横の小屋で、箱詰めにされた物を大切に少年は背負う、これもまた大きな箱に入れられていた。

ここまで運転してきたバイト先の人間がそれぞれに地図を配り、注意事項を説明し、移動の手段である自転車小屋から出した。

紅葉は地図に書かれた経路、目的地を確認するとロードバイクに跨り、一路、川神市を目指しペダルを踏んだ。

時刻は正午をまわったところ、雲が出ているため日差しは強くなく、風もあるのでサイクリングには最適だ。

自慢の脚のお蔭で、十一時ごろには川神市に入る事が出来た。

決められたルートを走らなければいけないのもう少し時間がかかると踏んでいたのだが、杞憂に終わったようだ。

ママチャリ等とは、速度が違うこの自転車に、バイト代が出たら通学用に買うのもいいかもしれないと、紅葉は心の中で検討する。

悩む少年の視界のさき、前方の道を走ってくる顔見知りがあった。

彼女は川神学園で数少ない紅葉の知り合いだ。

確か、二年生だったはず、向こうはこちらに気付いていない。

失礼のないように大きめの声であいさつをする。

紅葉に気付いたのか、澆刺とした彼女は休日にもかかわらず学園指定の体操着を着ていた。

快活に返してくれたのだが、少年の顔を確認すると彼女の顔が曇る。

「ええっと、確かクリが転校してきた日に一緒に登校して来た子よね？　ごめんなさい、アタシ、名前を憶えてなくて」

彼女はポニーテールを垂らし、頭を下げる。

本当に申し訳ないといった様子の彼女に紅葉も慌ててしまう。

別段、失礼といったことでもないのだ。

紅葉が道に迷っていた時に、たまたま居合わせた彼女が丁寧な案内をしてくれた、只それだけの事のはずだ。

一生懸命に、そして彼女の大切な時間を、初対面の紅葉に使ってくれた事、それが嬉しかった。

寂しい学園生活を送っている少年には、とても大きな変化であったのだが、彼女にとつては日常の一つでしかなかったのだろう。

それが、悲しいという事はなく、出会ったばかりの人だろうが、かわらずに優しさを注ぐ彼女の人柄に、逆に期待してしまう。

「えっと、あなたが迷子に？ 御免なさい、憶えてないわ。——うん、でも大丈夫！ 今度は忘れないから、じゃあ改めて、アタシは川神一子、二年F組よ 一子と呼んでくれていいわ」

そういうえば、紅葉も名前は覚えていなかった、いや、もしかしたら互いに名乗っていなかったのかもしれない。

頼りにならない自分の頭をかるくたたき下げる。

「二年C組、荒場紅葉です、よろしくお願いします一子先輩！」

一子はなぜか頬を紅潮させていた。

彼女は大きな動作で胸をたたくと、とびきりの笑顔で宣言する。

「何かあったら、すぐにアタシのところに来るといいわ、この川神一子『先輩』が全部解決してあげる！　どんと任せなさい！」

彼女の言葉に、学園で初めての人のつながりが出来たことに気付く。

その幸運をしつかり噛みしめた。

感動している紅葉に、彼女は申し訳なさそうに、別れを告げる。

日課のジョギングの途中だったそうだ。

腰に巻かれた紐の先、三つの自動車用の廃タイヤが繋がっている。

休日にこのようなことをしているという事は、彼女は部活にでも所属しており、その訓練なのだろう。

尋ねると、武術の修行の一つだと話してくれた。

武術という単語と川神という名字からまるで、百代を連想させるが、そんな偶然があるはずもなく、こちらもバイトの配達時刻が決まっているため、あいさつを交わし別れる。

今日はもしかしたら今年始まって以来のラッキーデーかもしれないと笑顔を浮かべる紅葉。

そういうえば記憶の中では、彼女に道案内してもらった筈なのに、肝心の目的地が思い出せない。

出会いのインパクトが強すぎて、細かいことを忘れることはおかしいことではない、と自分に言い聞かせた。

●
川神市内は変人が集まりやすいのだろうか、休日の昼、紅葉は色々な人とすれ違う。メイドの格好をした、メイドらしき何かや、執事の格好をした、執事のような何か。一人二人なら本職の方かもしれないが、こうもすれ違うと大半が、まがい物に見えてくる。

一部の金持ちや、特殊な嗜好の方を除いたら、後は趣味の人が大半だといわれる業界のため、今日見られる大量の彼らも偽者に違いない。

紅葉に理由はわからないが、そういったイベントでも開催されているのだろう。

担いだ箱が、ぶつからないよう、慎重に目的地に自転車を走らせる。

市街からだいぶ離れ、ガラの悪い連中がたむろしている工業地帯、ここが配達の目的地だ。

バイト自体、ここで声をかけられたものである。

揉み手で近寄るかつらの男に高額の日雇いがあると声をかけられた。

もともとそれが目的で散歩していた紅葉は二つ返事で承、提示された額の大きさにやはりここで探して正解だったと手をたたく。

鬼面時代に、蛇神が吹聴しているのを横で聞いていたのだが、それが役に立つとは思わなかった。

老人たちが働いていたのを考えるとそこまで、胡散くさいバイトではないのかもしれないと、考えなおす。

バイトの額が額だけに、あやしい仕事かと睨んでいたのも、いささか拍子抜けだった。一子と別れて十分ほどで地図に書かれている小汚い事務所に着いた。

自転車の一つも止まっていないことから、少年が一番乗りなのだろう。

挨拶をし、正面の扉をあけ、中に入る。

事務所の中は、所々に汚れが目立ち、余り仕事をするのに良い環境とは言えない。

机や机すがひっくり返り散乱しており、昼間から床で寝ている所員までいる。

眉を顰め、起きている人はいないのかとあたりを見回す。

奥の部屋から、灰色のYシャツを着古した軽薄そうな男が男が姿を現す。

年のころは三十前半といったところか、短めの髪に、血の気が薄くどこかくすんだ灰色の肌。

男はこちらに気付くと、へらへらした薄っぺらい笑みを張り付け近づいてくる。

「ああ、兄ちゃん、この事務所はさつきつぶれたんだぜ、何か用でもあったのかい！」
言葉と同時に男の右ストレートが紅葉の顎めがけ放たれた。

それをしつかりと認識してから、振り上げた少年の左足の裏が男の拳を受ける。

男はそれが意外だったのか、口笛を吹き口の端を緩めた。

「やあ、わりいな、蚊が飛んでたんだ、兄ちゃん。ブンブンとなあ」

それは奇遇だ、紅葉の足の裏にも大きなハエがくつついている。

このまま潰しても構わないだろう。

男はがたいが悪いわけではないが、かといつてたいしてよくもない。

身長も紅葉とあまり変わらず、服装から考えるに、街のチンピラふぜいといったところだ。

ヤクザならあとが面倒だが、彼らは身なりにはきちんと気を遣い、それをステータスの一部としているので、目の前の男がヤクザではないと明確な根拠になる。

意外に力持ちなのだろうか、紅葉の脚を押し返すことは出来ないが、その場で持ちこたえ拮抗を保っていた。

「おい、何遊んでんだ？ 商品の積み込みが終わったぞ。あんだ、おまえ、ここの組員か？ にしちや、ちよいと若いな」

争う二人をそのままに左奥の扉が開き、長髪の若い男が顔を出す。

黒のタンクトップに長髪、むき出しの方には刺青が施されている。

男は精悍さと野生の溢れる顔をゆがめ紅葉を見た。

ズボンのベルトを締め直して、少年の方に歩いてくる。

「おい、竜兵。亜巳と天の方から連絡が届いたぞ。こつちも退散だ。にいちゃん、そういう訳だから勘弁してくれねえかな？」

そういつた男の腕が収められ、紅葉は同時に足を引く。

奥から出てきた男は用心棒だろうか、この中年の男性よりも余程そういった暴力の匂いが漂っている。

鬼面のメンバーは当時、猛威を振るっていた弊害か、その無敵さ故に、相手の実力を図るといった能力が退化してしまった。

そのために観察と思考から、彼等の実力を判断しなければいけない。

若い男は薄着のため鍛えられた肉体が分かりやすい、今もこちらを威嚇していることから、自分の力に自身があるのだろう。

とすると、単純な喧嘩屋か、もしくはボクサーか空手やくずれの可能性がある。

他の格闘技はそれらに比べるとマイナーになるので路上の喧嘩で使う者はまず居ない。

そしてこの事務所に転がるブチのめされた輩がいることから、相当な強さだと考えら

れる。

それにもう一人のチンピラにしか見えない男も長髪の男以上ということはないが、軽くとはいえ紅葉の圧力を迎え撃つたのだ、警戒した方がいいだろう。

蹴り足を後ろの下げ、いつでも飛びかかれるようバネを蓄える。

こちらが戦闘態勢に入ったことに気づいたのか若い男のほうが口の端を釣り上げる。「やめろ、竜兵、お前じや逆さになつても敵わねえよ。なんせ全力じゃないとはいえ俺の拳を受け止めたんだからよ」

開戦のゴングは、大物ぶつた振る舞いをする男によつて止められた。

力関係が下にあるのか、長髪の男がしぶしぶといったていではあつたが素直に引く。

紅葉はそれ見て、彼等の関係が、ヤクザとボディガードのようなものだろうと推測をつけた。

「なあ、あんたも悪かつたな。ちよつとこの事務所を潰している最中でよ、気が立つてたんだ、許してくれよ。ん、ところであんたはなんの用でここに来たんだ？ 関係者以外は頼まれても入ってくるような奴はいないと思うんだが」

潰れた、その言葉をもう一度聞き、軽く力が抜ける。

先ほど聞いたのは空耳ではなかつたようだ。

バイト先の事務所が潰れたら、どこで給金を貰えばいいのだろうか。

少年は今日半日の労働が無駄になるかもしれないと途方に暮れる。

こちらを見ていた中年の男が尋ねるので事情を話すと、気の毒にと笑いながら肩を叩かれた。

その言葉に向ける紅葉の殺意を気にするでもなく、彼は近くに倒れていたスキンヘッドの血まみれの男の腹を蹴った。

剃り上げた頭の男が倒れたままか細い声でしか喋れない事に文句をつけながらも、バイト代の話をつけてくれている——なんと優しい人なのだど紅葉は感動する。

中年もといジェントルマンは事務所の机から分厚い封筒を見つけると紅葉に放つてよこした。

「ああ、それがバイト代だよ。ただ、お前さんの分を抜いたらこっちに返してもらえるか。その金も俺らの儲けになるんだからよ」

紳士の暖かい言葉に異存があるはずもなく封筒の中身を確認する。

三十枚の紙幣が入っている、たしか紅葉以外の人間が九人おり、一人頭三万円が今日のバイト代になるはずだった。

十五枚を封筒に残し彼に返す。

さあ、帰ろう、少年は労働の喜びである元気を握り締め、心地よい疲労感に酔いしれる。

「なあ、そう、早足で帰ることもないだろう、ちよつと待つてろ、おみやげもつけてやるよ」

呼び止められたことに驚いたが、気にせずに紳士は奥の部屋に入っていく。

この上おみやげまでもらつてしまつては申し訳ない、紅葉は遠慮しつつも、勇んで受け取るため男に続く。

部屋にはいると1.5m四方の箱が三つ置いてある。

一つを除いて紅葉が持つてきた箱と酷似していた。

「さあ、運試しだ、好きな箱を選びな！ ただし家に帰るまで絶対に中は見ないこと、そのほうが面白いだろう」

紳士は笑顔を浮かべ、こちらの答えを待つている。

改めて箱を見る、デザインに関して言えば正直ふざけているとしか言えない。

共通しているのは妙に凝つた意匠、石造りをしているように見えるが、紅葉の運んだものと同様に軽い素材を偽装したものであるのだろう。

箱の中央に星座のシンボルが描かれていることが、真剣味を感じられない最たる原因だ。

因みに少年の持つてきたものにはペガサスが描かれており、こちらの三つにはそれぞれ、天秤、獅子、蟹が描かれている。

バイトの説明で警察に職務質問された際は、ギリシヤから来たので日本語がわかりません、と言って走って逃げるように指示を受けている。

よく考えると潰れるべくして潰れたのだなど紅葉は納得した。

男に急かされ、箱のほうを見ると二つばかり蓋がずれ、中身が覗けるではないか。

一目見れば気づきそうなものだがどうしてか男はそれを指摘しない。

これは好機、しめしめとほくそ笑み中身を確認する。

一つ目の箱はいらない、中身はモデルガンだった。

最近のモデルガンらしく本物志向であり、おそらく火も出るし、弾も飛び出すのだから、一介の高校生には必要ない。

二つ目の箱の中身は、小麦粉の原料の葉っぱが大量に詰められている。

グラムあたり数万円するという高級な小麦粉が取れるのだろうか、料理は、母の領分なので関係ない。中毒性も怖いので遠慮する。

とすると三つ目しか無いのだが、蓋が開いていない。

開いていないのだが、中身は容易に想像がつく。

この一つだけが白い発泡スチロールで出来ており、蟹のイラストもプリントされたものだ、十中八九、蟹が入っている。

大きさからいって四、五杯はあるか。

家族でわけあっても十分な量であり、紅葉はこれを選んだ。

選んだ瞬間、男性の笑みが濃くなったが、一緒に喜んでくれたのだろうと少年は気にも留めない。

蟹の入っているであろう箱を背負い事務所を出るとき中年がサングラスとマスクをくれた。

ここらあたりは空気が悪いので付けていくように忠告される。

礼を言い、ついでに気になっていたことを尋ねてみた。

彼らが、債権の取り立て業者か何かなのかと。

「ああ、金目の物を回収するという点では似たようなもんさ。まあ、借金のないところからもしつかり実力で頂戴するっていう珍しい仕事さ」

それはたしかに珍しい。何事にも専門職というのがあるものだ。

中年の言葉を聞いて感心する紅葉に、長髪の男が爆笑して頷いている。

蟹の礼を言い、勤労の励ましの言葉を送り事務所を後にした。

今夜はごちそうだ、高鳴る鼓動のままに家路を急いだ。



少女の話をしよう。

九鬼財閥の次女であり、容姿に優れ、才を授かり、歳の離れた兄妹の愛情を受けた少女の話。

彼女は努力家であつた、故に才に溺れることなく将来はどの分野においても一角の人物になるだろう。

彼女は人を見抜く目を持っていた、故に未来において彼女の傍には優秀なものが付き従ふことだろう。

彼女には優しさと一途さがあつた、だから将来良き伴侶に恵まれることだろう。

そう、未来においては。

今、現在の彼女の小さな背とその手では掴める物があまりにも少なすぎた。

いや、それでも同年代の者に比すれば、多くはあれ、少ないということはないだろう。

しかし彼女の才の一つである慧眼からすれば、掴んだものはあまりにも小さいように思えた。

自分を受け入れてくれた九鬼家の人間に返すには微々たるものにすぎないと。

彼女は九鬼当主の妾腹の子であつた。

かと言ってそのことを気にしている人間は居ない。兄も姉も惜しみない愛情を注いでくれ、父も義理の母も卑下することはないと紋白に言い聞かせた。

故に彼女は深く恩を感じる。

彼女に送られた愛情に見合った何かを探さずにはいられない。

子供はただ享受するだけで良いのだ。ただ与えられたもの血肉とし、健やかに育つこと、それこそが何よりの恩返しになるのだ。

賢い彼女はそれが理解できるほどに大人であったが、それを我慢できない程度に子供であった。

だから幸せな少女、九鬼紋白は今日も己が研鑽に精を出すはずだった。

そう、手足を縛られ、光一つ射さない暗闇の中でなければ。

紋白は思う、今、自分がどういふ状況にあるのかを。

麻酔を嗅がされたのか、気づいた時には後ろ手を縛られ猿轡を噛まされているため助けを呼ぶことも出来ない。

油断は確かにあった。だが、紋白の傍には九鬼の従者部隊最強のヒュームが控えており、彼の警護を突破できるはずがない。

老人でありながら、その強さは衰えることなく金の髪をなびかせ、幾つもの敵を屠ってきた。

ならば、考えられる結論は一つ彼にミスがあったのではない。紋白がなにか失態を犯したのだ。

そう結論づけ、猿轡の上から歯を食いしばる。

自分は家族の足手まといになった、慚愧の念が心細い心中に広がる。涙が頬を伝わり、乾く暇もなくまた流れる。

今日は姉の仕事の大事な入札の日だ。

紋白を誘拐した者の目的はそれの辞退に違いない。

それに気づくと紋白の中に火が灯った。

失態を恥じる気持ちより、誘拐された事実より、たった今、危機的状況にあるのが自分だけではないことに。

大切に尊敬する姉の道すらも阻まれようとしていることに、少女の心が燃え上がる。

そうだ、時間を知らなければ、入札の時間がまだ過ぎていないことを願う、そして隙をつき逃げ出し、九鬼の人間に無事を伝えるのだ。

姉のために、いいや自分のため、家族のため、絶対に切り抜けてみせる。

決意した少女の頭上から光が射す。

突然の光に丸まったからだを震わせ、紋白は恐る恐る天を見た。

誘拐した一味の人間が戻ってきたのか、紋白は震えを意思で抑え、勇気を振り絞る。

兄妹の顔を胸の支えにし、これから行われるどんな辱めや拷問にも耐えてみせると、少女は覚悟する。

光が当てられたことで気づいたが紋白はとても狭い場所に閉じ込められていた。

頭上から覗き込むサングラスの怪しげな男が、紋白の手と足を指さし呟いた。

「二杯しか居ないのか、足は四本しか無いし、爪もない。味噌は父さんたちが食べるとして、まあ、これだけ大きければ満足いくまで食べれるかな？ 大味じゃないといいけど」

——自分は食べられてしまうのだろうか、拷問による死も覚悟していた少女であったが、食人主義の異常者を前に、胸に灯した火はとて小さいものと思えた。

間話 由紀江の苦惱、みんなの苦惱、紅葉の苦惱

● 多馬川のほとり、サングラスの少年と拘束された少女が見つめあつたまま、数分が過ぎた。

最も、少女は箱に入れられているため、はたから見れば、少年が蟹入りのケースを前に深刻な顔をしているシュールな光景でしか無い。

拘束された少女、九鬼紋白は相手の出方を伺っていた。

猿轡がきつく締められており、声も出せず、出来る事といえば、瞳に抵抗の意思を込め睨むだけ。

少年からなんの反応もないことに首を傾げるも、沈黙で威圧を与えるような類いのいやがらせにも思えない。

流石に少女を食べるなどといった言葉は、紋白の聞き間違いか、冗談だったのだろう。

少年のサングラス越しの瞳からでも、正常な人間の理性が感じ取れる。
であるならなにか要求があるはずだ。

紋白は先程からじっと待っているのだが、一向に何も口に出さない少年に、ただ時間

がすぎるだけだった。

誰にともなく少年がつぶやく。

「蟹、つぶくないんだが、蟹、ですか？ ——返答がないので、少し変わった蟹というこ

とにして処理」

紋白の優秀な脳が停止した、質問の意味が理解出来ず、対象が自分であるかもわからない。

ただ、最後に残っていた本能の警鐘が彼女を逸らせ、頭を振って必死にアピールする。

紋白は思う、質問するのなら、せめて、口の縄をずらすぐらいしろと。



猿轡を外されようやく一息をつく。

少年の供述の結果、誘拐犯とは全くの無関係であると主張してきた。

重要な役割を果たす人質を運搬しておいて、その言い訳はないだろう。

当然、少女が信じるわけもなく、白い目が少年に向かう。

しかし、紋白が頼れる人間が彼しかない現状、悪人であるかの判断は保留する。

あの暗闇の中の誓いを胸に、少年にここから近い九鬼財閥極東本部まで送り届けても

らえないか交渉する。

少女の懇願を無視し、無慈悲にも少年は否と答える。

なぜ、と理由を問えば、『失くした蟹を取り戻す旅にでなければいけない』と重い声音で答えてくれた。

さも重要であると宣言されたので、納得しかけた紋白であったが、聞き間違いかと思ひ再度尋ねる。

帰つてきた答えは同様の物であった。

紋白は彼が今この時がどういう場であるか理解できてないことに気づき、彼の話してくれた今日一日の行動から、この箱には最初から蟹など入っていないなかつたことを懇切丁寧に説明する。

紋白の説明に、少年は得心がいったと、表情を変えた後、なにか思いついたようだ。誘拐犯のことで、気が付いたことでもあつたのだろうか、紋白は先を促す。

「つまり、ここに来るまでに襲つてきた輩の何割かは蟹じゃなくて、あんたが目当てだったんだな！」

こちらに向けた得意気な顔は、紋白が賞賛するのでも待っているのだろうか。何割かではなく、全てが紋白の身柄を狙っていたに決まっている。

自分の暮らす国が海産物のために野盗が横行するような、民度の低い世紀末な場所ではないと信じたい。

だが少年の言を信じるならば、紋白を狙つた輩を彼が一人で撃退したことになる。

これはいよいよ彼に頼らざるをえない。

紋白が報酬を盾にし、彼を説得しようとして顔を上げれば、丁度箱の蓋が閉じられるところだった。

焦り、声を上げる。少女が言葉を出さないので交渉は終わったものと置き去りにするつもりだったようだ。

「断る、この僕を金品で動く下賤の輩と見てもらっては困る、買収なんかに応じる安い誇りは持ち合わせていない！」

少年の宣言に紋白は感心し、高潔な精神の持ち主だと、ますます彼を味方につける意思を硬くする。

少女は知る由もないが、普段の彼なら一も二もなく、やせ狼のごとく喰らいついてきたことだろう、偶々、少年の懐を、十五人の老紳士が暖め、鉄壁を築いていたのだ。

大体、現在進行形でか弱い少女を置き去りにしようとしている人間が高潔なそれを所有しているはずがない、そこに気づかない紋白も大分精神が疲弊している。

まとまらない交渉に痺れを切らしたのか、少年が箱ごと紋白を持ち上げた。

取まりの悪い浮遊感を感じながら、紋白の期待が膨らむ、本部のある人工島に連れていってくれる決心がついたのだろうか。

蓋が閉じられたので、外の様子は分からない、紋白としては、拘束を外し、連れ立つ

形で隣を歩いたほうが、手間がかからないと思うのだが。

少女の容姿は目立つのでそこを考慮しての行動だろうか。

「あのさ、桃太郎って知ってる？　そう、昔話の。彼って幸せだったのかな？」

箱の外の少年が世間話なのか、少女に他愛もない事を訊ねてきた。

母に、義理ではなく実母に、読み聞かせてもらったことを紋白は思い出す。

桃から生まれた男の子が、育ててもらった恩を返すために、鬼を討伐し、宝物を持ち帰る、要点をかいつまむとこの様な話になる。

幸せだったか問われれば、話の筋を考えるに、是と答え、紋白の心情としても、血の繋がらない子供が恩を返せたことに自分を重ね、これまた幸福だと答える。

少女の回答を聞き、満足した気配が彼の言葉に滲み出る。

不意に、少女は気づく、先程から臀部の下から感じる浮遊感が、いつの間にか単調であつたものから不規則なものに変わっていることに。

「そっか、いい翁に拾われるよう、心より願っておくから」

閃くものがあり、その場で跳ね上がり箱の蓋を頭突きで開く。

今まさに、多馬川に少女を不法投棄しようとしている少年は紋白から目を逸らした。

このような行いをする人間に非道なことをしている自覚があつたことに驚きだ。

蟹のデザインだからといって海に返すつもりだったのだろうか。

少女は己で動くことこそが肝要であると気づく。文字通り他人に流されかける事によつて。

少女の誠意が通じたのか、はたまた、問答が面倒くさくなつたのか、少年は紋白の入つた箱を担ぎ、走りだす。

「姥捨て山つて知つてる？」

——知つているが、山にでも捨ててつもりなのだろうか。ちなみに、姥捨て山では老婆は決して捨てられていない。

不穏な単語が散りばめられた会話を楽しむ余裕が有るはずもなく、紋白は彼を急かした。

少年の足の早さは、箱の中の紋白にかかる、加速度による苦しきから想像がつく。

これならばと、紋白の期待が膨らむ、刺客の勢力圏を抜けるのにもさして時間はかからないだろう。

人工島が近づくに連れ、刺客の妨害が始まつた。

紋白は箱の中に居たので直接見た訳ではないが、マシンガンのマズルフラッシュが箱をすり抜け、入つてきたり、葉莖の転がる金属音から戦いが相当の激しいものだと推測がついた。

そのすべてを退けてきた彼に紋白は驚嘆する。

ただ、事が起こるたび、少女にかかる重力加速に、吐き気と弱音が出そうだった。

「——すまないが、もう少し私のことも気遣ってもらえないだろうか——」

このままでは箱の中、閉じた密室で、紋白が偉いことになりかねない。

危急の時ではあるのだが女性の嗜みとして、優雅とは言わないまでも、無様で醜悪なもの避けたい。

天秤にかけた結果、速度を落とすよう要請しようとしたその時、無常にも今までで最大の加速が少女の身に振りかかる。

何事だろうか、頭を上げると込み上げる物があり、続く耳鳴りのため、外の様子を推量するのも一苦勞であった。

箱の外の少年には気づいてもらえないが蒼白な顔で紋白が尋ねる。

「ああ、少し厄介なのに追われているんだ、振り切るからしばらく待つてくれ」

敵の刺客、それも彼がこちらに忠告をするほどの相手のようだ。

刺客の攻撃によるものより、振り回される肉体的、精神的負担のほうが先に頭をもたげる。

そろそろ辞世の句が紋白の頭の中をよぎる。

「デパートの屋上に登ったんだから、もう付いてこれないだろ——悪い、まだ追つてく

る、一階に戻る」

当然デパートの昇り降りに、エレベーターを使用しているはずなので、さきほど紋白にかかった上方向からのケタ違いの圧力は少女の勘違いであり、これから感じるであろう浮遊感も気のせいであるに違いない——それは紋白の希望的観測に過ぎなかった。

「あれでも振り切れないなんて、もしかしたら都市伝説の類いの化け物なのか——例えばロケットτζジイとか」

屋上からの跳躍のために、意識が朦朧としている少女のか細い声は少年に届くことはない。

その声の中に明るいものが交じる、現状を打破する物を求め、はっきりとした発音で少女はその理由を問いかけた。

「ああ、奴が必死になっている理由に気づいたのさ、これでもう追ってくることはないよ」

紋白はその言葉に光明を見た。

この単座型ジェットコースターから開放されるのだ、頬を涙が伝う。

それが相手の良心に掛ける説得の言葉なのか、はたまた利を持って行う買収行為であろうとも、今の紋白ならその是非を問うことはしない。

少女の求める唯一つの物、それは動かない地面、さあ早くしてくれ。

長閑に流れる雲、晴天のもと、少年の発声が轟く。

『あの勘違いしているようですけど！ この中には蟹は入ってませんよ！ ——うお、なんかめちやくちや怒ってるぞ、ビームを飛ばしてきた！』

少年の挑発行為を確認した紋白は、もしや己を乗り物酔いで殺すために一芝居うつているのではと、益体もない推測を浮かべる。

少女の胸の中、自分たちを追う者と、少年へのほの暗い殺意が芽生える。

込み上げる吐き気が彼女の判断能力を奪っていった、それが少女を次の行動に突き動かす。

新鮮な空気と、陽光を求め、少女は頭突きで、箱の蓋をぶち破った。

『はい、昏倒しているステイシーを多馬川付近で発見しました、彼女を含めると丁度、十人になります』

部下からの報告を聞き、電話を切る。

金の髪を携えた初老の男性、九鬼家従者部隊ヒューム・ヘルシングは奥歯を噛み締めた。

己の主である九鬼紋白が誘拐されて、どれほどの時間が経っただろう。

事件は、川神市にある有名な甘味処で起こった。

市井の文化を学ぶため、紋白が川神界限に出歩くことはさほど珍しいことではなかった。

当然、脇は従者部隊最強を誇るヒュームが固めているので滅多なことなど起こるはずもない。

ではなぜ己が主が攫われたのか。

紋白が甘味処の手洗いに行き、そのまま姿をくりましたのだ。

男性であるヒュームが中にはいることは出来ず、気による探知にも怪しい気配はなし、それゆえ、気付くのが遅れ、それが致命傷になった。

紋白がトイレにいない事に気づいた時には後の祭りだった。

言い訳になるが、己が悪意ある何者かの気配を見逃すはずがない、状況としては紋白、自らが、甘味処から逃亡したとしか考えられない。

その後の九鬼従者部隊の行動は迅速かつ電撃的であった。

川神の主要な出入口を封鎖、誘拐に関わったと思われる組織に辿り着き襲撃する。

それでも、予想外の事態にみまわれる。一味の本拠地だと思われる事務所は既に襲撃を受けていた。

転がっているチンピラを締めあげ、紋白の行方を聞き出す。

男から此処に確かに紋白がいたことを聞き出せたが、それ以上の情報を引き出すこと

が出来なかつた。

その為、紋白誘拐に関わつたとされる全ての者を、人海戦術により捕獲することが決定。

誘拐犯の上部に位置する暴力団の構成員から、末端である日雇いのバイトに至るまですべて検挙することとなつた。

結果、事務所の襲撃から一時も経たないうちに、一人を残してすべてを九鬼の手中に収めることに成功する。

その時点で、尋問中の男から新たな情報を聞き出せた。

ここまで紋白の行方についての手がかりは事務所に監禁されていたということ。それに加え、事務所が何者かに襲撃された時に、アルバイトの人間が一人いた事がわかつた。

未だ捕まつていない襲撃者とその一人を確保することが最優先になる。

襲撃した人間はともかく、アルバイトは事務所を出る際大きな箱を背負っていたらしいので、すぐに見つかることだろうと当たりがついた。

だが事態は九鬼の迷惑を大きく裏切り、ヒュームの通つた道の脇には、気絶したメイドと執事が転がっている。

いずれも、一撃で昏倒させられたのか重傷を負つてはいないが、九鬼従者部隊相手に

それをやってのけたということが敵の強靱さを物語っている。

部下からの連絡と、気を失っている者達との位置関係から、対象の向かっている方向を推測し、ヒュームは疾走する。

そして発見する、人相はマスクやサングラスをしているため分からないが、想像していたよりも若い。

背格好もヒュームよりも小さく、一見、戦闘的な争い事を専門としている人間特有の匂いが感じられない。

ともすれば、一般人とも勘違いしていたかもしれない——男がビルの壁を斜めに駆け上がらなければ。

ヒュームの口元が上がり、獰猛な笑みを形作る。

間違いない、九鬼の間人を攫うような大胆さを持ち合わせている、この男が紋白の行方の何かしらの手がかりを握っている。

相手の実力を認め、ヒュームの胸に血管に熱が入る。

敵もヒュームの力に気付いている筈だ。

主の安否とは別に武人としての戦闘欲が、そして誇りが地を駆けるヒュームの足に注ぎ込まれる。

『あの勘違いしているようですけど！、この中には蟹は入ってませんよ！』

その男の言葉をすぐに理解できたわけではない、がヒュームの本能が己が手から気弾を打ち込ませた。

そして理性が、事態を理解できていないボケ老人を優しくいたわるような声音が、ヒュームに思い知らせてくれる——この男は自分を敵と見なしていない。

侮られたことはあつた、挑発されたこともあつた、だが、優しく優先席を譲られるような、温かい悪意は経験したことがない。

深くなつた顔の皺、腹の底から、心の底から笑声が溢れ出す。

己に許可を与える、奴は殺してもいいと。

●
ヒュームが殺意を固めているその時、事態は動いた。

男の背負う箱の蓋を破り何かが飛び出る。

それはヒュームの敬愛する主の愛らしい頭であつた。

主の居場所を突き止めた安堵が胸を包む。そして先程、ヒュームの気弾を避けた男に密かに感謝をしていた。

だが走る男の背中、紋白の顔色は蒼白なものであつた。

男の卑劣さが想像できる。

肉体的にはどこも怪我はないように見えるが、精神に何らかの拷問を受けたのだら

う。

ヒュームは紋白に苦痛を与えたすべてのものに地獄を見せることを誓う。

いまだ続く二人の追いかけっこの中、少女のか細い懇願が聞こえた。

『頼む、止まってくれ！』とにかく一度落ち着いて誤解を』

ヒュームは紋白の考えに、その器の大きさを知る。

己を誘拐し、拷問をした人間にさえ、言葉での説得を試みる寛容さに。

だが、相手がそれを受け入れるような者であるはずがない、ヒュームが走る速度を上げ、それに合わせて敵も速度を上げようとする。

『ヒューム！ だから早く止まれ!!』

頬が少し瘦けた少女のどこから発せられたのか、鋭い光を放つ瞳からか、刺さるような声を吐き出した肺からか、覇気を伴った命令が老人の虚を突いた。

呆然とし、蹴りだした足の力が伝わるままに水平に移動するヒュームのその足を前方に待機していた男が刈り取る。

平時のヒュームなら当然回避することの出来たものであったが、主の初めて見せる迫力と、なぜ己が制止を呼びかけられているのか、理解が追いつかなかつたために出来た意識の空白、ゆえにそれを躲せず、ヒュームは先にあるビルのゴミ捨て場に飛翔することとなってしまった。

ヒュームに追いついた九鬼家従者部隊、李静初は電話にて主の無事を報告していた。

『はい、紋白様の替えの服を早く用意して来るように、それと執事服も一着、大至急お願
いします』

李は、青白い顔で胃の中の物を吐き切った主の背中を優しく撫で続ける。

その隣から紋白に酸っぱく腐敗した匂いを嗅がないように配慮し大きく離れた従者
部隊零位がいた。

● 李の背筋を凍らせる殺気と笑顔、鼻を曲げる異臭を放ちながら。

● これは九鬼の末娘やその付き人、歴史上の偉人のクローンたちが編入してきたその日
の出来事。

川神学園の一年生の廊下、教室の前で剣袋を胸に抱いた少女が教室の中を伺ってい
た。

放課後、授業が終わりすぐに帰宅した者もあり、学生はまばらになっている。

● 由紀江の後ろには学生寮で世話になっている二年生の直江大和が携帯をいじってい
る。

● ドアの影から中を覗き見ていた由紀江は目当ての人物がまだ教室に残っていること

を確認し安堵の吐息を漏らす。

いつもならば、高校生であるのに放課後の予定が皆無な由紀江はこのまま帰宅となるのだが今日は違う。

なぜなら、今この時から由紀江に友だちが出来るからだ。

もちろん、何の根拠もない寂しん坊な少女の悲哀をさそう己のプライドを満たすためだけの妄想ではない。

大和が、交友関係で言えば由紀江の千倍の広さを持つと言っても過言ではない、頼りになる先輩が由紀江に協力してくれるのだ。

まあ協力と言っても、その割合は殆ど大和に依存しているのは目を瞑るしか無い。

休み時間に購買で買っていたパンを席について食べている少年に熱い視線を向ける。

その視線のあまりにもな迫力に遮る生徒が早々に帰宅してしまっただが、申し訳ないことをしたと思う余裕が無いほど由紀江は高ぶっていた。

今か今かと携帯をいじる大和の策を渴望していた。

大和の携帯に着信が来る。

「いいかい、まゆっち。彼と仲良くなる方法だけど、これが一番いい方法だと俺は思っている」

そう言って大和が説明してくれたのは、由紀江を驚かせるものだった。

「まゆつちがみんなに恐れられているのはその腕っ節のせいだ、今回はそれを逆手に取って、いじめっ子から彼を守ること。それによって彼と友だちになることも出来るし、他のみんなにもまゆつちが力を笠に着る人物ではない事をわかってもらえばいいんだ」

由紀江が驚いたのは大和が説明してくれた作戦ではなく、知っている前提では進められた部分。

「あの、荒場さんがいじめられているって本当なんですか!」

大和は由紀江がそれを知らないことに驚いた様子で、携帯の画面を見せる。

「いや、二年にこのクラスの子の兄貴に情報をもらったんだから間違いないよ。何でも入学してからずっと嫌がらせを受けているらしい。今送ってもらった画像はいじめっ子本人に気付かれないように盗み撮りしたものなんだけど見るかい?」

そう言って大和が差し出した画像には教室にいる複数の人物がカメラに視線を合わせることもなく写っている。

中心に五人の人物が写っているがその内二人は女性なので抜かして考えるにこの三人の中の誰かなのだろう。写真の端に由紀江もひっそりと入っていることに少し喜んできましたが、今はそれどころではない。

由紀江の大切な友達の危機なのだ。

「おっと着信だ、源さん、何か用？ 今、一年の教室だけど。わかった、姉さんを連れて行けばいいんだね？ って、まゆっち、ちよつと待って！」

友のため、勇気を振り絞り少女は教壇に立つ。

由紀江が教室に入ると同時に、心なしか、教室の温度が下がり雑談の声がなくなったように思えるが、そんなバカことはあるはずがないので気にはしない。

教室を見渡すと、由紀江と入れ違いに紅葉が出て行くところだった。

それを見て由紀江は考える、本人がいない所で一度話し合うのも得策に思える。

教室にクラスの全員が残っているわけではないが、半数以上はいるので意味が無いこともないだろう。

とにかく、まずは注目してもらわなければいけない。

教壇に立つだけでは、影の薄い部分を生きてきた自分が注目されるはずもない、残っている人間を観察すれば全員、教壇とは反対側の後ろの壁のある方向に顔を向けていた。

後ろの壁には注視するようなものは何一つ無いので不自然に思えたが、まずは彼等を振り向かせなければ。

「——あ、あの、皆さん、私の話を聞いて頂けませんか？」

由紀江の想像以上に小さな声、己の内気さに反吐が出る、が幸運な事にクラスメート

の聴力はかなり優秀なようで、兵隊の号令のように緩みなく、身体をこちらに向けてくれた。

その颯爽とした様が、由紀江の背中を後押ししてくれた。

「私はいじめはいけないことだと思っんです！ 決して許してはいけない行為です。みなさんはどうですか？」

抽象的な要領を得ない意見だったが、それでも何かしら伝わったのだろう、皆の顔色が変わる。

「そうです、荒場さんのことです。皆さんはこのままでいいと思っっているんですか。あの私は思っんです、いじめっって、いじめている人だけじゃなくて、ただそれを傍観している人間にも非があるっって」

由紀江の鼓動が早まる。

緊張し赤面しながらも皆の反応を伺った。

由紀江の意見に反対し怒りを示すものもあるだろう。だが一人でもいい、彼女に同調してくれるものを期待し、眺めれば、全員が頭上に疑問符を浮かべ、理解できないといった曖昧な表情している。

もしか、緊張のあまり、全く関係のない由紀江の秘蔵一人ぼっち詩集でも朗読してしまっただろうかと心配になる。

そんな中、一人の人間が立ち上がり、発言する。

確か、野球部期待の新人でクラスの行事における中心にいる男子であった。

「黛、つまり、お前らも共犯だからしつかりそれを自覚しろ、敵対か恭順、それをはつきりしろということだな？」

皆が息を呑む。

由紀江は言われたことの意味を考え、要するに、ニュアンスは違うが、自覚を持って、と言つてることを理解し、己の発言と何ら対立がないことを喜びしつかりと頷く。

教室の温度が更に下がった気がしたが、空調をだれかがいじっているのだろうか。

肌寒さを覚えながらも、皆の視線が由紀江に集まっていることに喜びと少しばかりの気恥ずかしさを感じる。

「はい、そのとおりです。あ、意見がある方はどうぞ、仰ってください」

内気な自分がよくここまで言えたと達成感が胸を満たし、口からは滑らかに皆の意見を求めることが出来た。

そんな由紀江とは対称的に皆の顔に硬さが見える。

意見があるのだろう、直立している三人の人間は特にそれが顕著で、見様によっては、絞首台に向かう罪人のようだ。

由紀江は己の気の利かなさに呆れてしまう。

自分だつて、皆の前で発言をすることには多大な胆力を必要としたのだ、他の皆がそれを持ち合わせていると考えるのは由紀江の傲慢だろう。

名案を思いつき、由紀江の顔に笑みが浮かぶ。

「そうですね、いきなり皆さんの前では発言しにくいですよ。まずは私が一対一で意見を聞きそれをまとめることにしましょう。どこかふたりきりになれる場所は」

『まゆっち、それなら校舎裏の体育倉庫の影が人目もなくてピッタリだぜ！』

自分の相棒はなんて聡明なのだろうと、馬人形の松風に自画自賛を贈る由紀江。

今日はすべてが自分を中心に回っているようだ、追い風吹く心のままに、立っているクラスメートの前で教壇の近くの席にいる女子の手を取り、校舎裏を直指そうとした。

「いやー！ ごめんなさい！ 意見なんて無いです！ 黛さんに逆らう気なんて無いんです、私はいじめをします！ 校舎裏に連れて行かないでください、お願いしますー」
机にしがみついて離れない少女を見て自分以上に内気な人間がいることに由紀江は驚いていた。

一応は由紀江の意見に賛成してくれているし、恥ずかしさの所為か、ここまで号泣している人間を連れて行くのは忍びない。

ならばと、残りの二人に目を向ける。

由紀江と目が合うと、乾いた笑いを響かせ、目をそらし着席する。そのまま石像になったかのように無言を貫き、固まってしまった。

お腹でも痛くなったのだろうかと由紀江は心配するが、廊下から電話を終えた大和が呼んでいる。

失礼と席を外し由紀江は大和に駆け寄っていった。

「ごめん、まゆつち。ちよつと用事ができた。今から姉さんを捕まえて源さんところに行かなくちやいけないんだ。悪いんだけど、作戦はまた今度でもいいかな？」

それを聞き、由紀江は己一人の力でここまで漕ぎつけたことにまた驚く。

初めは大和の力を当てにしていたが、嘘のように全て自分で段取りを付けてしまった。

自信を持った由紀江は、大和にもう自分は一人で大丈夫だと礼を言い、彼を送り出す。

大和は由紀江の笑顔に首を傾げていたが、また、何かあったら相談してと残し、三年の教室に歩いて行った。

言いたいことは全て言えたので今日のところはこれでいいだろう、解散の旨を伝えるために教室に入ると、誰もいなかった。

そんなに長い時間、大和と話し込んでいただろうか、頭をひねる。

少し疑問が残るが、由紀江の中では大成果であった。

鞆をとり、席に戻る。

ふと、廊下に人の気配を感じ誰かが走り去って行く音が聞こえた。

あれはもしや紅葉の後ろ姿では。

何か教室に戻る用事でもあったのだろうか、気になったが、気が抜けて内気の虫が顔を出した由紀江には見送る以上のことは出来なかった。

● 学園の屋上、落下防止の網のそば、四人の男女がいる。

一人は携帯とにらめっこをしており会話には参加していない。

金網を背にした男子、源忠勝は大和と百代に用向きを告げた。

「いいか、これは俺が独自に調べたことなんだが、何だ、別にお前らのためじゃないからな、そこんところ勘違いするなよ」

そう、しなくてもいい前置きを告げ、一枚の紙を二人に見せる。

それは、鬼面の幹部の情報がかかれ、賞金、賞品が載っている、賞金首リストであった。

大和は苦い顔をする。

小学生時代、この紙が原因で起きなくてもいいじめにまで発展、魔女狩りの様相を呈したのだ。

鬼面を潰したことに後悔はないが、その後起こったこの出来事だけは、どうにか回避するべきだったと大和は今でも思っている。

しかし、今さらそれを見せられても、この間の一件で鬼面の事件は解決したはずだ。そんな大和の疑問を無視し、忠勝は話を続ける。

「このチラシが配られることによつて、各学校でいじめにも似た仮面狩りが行われた。いや、そのことを責めているんじゃない、実際、お前らはよくやつたと思うぜ。俺が気になったのはほぼ全部の学校で仮面狩りが行われる中、平穩無事な日々をすごした小学校が二つあることだ」

忠勝の指摘を聞き、その学校の名と、当時の小学校の代表の顔を思い浮かべる。

大和は小学生にしては彼等が人格者であり、非道ないじめを未然に防いだのだと解釈した。

大和の答えに忠勝は首をふる。

「いや、仮面狩りの風潮は高まっていたらしい、ただそれを止めるキツカケがあつたそうだが、それがこれなんだよ」

どれのことだろう、忠勝が差し出した右手には先程のチラシが握られているだけではない。何もない。

まさか、仮面狩りを引き起こしたりリストが、それであるはずがなからう。

「モモ先輩、これをよく見てくれ。先輩は奴らに負けたんだってな、こいつから聞いたよ。俺の聞いた情報から推理すると、先輩はこれに違和感を持つはずなんだ」

己の負けを大和が吹聴したことにひと睨みをくれた後、百代はチラシを見て眉根を寄せる。

大和も一緒に覗きこむ、チラシには幹部の特徴と、本人の顔の代わりに醜悪な悪役の面が描かれている。

「あれ、おかしいぞ、これ全部悪役の面じゃないか」

百代の疑問に大和は何を言っているのか戸惑ってしまう。

非道の限りを尽くした鬼面の幹部なのだから、悪役の面であるのは当然である。

大和は眉根を寄せる。

「やつぱりか、いいか直江。これを知っている人間は少ない、実際に襲われた人間が口を閉ざしていたからだ、当時、闇に紛れ、悪逆の限りを尽くした鬼面の幹部は全員、正義の味方側のお面をシンボルとしていたんだ。昔、制裁を受けた人間を探し出し、自分から聞いたことを内密にすることでようやく聞き出せた。つまり、お前らが潰した昔の鬼面も、この前倒した蛇神の一派の殆どもトカゲの尻尾だったということだ。チラシを見た人間の中にこの事実を知っている者がいて、報復を恐れ、仮面狩りにストップを掛けたんだろう。——いいか、直江、もう一度言うぞ、鬼面はまだ生きてる！」

大和の思考が回転する、理解とともにまずは何をすべきか。

やけにあつきりと片が付いたとは思っていたんだが、そうだ、まず、するべきは

「大和、今から校内放送で、奴らの首に懸賞を掛ける、なにかご褒美を考えておけよ」

最初に止めるべきである姉貴分は笑顔で走り去ってしまった。

呆然とする大和は再び起こる仮面狩りによる被害を最小限にするべく、知恵を絞らなければいけなかった。

ため息を吐き、肩を落とし、これからの苦労を考える。

その傍ら、終始、話に加わらなかつた、ポニーテールの幼馴染に顔を向ける。

一子は真剣な表情でメールを見ているようだ。

話が終わったことに気づいたのだろう、大和に声をかけてきた。

「大和、その、後輩から相談を持ちかけられたんだけど。その子は普段、はれものを触るかのよう、誰からも声をかけてもらえなかつたから、嫌われていると思つてたらしいの。でも今日、偶然みんなの話を盗み聞きしてしまつたんだって。——大和、その子、みんなから無視されたり、いじめられているらしいの、先輩としてあたしはどうしてあげればいいのかしら？」

健気で澆刺とした一子に、いじめ問題という根の深いものは似合わないような気がした。

地獄から来た男達

間話 食事風景

歴史上の偉人、彼等の日常、性質はどういったものだったのか。

今日、それを知るには年代を経た薄っぺらい紙媒体を読みとくしかない。

当然、それらの紙きれが何枚積み重なるうが、ひとひとりの人生の重さに釣り合いが取れるはずもなく、だれも彼等のことを理解できる人間は居ないだろう。

それは九鬼の手によってクローンとして蘇った源義経にしても同じことだった。

英雄のクローンとして生み出された者の中で、その勤勉さ真面目さが見事に仇となつてゐる少女、義経。

彼女は義経になるべく英雄になるべく、毎日研鑽の日々を送っていた。

先程も述べたように歴史上の彼がどのような人間であつたかを資料から読み取ることは難しく、少女は目指す頂きに向かつてゐるのかどうかすら、判らない。

答えのない問、回答を必要としない問題に、その勤勉さは害にしかならなかつた。

それでも少女は歩むことをやめない、その姿を見るに、歴史の中の彼も篤実な人間

だったのかと窺い知ることが出来るかもしれない。

そんな少女は、昼休み開始時の喧騒が過ぎ、はじめに入っただけでいきな者達が昼食を終え
人気が少なくなつた川神学園の食堂のテーブルで少し遅めの食事を取っていた。

常ならば隣にいる弁慶は用事があるとの事で彼女は一人で黙々とカレーライスにス
プーンを伸ばす。

義経の定まらない視線の先には、無機質な壁があるだけで、彼女の悩みを聞いてくれ
るはずがない。

少女の悩みといえば、自己同一性、自分が何者であるのかという大きなものがあつた
が、すぐには解決できそうにないそちらは置いておく。

もう一方も、すぐに結果が出るものでもないが、そちらに比べれば、大したことでは
ない、あくまで比すればというだけではあるのだが。

若獅子タッグマッチトーナメントが九鬼財閥主導で開催され、その大会への参加を義
経が義務付けられたことが悩みの種だった。

毎年開催されていた川神武道大会に、九鬼が協力する形で大規模な物になる。

武を磨く、人と競うこと、それらは問題ではない、少女が悩んでいるのはその大会に
おけるペアづくり。

いつもそばにいる弁慶を頼りすぎる事を厭い、義経の独力で事をなすことを決意す

る。

これだけみれば、立派な独り立ちであるが、結果が伴わなければ意味が無い。

同じクローンである与一が、早々にペアを見つけ、それに続くように弁慶も納得出来る相棒を捕まえてしまった。

大会出場の登録期間が迫る中、携帯画面に表示されるカレンダーが義経に焦燥を与える。

交友関係の狭さは、少女自身に起因するものではなく、単純に日の浅さによるものだが、弁慶や与一が早々に決めてしまったので、言い訳に出来ない。

どうしたものかと、カレーライスを眺めながら少女は嘆息をつく。

気分を変えようと深く呼吸をすると香辛料の刺激的な匂いと、隣から肉の焦げた香ばしい香りが。

そこで義経は先程まで空席であった隣に、少年が座っていることに気付いた。

黒く短めの髪、針のように細い目は、意識的に閉じているのか、それとも生来のものか。

ここ最近、昼食時によく見かける顔だった。

義経は食堂が余程混雑していなければ、決まった席に、習慣的に座ってしまうので、同じような理由で席を決めている彼とよく顔を合わせる。

話をするほど仲がいいわけではないが、気になつていたので彼の食事メニューを横目で確認する。

今日は和風ステーキ御膳、この食堂で四番目に高いメニューだった。

カロリーの高そうな厚切りの肉が、黒の鉄板の上でじゅうじゅう音を立てている。

予想通りの彼の注文、月曜日に頼んだ一番値の張るフカヒレの姿煮を皮切りに、流れるように食堂の上位メニューを制覇していく。

高校生が頼むには不釣り合いな料理であつた。

「えっと、そんなにカロリーの高いものばかり食べていると健康に良くないと義経は思うんだが、少しは野菜も摂ったほうがいいぞ」

お節介かもしれないが、純粹に彼の健康を案じ、義経は忠告をする。

少女のありがたい言葉を受け、少年は義経のカレーライスと己のステーキを一瞥すると鼻で笑つた。

何が嬉しいのか義経に勝ち誇つた顔を見せつけ、己の皿から、肉を一切れつまむと、義経の皿の端に載せる。

義経はこの牛肉の意味を理解しようと頭を捻る。

——なるほど、義経の忠告を素直に受け入れ、食べる量を減らしたのだろう。

彼の従順さに、義経も嬉しくなり笑顔を返す。

少女は他人からの苦言を実行できる彼の度量の広さに感心する。他人を思つての諫言は決して無駄になりはしない。

彼が再び食事を始め、義経もカレーに匙を伸ばすと、ルーの中央に、載っている物体に気付いた。

はて、自分は納豆カレーを頼んだらどうか、いや、そもそも、この食堂のカレートツピングはフライ系などのオーソドックスなものしかない。

ならばなぜ、自分のカレーの上に頼んでもいない納豆が糸を引いているのか。

疑問が尽きない少女の左横から聞き慣れた女性の声。

「ええつと、君は何をそこまで悩んでいるのかな？　もしもーし、聞いている？　いや、さすがに無視は、私も堪えるんだけど」

いつの間にか義経の隣には見知った上級生の女性が笑顔で鎮座していた。

長い黒髪を靡かせながら、納豆をかき混ぜているこの女性は、松永燕、学園の三年生で義経達クローン組より後に転入してきた。

九鬼財閥の支援を受けている彼女は義経達と面識があり、仲良くさせてもらつていた。

そうか、納豆が突然大気中に発生したわけではなかったのか。

自分が気をもむような異常現象ではなかったことに安堵し、燕に挨拶を返す。

「ん、こんにちは。いやあ、隣の彼に挑発されてたのかと思ったけど、私の勘違いだったみたいだね。ところで義経のパートナーは決まったのかな？　そう、敵情視察だよ、あはっ」

挑発とは何のことだろう、気にはなつたがそれよりも彼女のパートナーという単語が義経に重くのしかかる。

落ち込んだ少女の顔色から察したのか、燕は義経の肩を叩き慰める。

「元氣だして、大丈夫、義経ほどの実力があればすぐに相手は見つかるつて。ほら、納豆ももう一個あげるから」

そういつて燕が売り出している納豆をまたカレーに載せようとする。

義経は丁重に断りを入れ皿を己の方に引く、これ以上カレーの風味を殺されてなるものか。

燕は己の親切を断られた事を気にした様子もなく、手の中にある納豆のパックを見る。

燕の焼き魚定食の白い米の上には既に先ほど練った物が存在感を醸し出していた。

これ以上載せると自身の好みの比率が崩れてしまうと考えたのだろう。

燕は軽く思考を巡らし名案を思いついたのだろうか、笑みを浮かべた。

「君は一年の荒場くんだよ？　劍聖黛十一段の娘、黛由紀江の一の子分の。彼女とは

いずれお近づきになりたいんだよね。よろしく言つといてもらえるかな。これはそのお駄賃代わり！」

弾けるような笑顔で練り上げた納豆を彼が左手に持つ白米に掛ける。

こういうことは、許可をとってからやるべきだと思ふのだが、義経が注意するより早くそれは行われた。

お礼はいいとばかりに手を振り応え、再び義経の隣に腰を下ろす。

ハラハラとして義経は二人の様子をうかがっていたのだが、紅葉が何も反応を返さないで文句はないと判断し胸を撫で下ろす。

安心した義経がもう一度彼の方を見た時、軽い違和感が起こる。

少年が何かを探している。

テーブルの上を端から端まで見回し、それを二度ほど繰り返し、その度、紅葉の瞳から光がなくなっていく。

少年の座ったテーブルのすぐ前、初めてそれに気がついたように、燕が納豆をのせた己の茶碗を確認し、首を傾げた。

——なぜこんな物がここにあるのだろうか。

子供の頃楽しんでんだ間違い探し、年少者達の知性に合わせられたそれは今ならば簡単に解くことが出来るのだろうか。

だが、少年は間違いに気づかない、ほんの数分前の白米の状態と現在の差異に。

「あわわ、わ、燕先輩！　すぐに彼に謝ったほうが」

現状を把握していない上級生に、焦り義経が警告を発するため振り返った。

振り返った少女に聞こえたのは己のすぐ横、耳の傍を空が切る音、そしてもう一つ、水分を含んだ食材が何かにたたきつけられた時に聞こえる不快な音。

義経は眼前の光景を理解し、額に手をやる。

まあ、端的に表現するならば、尊敬する上級生の顔面が、宙をとんだ茶碗のせいで納豆まみれになっているだけなのだが。

暴力沙汰になるのだけは避けねば、使命感から燕よりも明らかに弱者である彼を守るため背にかばうように義経は二人の間に立った。

「燕先輩、どうか落ち着いてほしい！　先輩にも否があるんだ。ここは喧嘩両成敗ということでどうか、収めてくれないか！」

「——ええつと、義経。私、そこまで短気じゃないからね。たしかに私も悪いところがあつたかもしれないし、つて甘い！」

顔にかかった納豆を手で拭う上級生が存外落ち着いていたことに義経が人心地つこうとするも、またも燕に飛来する影があつた。

あれは、己のカレーライスではないか、放物線を描き飛んでいくそれに、昼食は買い

なおさなければならぬとぼんやりとした感想しか出ない。

投擲された事にいち早く気付いた燕は素早く、身体を移動させる。

その時、一陣の風が義経を追い越した。

風は空中で己が投げた皿を掴むと、燕の逃げた方向に横向きに平行移動し、皿を彼女の顔に押し付ける。

凍りつく世界、二人の諍いに気付いたのかこつそりこちらを伺っていた生徒、全員の息が止まった。

騒動の中心に一番近い義経は狼狽し、拳を握った燕を止めるべきか、未だにカレー皿を塗りつける少年を止めるべきなのか、判断に困っていた。

カレーの皿が床に落ちた、少年の気が済んだのか、燕がそれを払ったのかはわからない。

只、カレーと納豆まみれであろう燕の顔を義経は恐ろしくして見る事ができなかった。

「ハハッ、さすがにこれはないよね。うん、これはやり過ぎだよ。ちよつとお姉さん、堪忍袋？ 血管、まあどつちでもいいか、切れちゃった！」

三人を中心にクレーターのごとく人が退いていく中、燕の乾いた笑い声が響く。

義経はその怨嗟に満ちた音を耳に侵入させじと手で覆う。

遠巻きに見ている野次馬たちもことの重大さに気付いたのか、教師を呼ぶべきかと相談している。

それは名案だ、全面的に支持するので誰か早く、そう願う少女自身が呼びに行ければいいのだが、彼女が動くことよって緊張状態である二人まで行動を起こしてしまうことを危惧し一步も踏み出せない。

先に動いたのは松永燕、彼女は胸のポケットから校章を取り出すと少年の前に叩きつける。

決闘の申し込みだ。

これに少年が自身の校章を重ねることで了承の合図になる。

今この場で暴力に訴え出ないことに、一息つくが、その冷静さが返って怖い。

この後に行われる惨劇を想像し、いざという時に燕を止めるための人員を確保するべく弁慶の携帯に電話をかけることにした。

そんな義経の心配を他所に少年はテクテクと食堂の注文口に行くと購入した食券を出し調理場に声をかける。

「——パックスの納豆、三つ」

少年の注文に、食堂にいる全員が頭を悩ます。

食べるつもりだろうか、いや、それならば、燕がしたことに対しここまでの事態に発

展していない。

疑問が義経の頭上で揺れる中、少女はようやく彼の顔を見た。

表情を作るすべての筋肉が機能していない、感情を伝える瞳は何もない虚空に焦点を合わせ、目尻を下げることも上げることもない。

一切の希望を放棄したそれは一体どのような経験を経て、身に付いてしまったものなのか——まあ、食事を邪魔されたただけなのだが。

燕も少年の尋常ならざる佇まいに気づいたのか、その瞳に警戒の色を浮かべる。

少年の一挙手に注意を払い、彼の奇行をじつと観察する。

見張っていた燕の表情が少年の行動の意味を理解していくに連れ、青いものになつていく。

義経は最後になるまで気づけなかった。

箸を使つて納豆を練り、両手にそれを持ち、燕の方に歩いていく。

「いや、ちよつと待つて！ 決闘！ これからやるのは決闘なんだから、振りかぶつたそれは一度そこに置こうよ、ねっ！ だから決闘だつて、なんでそこで首を傾げるの！」
燕がしつこく確認を取る決闘という言葉が理解できないと無表情で首を横に振る少年。

得体のしれなさと、納豆漬けになるのは御免こうむると、燕は踵を返し、食堂から一

目散に逃げ出した。

敵前逃亡を図る彼女を攻めることを義経は出来ない。

武器を振りかざす者、悪意を持って攻撃を仕掛けてくる相手ならば、迎撃をすることも出来るのだが、能面の如き顔で納豆を投げつけてくる相手に、出来る事が思いつかない。

隣を見れば、彼女を追いかけていったのか既に少年の影も形もなくなっていた。

『「いーらー・そこにあんた！ 食べ物で粗末にするんじゃないよ！ そうだよ、そこにあんただよ！」』

調理場からかけられた叱責の言葉に、疲れ果てた義経は言い訳することもなく、調理師の言うがまま、燕と少年の惨状を掃除させられることになった。

● 放課後、一年の教室、午後の授業の記憶が曖昧であった事、そして何故か納豆臭い教室に、少年は訝しがるが、自分を呼ぶ同級生の声にそちらに意識がそれる。

「荒場くん、上級生の人が呼んでるよ！」

クラスメートの女子は頬を上気させていた。

熱でもあるのだろうか、まさか紅葉に話しかけるだけで緊張したというわけでもないだろう。

礼の言葉をかけ、廊下に向かう。

一子だろう、自分を訪ねてくる人間は上級生、同級生を含め彼女しか思い浮かばない。彼女がトレーニングなどで忙しいため遊びに行くことはないが、メールなどのやり取りを介して、一子とはだいぶ仲が深まったと紅葉は思っている。

相談事をしたので、心配して来てくれたのだろうか。

期待に胸踊らせ、廊下に出てみればそこにあつたのは、一年女子の壁であつた。

彼女たちは小鳥のように黄色い声援を響かせており、その中心に髪の毛の長い一見すると女性に見えなくもない男がいる。

艶のある黒髪を片側で括り、肩に下ろしている。

切れ長の瞳は強い光を放っており、目付きが悪いといえなくもないが、整った顔の所為かそれすらも彼を引き立たせる要素になる。

女顔であるが、肩幅や首の太さは男性のそれであり、女性と間違えることはないだろう。

つまり、美少年、男前である。

「あつ、荒場くん、こつち、こつち。久遠寺先輩を待たせちゃダメだよ！ 荒場くんてすごい人と知り合いなんだね！」

目を輝かせ尊敬の念を向けてくる同級生を躲し、久遠寺の元へ。

当然、紅葉は彼のことを知らない。

自分の知己はこの川神学園で彼女一人だけなのだ。

久遠寺は群がる一年生に礼を言うのと、先導する形で前を歩く。

紅葉が付いて来ていないことに気づき、手招きをする。

背後に感じる少女たちの鬱陶しい視線から逃げるため、仕方なく彼の後を追った。

● この先は柔道場や格闘系の部活のための道場がある。

長い廊下を無言で二人は歩いていった。

何のようだと言葉が問うても、それは後で話すの一点張り。

いい加減、回れ右をして帰ってしまったでもいいのだが、先ほどの女生徒達への人気がぶりをみるにここはおとなしく従っていたほうがいいだろう。

打算的、消極的な考えで紅葉は後ろを歩いて行く。

「この先には、相撲部の部室と練習場があるんだけど、俺達はそこに向かっている。所で角田兄弟って知ってるか、知らない？ 結構有名な奴らで、中学時代は全国で鳴らした奴ら何だけだよ。スポーツ推薦で川神にはいったんだが、素行が悪くて顧問も匙を投げてるんだ。後輩イジメもひどくて今じゃ、部員不足。辞めようとする奴も暴力で脅しつけて、無理やり残してるんだとか」

ようやく、目的を話してくれるのかと思えば、紅葉にとつてはどうでもいいことばかり。

まさか、この上級生は紅葉に力士の才能でも見出したのだろうか。

だとすればはた迷惑なことこの上ない。

「うす！ 飲み物買いいに行かせていただきます！ 三分で戻るのどうかお待ちください！ ——おう、何だお前ら。邪魔だどけ！」

まわし姿の暑苦しい肥満児が紅葉達の横を駆け抜けていく。

彼が出てきた扉の上には相撲部の看板が。

「兄貴の角田金一は全国でも優秀な成績を残している。弟の銀二もそれに劣らぬ實力を持つてやりたい放題。顧問の教師も自分の評価につながるからなのか、彼等の悪行を隠蔽しているんだとか」

隠しているというならなぜこの男はそれを知っているのだろうか。

いい加減、この話と紅葉を呼び出したことがどう関係してくるのか答えがほしい。

「ん、別に今日の目的とは何も関係もないが。しいて言うなら、目的地に着くまでの暇つぶし、話の種といったところかな」

悪びれる様子もなく、久遠寺は、部室のドアを開け、中に入っていた。

続き入った、紅葉に向け、上級生は言葉を継ぐ。

「で、さつき俺達の前を全力でパシっていったのが弟の銀二で、今その土俵の真ん中で、一年の坊主頭に頭を踏み潰されているのが兄貴の金一かな」

神聖な綱の中央、欠伸をしながら、上級生の頭を踏みつけていたスキンヘッドと紅葉達の視線が交差した。

● 「つたく、きちんと見張っておけよ、お前ら！ わしの内申に影響が出たら責任取れるんか！」

叱責した後、踏みつけていた男を片手で持ち上げ、隅で正座していた部員たちに投げつける。

空を飛ぶ男の体重は百キロは軽く超えているだろう、このスキンヘッドの実力が計れる。

男は怠そうに紅葉の方へのそのそと歩いてきた。

その顔に浮かぶのはいやらしい笑み、強者が弱者に向けるそれ。

「なあ、このことは黙っててくれるよな、じゃないと、お前らの身にいらん不幸が振りかかることになるんじゃないぞ」

軽い脅しの言葉と共に、男の手が二人の肩目がけて振り下ろされる。

それ自体に攻撃の意味はなく、ただ、捕縛するためのものだったのかもしれない。

だが、半裸の男に触られることに嫌悪したのか、それとも自分を弱者と定めた先程の笑みが気に入らなかつたのか、紅葉自身にもわからない、ただ横にいる久遠寺を守るためでないことだけははっきりしていた。

伸ばした男の腕が肩に届くよりはるかに早くもみじの前蹴りが彼を土俵から弾き出す。

同時に鈍く大きな音が響いた。

「——くうー、効いた。なかなかやりよるのう。わしじゃなければ、病院送りになるところじゃった」

紅葉は驚愕する。

男は紅葉の速度について来れなかつたはずだ、加減したとはいえそれなりに力を込めた一撃を防がれ少年は後ろに下がる。

いや、防がれたというのは語弊がある。

男は今の一撃に反応できず、防御の姿勢を取れなかつた。

ならば、男は素の頑丈さのみで紅葉の蹴撃に耐えたのだ。

余裕の表情でこちらの出方を伺っている男、それがひどくイラつく。

続けられる嘲りの言葉。

もう慈悲は必要ない。

次で決める、狙うは奴の股間だ。

もし仮に問題になつても先に手を出したのはこの男だ。

相撲部員に囲まれたこの状況、先ほど聞いた彼らの素行の悪さが紅葉たちに有利に働くだらう。

子孫を残せない体になつても悪いのは紅葉を挑発したこの脂肪袋なのだ。

「あれ、なんじやろう。急に寒気が」

クシヤミをする男に紅葉が間合いを詰める。

「おい！ バカやつてないでさっさと来い！ 表に車をまたせてるんだからな」

いつの間にかドアの前に移動した久遠寺が二人に声をかけた。

その余りにも空気を読まない言葉に二人揃つて文句を返す。

「何じゃ、お前、状況分かつておらんのか？ 今こいつをぶちころがして、次はお前なん

じゃ、すぐ済むからちよつと」

「そいつ、お前の急所を狙つてるぞ」

「なんで僕が股間を狙つてるのに気付いた！」

その言葉にスキンヘッドは内股になる。

「——いや、延髄とかみぞおちのことを言つたつもりなんだが」

久遠寺も内股になり一歩離れる。

紅葉は戦慄する。

この男は紅葉の思考を読み取ったのだ。

普段なら久遠寺の言うとおり、延髄を狙ったのだが、スキンヘッドの挑発が許せなかったので、変更したのだ。

「なんて恐ろしい男じゃ！ わしの平穩のため、お前は今ここで潰す！」

紅葉も同感であった。この男は今ここでへし折るべき存在だ。

決意を固める紅葉と男に向かったため息を付き久遠寺が近づいてきた。

人差し指で、耳を貸すように指示を出す。

最初は渋っていた二人だが、何故か逆らえない。

根負けしお互いに警戒しながらも二人は耳を差し出す。

『鬼面にいた事、武神にバラすぞ、この阿呆』

なぜ、その事を、己の顔から血の気が引く音が聞こえる。

——隣の男も似たような顔をしていた。

再会、懐かしい場所にて

学校の正門前に止まっていたタクシーに乗り込んだ三人。

紅葉とスキンヘッドが争うことを危惧したのか、久遠寺が二人の間に座り込んだ。もつとも、紅葉の心中ではなぜ己の正体が露見したのかと自問自答が続き喧嘩どころではない。

なので反対側のシートで同じように熟考するスキンヘッドの様子にも何の疑問も抱けず、唸る紅葉の横で楽しそうにこちらを眺めている上級生の顔に全く心当たりも浮かばない。

今日の昼食時に物欲しそうにこちらのステーキを見ていた飢えた女子生徒に施しをした以降の記憶が曖昧なことに何か関係があるのだろうか。

必死に記憶をさらっていたのだが、面倒くさくなり直接尋ねてみたところ、昼の出来事と久遠寺は関係がなく、その上で食堂はキレイに使いと叱責を受けた。

悶々とした思いを抱えながら、どうこの状況を乗り越えるか普段余り使っていない脳細胞を稼働させたものの、そう都合の良い解決策が出てくるはずもない。

なにかいい案がないかと外の景色に目を流していると久遠寺に肩を叩かれ目的に

着いたと知らせを受けた。

● 目的地は七浜市の高級住宅街。その中で両隣の家よりもひときわ広い敷地を持つ屋敷だった。

久遠寺の話によるとここに紅葉たちに用のある人間がいるとのことだ。

紅葉に何処か懐かしさを喚起させる洋風建築であり少しの間立ち止まってしまおう。

案内され開いた門扉は紅葉の価値観では理解できない豪勢な作りになっており、玄関までの距離が長い。

目に鮮やかな花壇があり、この屋敷の使用人なのか眼帯をつけた若い女性が土をいじっていた。

「わあー、久しぶり！ 二人共大きくなったね、私のこと憶えているかな？ あっ、優さまもお帰りなさい、未有さまが、帰ってきたのならすぐに来るようにと言っていましたよ！」

こちらに気づくと手で土を払い小走りに近づいてくる。

肌の色や顔付きから日本人ではないと判る女性、海外旅行未経験の紅葉の知り合いであるはずがないのだが、親しげな笑みを浮かべ、成長を測るためか、自分の頭上に当て

た手を紅葉の額に持つてくる。

全く憶えない親近感に戸惑ってしまいが、そこは日本人らしくこちらも憶えてますといった体で握手を交わす。

彼女の温かい手に自然と頬が緩んでしまう。

隣にいるスキンヘッドも握手を交わし微笑んでいることから紅葉達は共通の知り合いなのだ判断するがこちらの男にも見覚えはないようだ。

『なあ、僕達って知り合いだっけ?』

女性に気付かれぬよう小声で問うもスキンヘッドも首を傾げるだけだった。

いつの間にか玄関の扉が開かれその先にいる久遠寺優が二人を呼びつける。

名残惜しげに手を振る女性に頭を下げ屋敷に入り、階段を登り二階へ。

内装は西洋的で家具はどれも高級感が漂っていると紅葉はかしこまってしまう自分に気づいた。

それは情けないと己を奮い立たせ背筋を伸ばし、廊下の一番奥の部屋に足を進めた。

● 先に部屋に入った優は部屋の暗さに顔をしかめている。

電灯は点いておらず、窓から入るはずの陽光は閉めきったカーテンによつて遮られていた。

最後に入室したスキンヘッドが扉を閉めると、どこに誰がいるのかも確認できなくなっていました。

これではどうしようも出来ないではないかと、壁際に電灯のスイッチを探すのだが、それより早く部屋の中央にスポットライトが照らされる。

紅葉たちが好奇の目でそちらに注目する。

丸い光の中、二人の人間がいる。

一人は裾の長いメイド服の女性。色素の薄い髪は光の下であれば宝石の如き光を放っていただろう。長く細い髪の頭頂にヘッドドレスがメイド服と一緒にその存在を主張している。

彼女は付き従うように一人の女性の後ろに控えていた。

ならばメイドの前、アンティーク椅子に座している小柄な影が彼女の主人なのだろう。

金色の髪をリボンで左右に束ねたその姿から、紅葉たちよりも年若い人物だと推測できる。

短い足を組み頬杖をついたその姿は、身長の高さも相まってこちらの警戒心を削ぎに来る。

だが、警戒を解くことは出来ない。

たとえ、紅葉たちのほうが腕力で勝っていることが明らかであろうともこの手の人間には油断を見せてはいけない。

自分の屋敷に人を呼びつけ、顔を仮面で隠すような変人奇人には。

「あら、やだ美鳩。この子達、予想以上にドン引きよ。あと、その弟、他人のふりをするのはやめなさい」

「だから言ったじゃないですか、さすがにこれはないって。姉弟揃って拾ってもらった恩がなければ私も雇用契約を破棄するレベルですー」

金持ちという人種はどこかが壊れているらしい、紅葉の頭の中、たまに学園の廊下ですれ違うメイドを連れた男の事が連想された。

● 部屋の明かりが点けられても、重い空気は残されたまま。

両手を叩き合わせ注目を集めた部屋の主は気を取り直し紅葉たちに視線をよこす。

「フツ、よく来たわね。そんなに緊張せず楽しんで頂戴。念の為に確認するけど、あなた達が元鬼面の四番と五番で間違いないのよね？ って物凄い勢いで首を横に振っているのだけど」

「未有姉さん、こいつらで間違いないから話を進めて」

必死になって否定するのだが優には確信があるらしく紅葉の抵抗は却下される。

優の言葉に頷き主は盛り上げの演出のためか、拳を握り語気を強くする。

「優、私はあなたの姉の才色兼備な久遠寺未有でないわ、勘違いしないで頂戴！ そうね、こうしている間にもうら若き美女の、知性と教養を兼ね備えた彼女の純潔があつた悪魔の手に落ちようとしているのよ！ そういったことは警察に？ 無駄よ、家の中とは違つて敵は外面だけは頑健に取り繕つているのよ！ 彼等もその偽りの仮面に騙され取り込まれてしまつてるわ」

未有と呼ばれた主人は我こそは正義とばかりに握つた拳を天に翳す。

お付きのメイドは彼女の動作に合わせ横で玩具のラツパを吹いているのだが、それがひどく胡散臭い。

ラツパの音に区切りがつくと未有は指を鳴らす。

再び部屋が暗闇に落ち、彼女の後ろの壁に映像が映し出された。

そこに写つていたのは黒髪の女性、烏の濡れ羽色とはよく言つたもの、彼女の美しい長髪はその鋭くも妖艶な光をたたえた瞳によく合っている。

その容姿は男女の違いはあれ隣の優によく似ている。

画面の中の彼女はひどく立腹なようで何かを叫んでいるのだが音声が無いため内容は窺い知れない。

「そう、この悪魔の名は久遠寺森羅！ あらうことか実の妹である久遠寺未有をはめた

張本人よ！ 言葉巧みに未有を誘導し、今度開催される若獅子タツグトーナメントで賭け事を取り決めた。かわいそうに薄幸の美女である彼女は、お互いの推薦する選手を出場させより目立ったほうが勝者だなんてふざけた内容での勝負を受けてしまったの。まあ、より上位に残ったほうが目立てるのだから、強いに越したことはないわよね。この女は自分が賭け事を提案したのだからと久遠寺家で強さと何より経験を備えた執事長の犬を譲ると言ってきたわ。聡明な未有の事、普段なら不自然な彼女の譲歩。森羅の企みに気付いていても可笑しくないのだけど、森羅付きのメイドが彼女のジュースにアルコールを混ぜるといった蛮行に出たため、勝負を受けてしまったのよ！」

その時の怒りを思い出したのか、第三者を装っているはずの彼女の声がだんだん大きくなる。

お付のメイドは初めの内は団扇で扇いでいたのだが、いつの間にか懐から出した小型の扇風機にその任を譲渡している。

「結果として大佐を取ったのだから次は自分の番だとこの家の警備の二番手であるナトセをその手中に収めることを成功させた。問題は大会へのエントリー時に起こったのよ。九鬼の大会本部曰く、アブラuzziシユな髭がダサイ中年はこの大会に出場する権利がないそうよ。——そう、あの女は初めから年齢制限があることを知っていて最強の札を自分に残したのよ。慌てて抗議したのだけど取り合ってもらえないわけがなく、後の

祭り。家族が顔を合わせる食事の時間毎に罰ゲームのプランを愉しそうに説明してくれたわ」

彼女の結わえた二束の黄金の髪がぶんぶんと振り回される。

ちようど斜め後ろに控えていたメイドがシャドウボクシングの要領で躲したり叩いたり遊んでいる。

「急遽、私が擁する選手を見つけなければいけなくなったわけだけど、久遠寺家が誇るナトセを超える実力者なんてそう簡単に見つけられる伝手なんてあるはずもなく悲嘆にくれていたの。暗中模索する未有に手を差し伸べてくれたのは誰であろう。そこにいる愛する弟。彼があなた達に白羽の矢を立てた」

指をさされた優に視線が向けられる。ようやく、話が見えてきた。

どこで知ったかはわからないが、そのナトセに対抗する為に鬼面幹部であった紅葉を求めているということか。

面識がなくとも鬼面の幹部という肩書にはそれなりのものがあつたのだろう。

切羽詰まった彼女が今学園で噂になっている彼等に力を借りようとするのも領ける。改めてかつての自分たちの影響力を思い知る。

だが、学園で正体を露見するような迂闊な行いをしていないはずである。

優の人相にも憶えがなく、ならば彼もまだもみじの正体に確信を持っていないはず。

これはカマをかけているに違いない。

「何を勘違いしているのかはわからないけど僕は鬼面についてはほとんど何も知りませんよ。噂話には疎いんです。——誰も話しかけてくれないから。それに、つい最近武神川神百代が彼等を潰したばかりで、もう誰も残っていないんじゃないかな。いや僕も決闘は見ましたが、名前ばかりで大した連中じゃない——」

「ああ、違うわよ、そんな偽者連中に用はないの。それにあなた達を呼んだのはネームバリューに惹かれたわけでもないわ。美鳩！」

紅葉は発言するたびに逃げ道が塞がれていく錯覚を覚える。
美鳩と呼ばれたメイドは映写機を操作し場面を早送りする。

「おお、久遠寺森羅！ 確か、七浜ファイルハーモニーで常任指揮者の。わし芸能人に会うのは初めてなんじゃが後でサインを貰えんかのう？」

横にいたスキンヘッドが映像の中の彼女を食い入る様に見つめた。

確かに地元の放送局が良く彼女のことを映していた。

映像の中の彼女は今よりか幾分か若く、そのせいか紅葉は彼女が久遠寺森羅であると気づくのに時間がかかったのだろう。

壁に映し出された森羅は大きく口を開け、身振りで誰かに指示を送っている。

テレビの中の彼女は冷静沈着であり、ここまで取り乱す事は珍しいように思える。

もし紅葉がこの場にいれば颯爽と彼女を助け、熱い抱擁を受けることが出来たかもしれないと他愛ない妄想が浮かぶ。

「美鳩、なぜこの二人は気持ち悪い笑顔を同時に浮かべているのかしら？ 確かに姉さんの取り乱した姿はなかなか滑稽ではあるのだけれど」

「私の愛する弟もたまにこんな表情を浮かべる時がありますが、健康面に問題はないので無視しちゃってください」

カメラアングルが引いていき、森羅の全体像が映しだされる。

その時点になって紅葉はようやく彼女が激怒している理由に気がついた。

簡単な話である。

空から降ってきた生卵が彼女の頭頂部で粉々に砕けていることに文句をつけているのだ。

「あの、なんで窓から空をみあげているんですか？ 今は映像に注目してないと未有さまがスネちやいますよ」

卵が降ってくるような異常気象でないことを確認し再び映像に。

「美鳩、もつと全体が映るようにしなさい。まあ、これであなた達が選ばれたわけはわかっちゃわよね？」

未だ理解できない紅葉は画面の隅々まで確認する。

「——そう、あなた達が久遠寺森羅に敗北の二文字を刻んだ人間だからよ」

紅葉は画面右上、屋敷の屋根の上を疾走する面をつけた幼い少年が森羅に向かつて生卵を投げつけている映像を見つけ石になった。

その横でやはり画面右下を指さし固まっている大男と目があった。

●
『ナトセ！ 早くそいつを拘束しろ！ この久遠寺森羅に働いた無礼、絶対に贖わせてやる！ 五体満足で帰れると思うなよ！』

森羅の氣勢は燃え盛る炎のごとく、再生された彼女の声は美貌に釣り合いのとれた美声。

紅葉は心の中、声援を送り画面上の少年の無事を祈る。

出来ることなら障害の残らないお仕置きにしてあげてほしい。

屋根伝いに走る中華麺男の面をつけた少年は両手いっぱい食料を抱えて先程ナトセと呼ばれた女性に追い掛け回されている。

『ほら、君。それは私のジャーキーだから返してくれないかな？ ちゃんと謝れば森羅

さまはやさしい人だから許してくれるよ。私も一緒に謝ってあげるから——』

『ナトセ、いいぞ！ うまく相手を油断させたな。いまだ、八つ裂きにしろ！』

賢い麵男はナトセの嘘を見破り、仕返したとばかりに走りながら食べ終えたバナナの皮を森羅に投げつける。

卵の白身が垂れてきた右半分、左にはバナナの皮がべつとりと張り付いていた。

「未有さま、彼等の顔色が真っ青になっていきますね」

モニタ内、森羅の顔は真っ赤になる。

美鳩の確認を、映像に喰い付いた主は爆笑して聞いていない。

『ぬおおお、スペシャルな私をここまで追い詰めるとはなんとというパワー。お主なかなかやるな!』

野太く威勢のいい声を上げている執事服姿の中年男性。

男性は立派な皇帝髭を携えており服の上からでも判るしつかりとした筋肉質な体格を誇っている——のだが彼の上に跨がり逆エビ固めをかけている牛男の面を付けた少年がいる状態で、余裕を魅せつけ髭を整えるのは間違っている。

『フツ、スペシャルな男はいついかなる時でも余裕をなくさな、腰がアアア!!』

余裕を見せたことが気に入らないのか、跨がった牛男が男性の髭を引っ掻こうと身体を倒すと、男性の腰がますます曲がることになった。

久遠寺家の住人にとって阿鼻叫喚といった光景を尻目に笑い疲れ満足したのか未有は説明を続ける。

「これがあなた達が呼ばれた理由、納得した？　で大会について話したいんだけど」

まだ足掻ける、紅葉は己を奮い立たせる。

なぜこの家を襲ったのか当時の記憶を紅葉は思い出せない。

だが彼女たちに捕まった記憶はない、ならば素性は明らかになっただろう。

「はあ、いい加減認めろよ、お前たち。ここまで来てなんで希望が残っているって確信した顔ができるんだ！　——もういいや、これが逃げ切れない理由になるだろ」

そう言つて優が懐から取り出した物は、映像の端っこ、久遠寺家で一番大きな木の枝に乗つてことの成り行きを見守っていた少年がつけている米男の面と寸分違わないものだった。

●
優の出した米男面を手に取り確認する。

顎先と裏側の額部分に数字の三が刻印されており確かに米男のものであると確認できる。

だが、それだけでは納得出来ない事柄がある。

「そうじゃ、例えお前が米男だとしても、なぜわし等の素性を知っておる？　わしらは互いの本名は愚か素顔さえもしらん筈じゃぞ」

そう紅葉達は初めての出会いの時から既にその顔を面で隠していた。

紅葉が鬼面幹部で素顔を知っているのは最初の会合の時に素顔を晒していた『大蛇』のボスである蛇神だけである。

当時の二番は用心のためか顔を隠していたし、あとから入った幹部連中も基本二番が面接をした後、面をつけてからの目通りとなつている。

紅葉達の素性を把握しているのなら優が米男だということは矛盾している。

「いや、お前たちとつるむようになってからすぐに、うちの執事に後をつけさせた。だって、友達の顔がわからないなんて不安だろう。いざというときに優位に立つためにはなるべく多くの弱味じゃなくて情報を握っておかないと」

優の言葉はなるほど納得出来るものであった。

確かに紅葉にも手段があれば同じことをしていただろう。

首を縦に振り肯定する。

「あら、いやだ、あれで納得してしまつたわ。普通に顔を見せ合つて仲良くなるといふ選択肢はないのかしら？ —— 私の弟の友達が少ない理由を垣間見た気がするわ」

「クルツクー、そういうえば、優さまが屋敷にご友人を連れてきたことがありますね。私も納得しましたー」

関連して紅葉はまた一つ思い出す。

久遠寺家にいたずらをしかけると決めたのは米男だったはずだ。

この家の身内が発案者ならかわいいイタズラで済むかもしれない。

「ん、ああ、気にすることはない。このイタズラは、夢姉さん、俺の三番目の姉が長女にひどい仕打ちを受けたことが発端なんだ。横暴な長女を懲らしめるためにやったことだからお前らが気にすることはなにもないよ」

こちらの心情を慮ってくれた優に紅葉は気が楽になる。

これでこの事件は過去の笑い話へと風化したのだろう。

安堵する紅葉の眼前、優の肩を叩き画面を見ると促す彼の姉。

画面が米男の座る木の枝に。

その隣丁度見きれていた反対側の枝が映るよう移動する。

『ナトセサーン、早く助けてよ。うえくん、もしかして夢、ナトセさんに嫌われてるのかな？ ううん、そんなことないよね。ナトセさんは夢の専属執事だし、仲良しだし。』

——でもじゃあなんで夢を無視してあの子を追いかけてるのかな？ 夢が目立たないから忘れてしまったんじゃない？ あくん、どっちにしても悲しいよー』

反対側の大きく太い枝にはロープで逆さ吊りにされているピンクの髪の少女の姿があった。

映写機から女性のすすり泣く声が室内に響く。

「いや、ちがうんだ」

「何が違うの優？　大切な姉を、私の可愛い妹を逆さ吊りにしている正当な理由があるなら聞きましょうか？」

詰め寄る小さい姉に狼狽する弟。

紅葉は風向きが変わったことを実感し、メイドが入れてくれた紅茶をスキンヘッドとともにご馳走になっている。

優の顔が姉である森羅によく似ているなど他人ごとで二人の言い合いを眺めていた。

「そう、夢姉さんキャラが薄いし！　これが未有姉さんみたいにキレイで存在感がある人なら俺も絶対こんなひどい目に合わせなかつたよ」

理由になるのかわからない言い訳と姑息なおべっかを使うかつての仲間を指さし笑う紅葉と牛男——とメイド。

世辞が功を奏したのか、未有は微笑し映写機を弄る。

胸を撫で下ろす優にこのまま今回の頼み事も流れてくれないかと紅葉は願った。

『そうだ！　実はナトセさんは夢の才能を信じていて、この苦境から見事脱出することを願っているのでは。よし、夢はやるぞ』

ロープに吊るされたまま体を前後に揺らす三女。

振り子の要領でどんどん揺れ幅が広がっていくわけだが、まさか回転して枝の上に移れるなんて馬鹿な考えはしていないはずだ。

『あれれ、届かない、うーんだんだん気持ち悪くなってきた。でも夢は諦めないよ！
夢を信じてくれたナトセさんや久遠寺家の皆のためにも！』

結構な馬鹿だった。

逆さ吊りにされた上に前後に揺れたせいも、急速に彼女の顔色が悪くなっていく。

誰か彼女を止めるものはいないのかと紅葉がやきもきすると、彼女の愚行を制止する声が届く。

『夢、いくらやってもそれじゃあ意味が無いわ。血が登った頭に遠心力でますます血液が集まるし、振動で枝が折れそうになってるわ、止めなさい』

救いの主は彼女のすぐ隣にいた。

『夢、あなたより身体の弱い私はもうダメかもしれない。姉さんと仲直りしてしっかりこの久遠寺家を守って——いつて——』

——救いの主は彼女のすぐ隣に同じように吊るされていたりした。

室内を沈黙が支配する。

「——友よ。こうして会えることが出来て嬉しいぞ！」

突然、優がその両手を広げた。

不自然なまで満面の笑顔で旧友二人を強く抱きしめる。

紅葉も牛男もやはり不自然に大きな声で再会を祝う言葉を口にしたりした。

感動の再会、拍手の嵐、全米が泣いた、三人は泣かなかつたし、メイドも主人も泣かない。

「——もしかしてあれでごまかしたつもりなのかしら？ あれ、おかしいわね。私の弟って確か、入学以来二年間、成績上位十番以内から落ちたことがないはずなんだけど」抱き合つた三人の視線のみが器用に彼女たちの方を向いている。

涙一つ流れない感動のすすり泣きが浸透した。

「はあ、やっぱり姉さんに似てるんだわこの子。楽しくなると見境がなくなるところとか。頭が良いくせに少々お馬鹿なところとか」

肺の奥底から深いため息を吐く次女。

「はい、そうですね『お三人』ともよく似てらっしゃいますー。私は前から気づいてましたよー」

得意気に胸を張るメイド。

抱きあう男たちの中、紅葉は気色悪いから早く止めてくれることを願っていた。

紅葉は夕陽に散る

モニターを背にメイドが立ち、教えを請う生徒のように紅葉達男性陣が並んで椅子に座り彼女の話を聞いている。

彼女の主人である未有は飽きたのかそれとも顔を隠すことの無意味さによろやく気付いたのか、仮面を外し素顔を晒していた。

未だに仮面を付けたままメイドは主が素知らぬ顔でそれを外したことによろやく気付き、裏切りと羞恥を隠し己の仮面も外し何事もなかったように紅葉達に説明を続ける。

「えー、それであなた達が戦うことになるであろう森羅様の推薦されたペアがこちらになります。右にいる女性がナトセさん。久遠寺家で執事兼護衛を任されていてムエタの達人、敵のエースです。彼女の足技は軽くコンクリを蹴破るので注意してください」

正体を脅しの材料に取られ、戦うことを後ろ向きに同意した二人は右耳から入ってくる彼女の情報をしっかりと左に流していった。

『それで、次に紹介するのは私の最愛の弟である上杉錬！ 彼女のパートナーを努めており、特にこれといった武術は習っていません。しいて言うなら喧嘩殺法といったところででしょうか。ナトセさんより実力は劣るものの負けん気は人一倍です。後遺症の残る怪我等は負わせないように優しく注意してあげてください——えっ、うるさいですか？ じゃあ私の話をちゃんと聞いてくださいね』

二人の気が入っていないことに気付いたのだろう、どこから取り出した拡声器をメイド服の裾に放り青筋を立てた笑顔を上げる美鳩。

彼女を怒らせたことと、澄んだ女性の声も度を超えた音量があると不快になることを理解した紅葉は質問を返し空気を落ち着かせようとした。

「いや、対戦相手なんだろう。たとえ大怪我をさせたとしてもそこは不可抗力で目を瞑ってもらえないんじゃないかな？ それに弟さんを怪我させないように僕らが配慮しても何のメリットもないしね」

同意するようにスキンヘッドの男、岳蘭も紅葉の言葉にしきりに頷いてる。二人の反応はあらかじめ予想していたことなのだろう美鳩は眉一つ動かさずに告げる。

「はい、それはわかっています。ですがこれだけは約束してもらわないとこっちも困ってしまうんですよ。錬ちゃんに万が一のことがあったら、私がただじゃおきませんから、

「ここは気持よく了承して頂けないでしょうか？」

迫力のない精一杯の怒り顔を作り二人に警告をよこす美鳩に失笑が出る。

そこいらの野良犬にすら抵抗できない彼女の細腕でいったい自分たちに何が出来るというのか。

紅葉と岳蘭は顔を見合わせ、嘲笑を堪えるように頷きあった。

「んんっ、なんじゃ。そこまで弟さんが大事なら、条件次第じゃ引き受けてやらんこともないん——」

「ああ、確かに私のか弱く美しい白磁の腕ではあなた達に出来る事はありませんね。ですから、錬ちゃんに万が一のことがあった場合は、精一杯心をこめて呪うことにしましょう」

何かしらの譲歩、自分たちの利益を得ようとするさもしい岳蘭の言葉を遮り美鳩は静かに、確かな響きを持った声で宣言する。

それまでと何ら変わらない口調、まるで軽い用事を済ますように発せられた言葉に紅葉の理解がようやく追いついた時、二人は大声を上げて笑った。

「くくっ、呪いつて。いやあ、それでいいならいくらでも呪ってくださいよ。僕らは一向に構いませんよ。大体、いまだきそんなオカルトを信じている奴なんているんですか？」

紅葉の笑顔に、それ以上に満面の笑顔を美鳩が返す。

「ですが私のような弱者に出来る事なんてそれくらいしかありませんから。神様が聞き届けてくださるように、しっかりと作法を守って、白装束を身に纏い丑の刻に参ることにしましょう」

「いや、だからそんなことをしなくても、僕らに報酬を——」

「この思いを込めて手作りをした藁人形で……」

いつの間にか彼女の手にある藁人形。

「だから呪いなんてわしらには——」

「三百六十五日、雨の日も晴れの日も——」

「ちよつと僕達の話を」

「あなた達か私の寿命が尽きるその日まで、一日も欠くことはなく——」

無言になる二人。

暑くもない室内で汗一つない彼女の髪が一房口元に張り付いている。

いつの間にか紅葉達に近づいた美鳩が睨めつけるように二人の顔を覗きこんでいる。

無表情に変わった彼女に背筋が寒くなり紅葉は目を逸らし大柄な岳蘭の陰に隠れようとする。

それを許すまいと右腕を使い紅葉を己の正面に追いやろうとする岳蘭。

次いで出た美鳩の再度の要請に崩れ落ちるように二人は同意を返した。

「あ、もうそんなに怖がらないでください、冗談ですよ。私だつて呪いなんてもう信じませんから。でも、お二人が説得を快く受け入れてくれて良かったです!」

● 彼女の発言を聞き咎める気力すら紅葉には残つていなかった。

「これで森羅様や久遠寺家の方の紹介は終わりです。あつ、これはもう必要ないですから返しておきますね」

室内の冷えた空気の流れるままに美鳩の説明は終わってしまった。

不平一つこぼさない紅葉達のおかげか、美鳩の言葉を遮るものはなく久遠寺姉弟の顔や、危害を加えてはいけない旨など注意事項がなされていった。

その終わりに渡された己の髪がいつ採取されたのか、何に使用されるはずだったのかに気になり紅葉の思考は停止してしまう。

「美鳩、まだベニのことを話していいわよ。彼女で使用人を含め久遠寺家全員の顔を教えたことになるわね」

美鳩の講義の間、部屋の端の椅子に座り姉と弟は優雅に紅茶を楽しんでいた。

彼女の指摘にまだ講義が続くのかとうんざりした表情を浮かべる紅葉と岳蘭。

やる気のなくなつていく二人を鼓舞するよう手を叩き、必要以上に明るい声で美鳩は仕切りなおす。

「はい、モニターに注目、つて、映りませんね。んー、故障でしょうか？ では口頭で。彼女は赤い髪の毛のちよつと目付きの悪い女の子で、鍊ちゃんと同じ久遠寺森羅様付きのメイドで朱子、通称ベニちゃんです。ちよつとお金に汚いところもありますが基本的にはいい子ですよ。我が愛しの弟の恋人でもあります。あ、注意事項があります。彼女は私の愛する鍊ちゃんの恋人なんですから——」

先程から何度も繰り返す危害を加えるなという美鳩の戒めの言葉に二人はげんなりした。

美鳩の言葉が全て終わる前に紅葉は気のない返事を入れようとす。

「顔を合わせ次第死なない程度まで精神的危害を加える事を許可します」

それは美鳩が許可していい問題では無い気がするのだが、疑問に思いながらも頷く二人。

「できれば、鍊ちゃんと積極的に別れるように仕向けてくれるとなお良いです。成功した場合は報酬も用意しますので頑張ってください！」

両拳を胸の間に持つてきてこちらを応援する美鳩にどうしたものかと紅葉達は首を傾けた。

仕えるべき主とその家族、そして同僚には手を挙げぬよう真摯に説得されたのだが彼女だけは別口で構わないのだろうか。

頭を抑え小さな彼女の主人が近寄ってくる。

「——美鳩、二人の仲はもう認めたんじやないの？ 鍊が幸せになるなら身を引くつて言つたじやない、いい加減諦めなさい」

主人の諫言を受け、美鳩は口をとがらせた。

「でも、恋人にはなりましたが、まだ結婚すると決まったわけではないですし。まだ私もチャンスがある筈です。天に祈るのは人事を尽くした後と決まっていますし」

尽くすなど主にお叱りを受け不本意ではあるのだから彼女が同意する。

そのやり取りを椅子に座つたままの優が落ち着いて眺めている辺り、久遠寺家にとつては日常の光景なのだろう。

本当に朱子が憎いのなら紅葉たちにしたように美鳩が彼女を呪っている。

落ち着いた美鳩と当日の打ち合わせや、自分たちの正体についての配慮を話しあい終了する。

朱子の顔だけがわからないのは不安だが、現状紅葉達の正体を知っているのはここにいる人間のみに。

そろそろ他の使用人や家族が帰ってくる時間になったので顔見知りになるのを避け

るために話し合いを切上げるしかない。

「ああつ、そうです。ベニちゃんの写真がありました。顔だけですがつつかり写つてます」

そう言つて美鳩が取り出した顔写真に皆の表情が曇る。

確かに小さい写真ではあつたが、解像度は悪くなく彼女の人相までしつかりわかる。目つきの鋭くなつた表情は怒っているのか、写真うつりは悪くないので、何もこのような顔で撮ることもないだろうに。

「美鳩、あなたオカルトは信じていないんじゃないの？」

「はい、ですから『もう』信じてません！」

主の疑問にハキハキと答える美鳩は確かにおしとやかなメイドに見える。

彼女の明るい言葉が響き終わると再び室内を静寂が包む。

美鳩の出した朱子の写真に問題はなかった、表情もこの怒り顔が彼女の持ち味と言えないこともない。

——ただし彼女の右手にある藁人形の頭に朱子の写真が貼り付けられていなければ。

観客の歓声、花火の上がる音、七浜スタジアムは熱気に包まれる。

空は快晴、青空が広がり、神奈川近辺の武闘系のイベント事は雨天で中止になることは殆ど無い。

若獅子タツグトーナメント本選開始の号令がかけられ、スタジアムの四方にある選手入場口から予選を突破した選手たちが次々とリングに入場してきた。

そのたびに黄色い声援や野太い声、冗談交じりな下品な野次まで飛ぶ始末。

今日この時ばかりは川神で年中無休で営業されている老舗の菓子屋ですら暖簾を下ろしている。

観客席の中にある解説席には武神こと川神百代と、松笠に住む著名人である指揮者の久遠寺森羅やその他数名がゲストとして呼ばれていた。

選手たちは誰も予選を勝ち抜いたことによる自信からか、年かさが低いことを感じさせない面構えをしている。

歓声に手を振って応え中央に移動するのは川神一子。

少女は相棒であり幼馴染でもある源忠勝を後ろに歩いて行く。

視線の先にはこれから競い合う強敵たちを見据え、早くも入れ込んでいる。

後に続く入場コールの響く中、選手の中に見知った顔を見つけ、忠勝に断りを入れ彼らの方に向かっていった。

知り合いの内一人は黛由紀江、一子の仲間たち共通の後輩である彼女は劍聖黛十一段の娘でその実力は直接目にしたことはないが百代の言では相当なものだとのことである。ここにいるのは不思議ではない。

ただ、もう一人は違う。

一子個人の後輩でつい最近交流ができ自分を慕って相談事を持ち掛けてくる彼、荒場紅葉がここにいることに首を傾げてしまう。

一子の知る限りの情報や彼の相談事から推測するに余りこういった荒事に長けている印象ではなかったのだが予選を通過したのだそれ相応の実力を持つていたのだろう。

後輩二人は談笑し、由紀江はぎこちないながらも笑顔を浮かべている。

共に友人の少なさを嘆いていたことを知っている一子は嬉しく思った。

『ところで一子先輩。パートナーの姿が見えませんが、どの方ですか？』

『えつと？ 一子先輩ならあちらの方にいらつしやいますよ。そういうば自己紹介がまだでしたね。私は黛由紀——』

『——すいません人違いです』

己の名前が耳に入り挨拶を交わそうと近づくのだが、直前に紅葉が由紀江にお辞儀をし足早に離れていってしまった。

由紀江は目を点にし虚空を見詰めており話しかけ難いので、離れていく紅葉を呼び止

める。

紅葉はこちらの顔を確認すると、頭頂部からつま先までを舐めるように観察する。

なぜそのような視線をこちらに向けるのか疑問ではあったが、性的な意図を含まない視線であったために一子は訝しがるが気にしないことにした。

由紀江との悶着が気になり声をかけたことを説明する。

「えっと、あなたが一子先輩よね？ いえ荒場くんに声をかける知己の人間はあなたしかいないって言うからちよつと勘違いしちゃったのよ」

えらく他人ごとである紅葉の言葉と、語尾が少々女言葉であることが耳に入り一子は指摘する。

「そ、そんなことはないわ——だぜ。私、じゃなくて僕はいたっていつも通りですよー」
風邪でも引いたのだろうか、声がまるで若い女性のように高くなっている。

それとも彼の不審の原因は、一子がなにか機嫌をそこねるような言動でもしてしまったせいではと心配になる。

紅葉の表情が先程からピクリとも変化せず無表情を貫いている事も拍車をかける一因だ。

『——そうですよね。初めて話しかけたのに、やけにフレンドリーに対応してくださいるなどは思ったんです。人違いですか、その方はそんなにも私に似ているのでしょうか。』

似た容姿の彼女にはいて、なぜ自分には友人がいないのでしょうか。——生まれて初めてです、松風。こんなにも人を妬ましいと思うのは」

『まゆつち、気持ちにはわかるけど、殺気を放ち過ぎだぜ。周りのライバルは愚か、パートナーのむきこつすも逃げていったぞ』

なんだろう、一子に悪寒が走る。

振り返ってみても少し離れた所に由紀江がいるだけで、他の出場選手はこちらを見ていない。

気のせいと判断し再び視線を紅葉に戻す。

「あの紅葉くん、なんだかこの間学校であった時よりもだいぶ痩せたようだけど、大丈夫なの？ 本選は予選と違ってみんな強い人ばかりよ。アタシも紅葉くん達『大爆弾コンビ』とあつたら手加減なんて出来ないし、体調が悪いようなら棄権しても全然恥ずかしいことじゃないのよ」

一子は彼に実力がないと侮辱しているわけではなく純粹に氣遣っていた。

それも無理からぬこと。よく観察すればわかるが、紅葉の腕はまるで格闘などしたことのない女性の腕のようにやせ細ってしまった。

足なども普段の彼と比べると一回りも二回りもしぼんでしまっている。

決して引き締まっているとは表現できないそれが、一子より高い身長であるはずの彼

をととても小さく見えさせている原因でもあるのだろう。

普段よりも視線を下にずらしながら話す一子は熱心に忠告する。

「大丈夫ですよ、一子先輩、彼の体調は絶好調らしいわ。先程の言葉も荒場くんにしつかり伝えておきます。あなた優しい子ね——とどこでなぜ手を引つ張るのかしら？」

一子は紅葉の手を掴んだまま救護室は会場内のどこにあつたかを考える。

紅葉は錯乱状態にあるようで自分のことをまるで他人のように話していた。

彫像のような無表情、急激に痩せ細つた身体、自我を保てていないこと。

このままでは危険であると医学をかじつたことすらない一子にも容易に理解できた。

「あらら、ちよつと待つて下さいね。もう、からかつちやダメですよ、紅葉くん。川神さんが本気にしちゃつてるじゃないですか！」

焦る一子に声をかけてくれたのは頭髮をすべて剃り上げた黒い肌の男性だった。

彼の言葉で、紅葉が己を騙していたことに気付いた一子は抗議の視線を向けた。

「ああ、そうね。ごめんさいね、一子先輩。ちよつとおふざけが過ぎたようだったわ、だぜ。」

僕の体調は全然大丈夫！」

その言葉を証明するように両手を振り回し一子に見せてくる。

ここまで本人が強く希望するならば野暮は言えない。

不調があればすぐに棄権するように伝えこの話は終了した。

一子と紅葉のパートナーであるだろう彼には面識が無いため、話に区切りがついたタ
イミングで二人は自己紹介をする。

岳蘭と名乗った彼も川神学園の男子制服を着ていたので尋ねればやはり一子の後輩
であった。

体格は大柄で、紅葉の頭が彼の顎先にも届いていない。

武人の性か、こういつた頑強な肉体を観察する癖がついてしまっている一子は見上げ
るように確認する。

これだけの体格を誇るのならばやはり投技などが得意なのは、戦うことになったら
要注意だと心に刻みつける。

ただ上半身の頑強さに比べ、それを支える脚が細すぎる異様な体つきをしており、不
気味さがある。

それにはじめに話しかけられた時から彼は真横を向いたまま一度もこちらに視線を
よこさない。

にも関わらず一子の言動を理解しているふしが見受けられるということは視野が相
当に広いことを意味していた。

「岳蘭、いい、人と話すときはしっかりと相手の顔を見て話さない。とても失礼だし不

然よ」

「え、何を言ってるんですか？ 私はすっかりとお二人の目を見て——あ、ちよつと待つて下さいね。今レバーを」

紅葉が彼を注意するとゆつくりと岳蘭の首が回転する。

錆びついた歯車が出すきしむような音が一子の耳に入り二人に尋ねてみるのだが、気のせいだと返される。

音は観客の大きな声援ですぐにかき消されてしまい、出所の確認はできなくなる。

「ふう、しかし暑いですね。熱が籠もってしょうがないです。もう汗だけで、こんなの早く脱いでしまいたいですー」

暑さに不満を言う岳蘭だが、一子は腑に落ちない。

彼が着ているのは学園指定のシャツ一枚でそこまで熱が籠るものではなく、それに一滴の汗も彼の肌には浮かんでおらず、しかも愚痴を垂れ流す彼の顔に満面の笑みが張り付いていることが増々一子を疑問の中に落としこんでいるのだ。

『さあ、次は私、久遠寺森羅の推薦するチーム。久遠寺家の執事であり、刀のような切れ味を誇る足技のナトセと、鍛えられた鋼の信念を持つ男、上杉錬の足刀ーズだ!!』

解説席の森羅の口上と共に最後の出場者が入場する。

入場してきたのは男女の二人組で背中に『森羅』と綴られた山吹色の派手な道着を着

こなしリングに駆け込んできた。

彼女の容姿が美しいために男性の野太い声援が響く。

女性の靱やかな走りに一子が感心していると隣からも黄色い声援が聞こえてきた。

「きゃー錬ちゃん、凛々しいですー。ああ、今すぐ結婚を申し込んで、初夜を迎えたいほどに愛おしいです！」

隣の岳蘭の発言に一子の時が止まった。

彼の発言を正確に理解するために紅葉と目を合わせ確認をする。

「——ええ、彼は上杉錬のことを愛しているわ。そうよ、彼はホモなの。偏見を持つのは構わないけど、どうか秘密にしてあげて。なかなか理解を得にくい性癖なのだから、人に知れることは避けたいのよ」

どこかややくそ感の漂うなげやりな口調ではあったが、納得し一子は同意する。

だから終始女口調であったのかと腑に落ちるものがあつた。

確かに同性愛は日本ではあまり浸透していないが、一子はそんなこと程度で友人づきあいを考えなおすような愚かな人間でない。

ただ、このような大勢の観衆の集まる会場であんなに大声で愛を叫ぶのは不味いのはなからうか。

そう伝えたのだが紅葉は掌を振り、諦めたように何もしない。

事情があるようなのでそれ以上深くは踏み入れず一子をはがゆく思う。出来ることならこの後輩たちが偏見に晒されないことを少女は切に願った。

●
すべての出場者が出揃い、会場の大型モニターにトーナメント表が映し出された。

皆が一回戦の己の相手を確認し視線を交わし火花を散らす。

一子は初戦が仲の良い友人でも後輩二人でもないことを安堵し、意識的に闘志を燃やし対戦相手に目をやろうとした。

『ふむ、どうやら妹の推薦したチームはいないようだ。なに私だけではなく妹の久遠寺未有も推薦したチームがいたのだがどうやら予選を通過できなかったようだ。これでミューたんは罰ゲーム確定だな。さあ、思う存分可愛がってやることにしよう』

久遠寺森羅の発言、微笑ましい姉妹の仲間睦まじさに自身も姉を持つ一子の氣勢が削がれてしまう。

再度、闘志を上げようとする一子を見無視し、それは起こった。

選手入場口から、白い炭酸ガスが大量に吹き上がる。

皆が注目し徐々に晴れる霧の中、二人の人間が仁王立ちをしていた。

一体何者なのだろうか。

二人は観客の視線を意に介さず、堂々とゆっくりとした足取りで一歩一歩リングに近づいていった。

『僕は宣言する、我ら『ハグレ地獄コンビ』もこの大会に出場させてもらおう!』

スピーカーで増幅された彼らの声が流れる。

驚くことに、しんと静まり返った観客たちの中から彼らに対しての声援がちらほら聞こえてきた。

逆に女性の物はほんの雀の涙ほどしかない。

大会運営の一人である川神学園の長でもある川神鉄心はマイクを取り芝居がかった口調で彼等に問うた。

『じゃが、おぬし達はエントリーすらされておらんじゃろ？ それに勝ち残ったものは皆実力のあるものばかり、そこに正体の定かでない者を入れるなどという道理があるはずもなからう!』

大型モニターの中に映る一子の祖父でもある鉄心は毅然とした態度でそれを拒否した。

一子は祖父の力強い言葉を聞き、モニターの中のカメラ目線の鉄心に尊敬の視線を向けた。

地獄コンビの二人は共に精巧な仮面を装着しており、正体はわからない。

先ほど発言した男は阿修羅に似た三面の物を装着していた。

その後ろに控えていた彼よりも大柄な身体 of 男は額に太陽のマークを付けた石を組み合わせた仮面を付けて、腕組みをし笑い声を響かせている。

『なるほど、ならばわしらのために席を譲ってもらおうとするかのう。一組、このトーナメントに相応しくない弱体チームがおるようだし丁度いいわ。——お前らのことじゃ、大爆弾コンビさんよ！ わしらと戦う度胸があるならついてこい』

日光の男が挑発するように紅葉達を嘲笑い相棒を連れ会場の出口に走って行く。

これに我慢がならなかったのか、一子の静止も聞かず、紅葉達もその後を追いスタジオアムから姿を消した。

呆然とする会場の空気を動かしたのは映像が切り替わったモニターだった。

画面に映った景色に一子は見覚えがある。

よく山ごもり修行をした川神市の山中であった。

助けに行きたいが山道のため車が入れず、ゆうに三時間はかかってしまう

生い茂る木々に囲まれた花畑で夕日に照らされた二組の男たちが対峙している。

既に戦いは終盤に達しているようなのだが、紅葉達は傷だらけであるのに対し、アシユラ達は無傷。

肩で息をしている彼等に勝ち目があるように見えない。

一か八か紅葉達が呼吸を合わせ同時に飛びかかった。

捨て身攻撃が通じる相手ではない事は二人にもわかっているはずだがもはやそれしか手がなかつたのか。

一子は息を呑む。

飛びかかった二人の内、紅葉はアシユラの蹴りで空を舞い、岳蘭は日光男に捕まってしまう。

アシユラ自身も飛び上がり空中で下向きになった紅葉の胴体を両足で挟み固定しそのまま落下、迎えるは抱き潰すようにサバ折りを極めている日光であった。

『秘技 地獄のカスタネット！』

落下する紅葉の頭と拘束された岳蘭の頭部が勢いそのまま衝突する。

一子は悲鳴を上げることすら出来なかつた。

余りにもな衝撃のせいで、紅葉の身体は縦に裂け、岳蘭の首がもげてしまう。

『ふむ、これで僕達の出場は問題ないな。他の出場選手がもつと齒ごたえがあるように祈るよ。このゴミどもと違つてな！』

仮面達は親指で首を搔つ切る振りをする。

その非道な行いに、大切な後輩の尊厳を踏みにじったことに一子の中の何かが壊れた。

ほとぼしる感情のまま走りだそうとする彼女の前に立ちはだかる影があった。

一子のタツグパートナーである忠勝だ。

「タツちゃん、なんで止めるの。アタシは絶対あいつらのことを許さない、それに今行けばまだ紅葉くん達の命は助かるかもしれないのよ！ それでもアタシを止めるついでうの」

一子の声は怒りを押し殺した小さなものであった。

なぜ幼なじみでありいつも自分の味方であった忠勝が行く手を阻むのか。

もう手遅れだとも言うのか、それは一子にも理解できる、だが納得はできない。

これがなにも出来なかったという事実から目を逸らすだけの逃避であることを認められない。

押し通ろうとする一子に忠勝は空を指差す。

つられて、一子も空を見上げるがただ青い世界が広がっているだけだった。

「一子、どうやってあそこまで行くつもりだ？」

次いで出た忠勝の言葉を一子は咀嚼する。

手段として一番近い道路に出て、タクシーを拾い山の手前で降り、歩いて行くしかないのだがどうしても時間がかかってしまう。

——何かが腑に落ちない、解答ではなく設問がわからないことに一子の勢いが急激に

弱まる。

最後にモニターを見るように忠勝が促してくる。

映っているのは赤い夕陽が照らす中、二人が花畑から遠ざかって行くところ。

アシユラ達はバラバラになった紅葉達の前を通り過ぎる。

無惨にも引き裂かれた少年の身体からは大量の白い綿が飛び出していた。

一子は無言になった。

そして周りの人間の様子を伺い始める。

映像の最後には力強い筆文字のテロップが流れていた。

『撮影・監督 久遠寺未有 協力 九鬼広報班 題字 川神鉄心』

一子は周りの人間の反応を確かめた後、掌で顔を隠すように覆った。

忠勝は言葉を探しているのだが適切なものが見つかからないのだろう口をモゴモゴと

動かしたまま何も喋らない。

『ええい、なんと卑劣な奴らか！ このクリステイアーネ・フリードリヒが正義の名の下、成敗してくれる！ 行くぞ、マルさん！』

『お嬢様、どうか落ち着いてください！ それとどうか声を潜めてください、お嬢様の純粋さが周りの連中にはれてしまいます！』

少し離れた場所にいる友人とのお付の赤髪の女性を見て、自分もああだったのかと

ますます一子の顔に血が集まっていく。

そして一子は一番大事なことに気付いた。

忠勝の制服の袖をそつと掴み嘔く。

「——タツちゃん、この前ランニングの途中でとつても美味しいお肉屋さんのコロツケを見つけたの。良ければ大会が終わった後、一緒に——」

「——誰にも言わないから安心しろ、一子。それとまだ誰にも気づかれていないから、素知らぬふりをして突つ立ていりやばねえよ」

察しが良く気立ての良い幼馴染を持ったことを感謝した一子は開会式の最中ずっとぎこちない笑顔を浮かべ棒立ちだった。

若き獅子達の戦いが始まる。

姉弟の絆と天秤

客席の間の通路を進む女がいた。

日本的には珍しいが、こと川神においてはそこまで珍しくなくなりつつあるメイド服を着て赤い髪を後ろに束ねた女性——朱子は足早に、しかし急ぎすぎず、見苦しくない程度で速度で歩いていった。

解説席にいる己の主——久遠寺森羅の為に自販機を目指す。

飲み物ならば九鬼の関係者が用意してくれていたのだが、森羅はそれが口にあわないと、朱子に使い走りを命じた。

主の舌を満足させるものがそこいらの自販機にあるはずがなく、それは当然森羅も理解している。

それに、九鬼が用意したものが上等でなかったわけではない。

実のところ、森羅の推薦したコンビが、妹の未有のコンビに開会式のパフォーマンスで、大きく水を開けられたことによる八つ当たりだったりする。

解説席の肘掛けを手の指で叩き、苛立ちを他者に示す森羅に逆らえるものはなく、スツッフや朱子は冷や汗をかきその場の重圧に耐えていた。

ただ一人、同じように解説席に座り、それらの一切を気にしていませんよと言ったふうの未有が、姉の拒否した九鬼が用意した紅茶を飲んでいたことも拍車をかける。

主を尊敬しているのだが、正直、あの場から開放された朱子はほっと一息つくくと、会場的大型モニタに映しだされたトーナメント表に目を向けた。

先程、発表されたトーナメント表には第一試合に、森羅の推薦したコンビが映っていた。

同じ、森羅の従者であり、恋人でもある上杉錬と、同僚のナトセのタツグチーム。

トーナメントの再発表までには、交渉による位置の入れ替えが可能であった。

だが、あの頭をつかうことを知らない二人のことだ、このまま交渉をすることなく、第一試合を迎えることだろう。

視線を下ろし、リングに目を向ければ、芸人達による前座が行われている。

演目の一つが終わったようで、リングからはけていく男たちと入れ替わりに入ってきたのはサーカスのピエロだった。

彼の後に付いてきたパンダがリング中央でお辞儀をし観客を湧かせる。

朱子はパンダを用意することのできる九鬼の財力に惚れ惚れし、これで病的にパンダ好きな森羅の機嫌が幾分、回復することを喜んだ。

ピエロの指示で、ホワイトボードに高校レベルの数学の公式証明問題の解答を書き込

んでいく珍獣を尻目に、足取り軽く缶入りの紅茶を買いに行く。

解説席のマイクを通して流れる主の歓声に、小銭を握り自販機のラインナップを見る。

当然、どれも朱子の入れた紅茶に敵うものはない。

だが、それでも選ばないとならない。

正解がない中、迷う朱子の肩を叩く人物がいた。

「やつほー、朱ちゃん！　こんなところでどうしたんです。鍊ちゃんがないのに森羅様のそばを離れても大丈夫なんですか？」

恋人の姉であり、朱子の同僚である上杉美鳩である。

同じ久遠寺家のメイド服を着こなし、炎天下の中、汗一つかいていない涼しい顔で立っている。

夏服ではあるものの、ヘッドドレスまで付いた制服を着込みながら、暑さとは無縁な彼女を、妖怪だという人がいても朱子は不思議に思わない。

久遠寺家という括りにおいては仲間だが、現在、森羅と未有の間で姉妹戦争が勃発しているのを気を許していい相手ではない。

「なによ、鳩。あんたこそ、未有様の隣にいらなくてもいいの？」

いくらか刺のある口調になったのは、お互いが、森羅と未有の対立に流されたわけで

もなく、日々、朱子をからかってくる美鳩に対する反発でもない。

弟離れしない、未来の小姑への牽制を込めたものだった。

口では弟離れを宣言した美鳩だったが、朱子の知る限り、弟への過剰な身体接触は減ることはなく、朱子に対する地味な嫌がらせが増えていたりする。

睨みつける朱子の眼力などなんのその、笑顔で受け流す美鳩は自販機とこちらを交互に見て両手を叩く。

「ああ、森羅様の飲み物を買いに来たんですね。だったら、私がお屋敷でアイステイーを淹れてきました、よかつたらどうぞ。もう、そんなに遠慮しなくても、同じ主に仕える仲間なんですから、助け合いは当たり前ですよ！ 良かつたら朱ちゃんも、ここで一杯飲まれていかれませんか。水分補給は大事ですよ」

察しの良い同僚は、懐から魔法瓶と取り出し、入れ物になっている蓋に注ぎ、こちらに差し出す。

彼女の好意に、いらぬ意地を張っていたと朱子は苦笑し、グラグラに煮立っている紅茶を受け取り、地面に叩きつけた。

「テメエ、つくそ鳩！ この暑い中、こんなもん飲めるか！ 喧嘩売ってんならあたしは買うぞ！」

美鳩のメイド服の胸元を掴み、朱子は気炎を吐く。

「ええ、朱ちゃん、ひどいです。どうやったらここまで人の好意を受け取れない根性の曲がりきった子に育ってしまうんでしょう、くるつくー」

美鳩は眉一つ揺らさないで、楽しそうに朱子を観察してくる。

怒つてもこちらが疲れるだけで、何一ついいことがないのはわかっているのだ、朱子は相手のペースに乗らないように、無理やり自分を押さえつけた。

それが意外だったのか、美鳩は残念そうに、口を尖らせる。

美鳩はもう一本、魔法瓶を出し、そこから湯気を出していない紅茶を入れ、もう一度朱子に差し出す。

「はい、今のは冗談です。弟の恋人に熱中症にでもなられたら、鍊ちゃんにあわせる顔がありません」

こちらを気遣い見つめる顔には、真剣さが見え、こういうところは弟に似ているなど、呆れてしまう。

断るのも面倒くさいと、受け取った紅茶は、よく冷えており、喉を通る心地よさが朱子に力を与えてくれた。

「——美味しかった、ありがとう」

短い礼の言葉を受け取り、満足そうに美鳩は笑った。

彼女から、森羅のために魔法瓶を受け取った時に朱子は大きな欠伸を漏らす。

朝から張っていた緊張が、今の一杯でほぐれたのだろう。

『うわーパンダちゃんがかっこいいぞ。かわいいなあ、もう！』

スピーカーから流れる森羅の嬉しそうな声が、朱子の耳に響いた。

● 選手入場口から、こっそりと観客席を伺う褐色の女性から上杉錬は目をそらす。

コンビを組んだ年上の同僚は、恥ずかしそうに身を縮めている。

恥ずかしいのは錬も同じなのだが、間抜けさは己のほうが大分勝っているので、錬は開き直って、彼女の手を取り、リングへ向かった。

モニタに錬達の入場姿が映し出されると、囁し立てる男性のものが波の如く押し寄せた。

それも無理からぬ事だろう、ナトセは肌を惜しげも無くさらけ出したビキニ姿。

顔立ち、スタイルともに整っている彼女の肉体を意識しない男性など、同性愛者か、変態ぐらいだ。

「もう、いくら何でもこんな目立ちかたは恥ずかしいよ！ 森羅様の提案じゃなきや、今すぐに消えてなくなりたいよ！」

隠すにも限界がある豊満な肉体から、取り敢えず胸元を隠すことにしたナトセは、二本の腕で己を抱きしめるような格好になる。

ナトセとは違い鍊は胸を張って堂々と進んでいく。

たしかに恥ずかしい格好なのだが、ナトセは鍊と比べるとかなりましだ。

鍊の格好は更に布面積が少なく、尻は穴を隠すだけで、ほぼ丸出しのふんどし姿。

色は白ではなく、情熱の赤である。

日々鍛えてきた肉体ではあつたが、この強烈な衣装に比べたら賞賛をもらうことなく陰つてしまう。

開き直つて一步一步魅せつけるように歩くのだが、当然、若い女性の黄色い悲鳴など聞こえるはずもなく、わずかにあつた鍊を支持する野太い男性の応援は幻聴の一言で終わらせたい。

こうなつた原因は先のハグレ地獄コンビの大パフォーマンズにある。

会場の注目をさらつていった彼等の姿に、あせつた森羅が急遽用意した衣装がこの二つなのだ。

良くも悪くも浴びせかけられる声援に、解説席の森羅の満足した顔が見えた。

主の機嫌が治つたことに胸を撫で下ろし、それならばこの無様な姿もいくらか報われると、鍊は己をごまかす。

ならば、あとは勝つだけだ。

息を深く吸い、心を落ち着け、身体を戦闘用に切り替える。

戦闘態勢に入った鍊に気付いたのか、ナトセも恥ずかしさを振りきって身体を整え始めた。

● 二人は対戦相手のいるリングに上がる。

リングの上には既に人影が待ち構えていた。

四方を審判が、そして中央に待ち受けていたのは爽やかな風を背にした一人の騎士とその従者だった。

金の御髪をリボンでまとめた少女はレイピアを胸に掲げ、戦いの祈りを捧げていた。赤い従者は膝をつき頭を垂れて彼女の許しを待っている。

それは一枚の絵画のようであり、その立ち居振る舞いが、その美しさが彼女たちの強さを物語っている。

鍊とナトセは彼女等の登場に戸惑っていた。

挑戦的な笑みを貼り付けクリスティアーネ・フリードリヒはレイピアの切っ先を、鍊達とは反対方向に構えた。

「さあ、自分が成敗してくれる、かかって来い！」

——そして、クリスは友人にリングから引きずり降ろされた。

『ちよつと、待て、大和！ 自分はこれからあいつらを成敗するんだ！ 離せ！ 大体、一回戦で自分と戦うことになっていたのに逃げたあいつらが悪い！ なあ、マルさん？』

『はい、クリス、我が儘言わないの。一回戦の入れ替わりはルールで認められているだろ。それにこんな大舞台でアホを喧伝して回るのは俺達、ファミリーの恥にもなるから反省しような。マルさんも、悪いことをしたって解つてるからこつちを全然見てないだろ。いい加減、自分の失態に彼女を巻き込むのをやめような、顔を真赤にして困つてるだろ』

男子に、制服の裾を掴まれ、不満を言いながら引つ張られていく騎士と、恥ずかしそうに顔を下に向けた従者がいなくなった。

改めて対戦相手を探すも、リングには審判以外、誰も居ない。

『んん、なんだ、みゆうたんの手下は恐れをなして逃げ出したのかな？ とんだ見掛け倒しだったな！ では罰ゲームの執行を今ここで』

妹に対して暴走しそうになる森羅を止めたのは黒いタイヤだった。

いや、そうではなく、リングに転がってきたタイヤを追いかけ、走ってきた愛らしい獣だった。

突然のハプニングに観客席から彼等を見守る笑いが溢れる。

ピエロは、タイヤを掴み満足そうに遊び始めるパンダを誘導し、リングの中央に手を胸に当て、ピエロが一礼した後、腰につけていた鞭で地面を打つ。

——呼応し、野生の雄叫びが上がった。

凍りつく会場を気にとめず、再び鞭の音が響く。

パンダは獣の本性を表したかのように、爪で己の身体をかきむしる。

パンダ好きの人間は、目の前の蛮行を理解できず言葉を失っていた。

三度目の鞭、パンダの罅割れた毛皮が四方に飛び散り、中から生まれた男がいた。

ピエロの仮面はいつの間にか三面六臂の阿修羅面が変わっている。

『ハグレ地獄コンビ、見参！』

そこには久遠寺未有の刺客が、悠然と構えている。

続いて起こる会場の怒号は、否定であり、肯定、様々な感情の流れを内包していた。ただ一点、共通しているのは、皆が注目せずにはいられないということ。

目立つという勝負において、徹底的に差を付けられてしまった。

鍊の赤禪も、ナトセのビキニも既に霞んでしまっている。

どうすればと、鍊は弱気になり主に助けの視線を向けてしまった。

立ったまま、気絶している森羅に。

『もう、なんてことをしてくれたの！　あまりのショックに姉さんが失神してしまったじゃない！　私はあなた達をなんて言つて褒めればいいのかよ！』

解説席には嬉しそうに卒倒した姉の頬を突く妹の姿があった。

なぜ、この妹はあんなにも固い絆で結ばれているのに、こんなにも姉の不幸を喜べるのだろうか。

錬は自分たち姉弟に引けをとらない愛情を持っている主達のいざこざを不思議に思つた。

● 『それでは、一回戦、第一試合、始め！』

審判の号令で錬とナトセは構えを取る。

ナトセの脇をひらいた堂に入ったムエタイの構えとは違い、錬の構えは我流のものだった。

警戒するように敵から距離を取っていく。

アシユラと日光はその場から微動だにせず、二人に顔を向けている。

もつとも仮面の下の眼がこちらに向いているとは限らないのだが。

タッグマッチにおける定石は、相手側の弱者に狙いをつけること。

たとえタッグの一方がどれほど強かろうとも、一人がダウンした時点で負けになる

ルールでは、積極的に力の劣るものを狙うのが勝利の鍵となる。

選入手入場でのあの映像、ふざけた内容ではあったが、彼等の動きは眼を見張るものがあった。真正面からぶつかり合い、無事で済むとは思えない。

だが、いつまでも様子見をしても、埒が明かないのも事実。

ナトセと目で領き合い、振り絞った脚を踏み込もうとした時に、それは起こった。

『あー、あー、聞こえてますか。こっちに注目してください。』

スピーカーから響く女性の声に出鼻をくじかれた鍊は、一步後ずさり、敵との距離を保った状態で、映像の流れる大型モニタに注目する。

「あれ、ベニだ。何やってるんだろう?」

不思議がるナトセの疑問に答えるのなら、映像の中の朱子は暗い倉庫の中、柱に固く縛り付けられているように見える。

鼻ちようちんを作ってはいないが、目を閉じ柱に後頭部を持たれかけ寝ている。

嫌な予感がする。

もしやと思いい対戦相手を見ると、モニタに注目する観客たちと同様に、彼等も映像に釘付けだった。

鍊は拍子抜けしてしまった。

敵の策略の一貫だと考えたのだが、彼等の反応から判断するに、無関係なようだ。

だが、それならば、一体誰が、鍊の恋人にこのような仕打ちをしたのだろうか。

『ふっふっふ、上杉鍊、見えますか？　ここに縛り付けられているのが誰だかわかります？、そうあなたの恋人のベニちゃんです！　なら、これからする要求もわかっていますよね』

カメラに向かって歩いてきた正体不明の女性は、鍊が最も恐れていた事をのたまう。

女の顔はサングラスとマスクで隠されていて判別がつかない。

服装は久遠寺家のメイド服に酷似したものを着こなしており、背格好はちょうど鍊の姉である美鳩と同じぐらいだ。

髪型は長髪の両横に短く編み込んだ三つ編みを垂らし、頭頂部にはヘッドドレスを付けており、これまた美鳩とよく似ている。

美鳩似の、体型のラインは成熟した女性らしさを醸し出していた。

だがしかし、ここまで姉とよく似ている人物になると上杉鍊には全く心当りが無い。

姉に似たこの女性を一目でも見かけたならば、確りと記憶し忘れることはないだろう。

『えつと、鍊ちゃん、無視は止めてください！　悲しいからペナルティを下します！』

己の思考に埋没してしまった鍊に、腹を立てた女はどこから出したのか、玩具のハンマーで、縛られた朱子の頭に狙いをつけた。

玩具で叩かれたくらいで、意外に丈夫な鍊の恋人の頭がどうにかなるとは思えない。そう高を括っていたのだが、その場で飛び上がり、反動をつけた謎メイドの一撃はモニタを通して大きな音を響かせた。

突然の苦痛に悶える朱子は、目を白黒させ周りを見た。

縛られている己の状況と犯人を確認すると烈火のごとく氣勢を上げる。

『この糞野郎！ 紅茶に一服盛りやがったな！ あれ、もう一回戦始まつてる時間じゃないのかつて、あれ、鍊じゃないか！ テメエ、一体何が目的であたしを縛つたんだ、みは、ふぎや！』

誰かの名を呼ぶ言葉尻、言い切られる途中までも、メイドのハンマーが朱子をしばく。『はい、状況はわかりますか？ では要求に移らせてもらいます。この状況や立場を理解できない頭の腐った朱ちゃんの命が惜しくば、足刀ーズはただちに、負けを宣言してください！』

やはり対戦相手の回し者だったか、合点がいった鍊は歯を食いしばり、ハグレ地獄コソビを睨みつける。

睨まれた二人は、手を振り己は関係ないと言ったポーズを取り、鍊を馬鹿にしてきた。悔しいが今は先にやることがある。

「朱子！」

こちらの音声は向こうにも届いているのだろう、メイドと朱子は錬に注目した。

『お、おう。いいんだ、錬、あたしのことば』

「要求には応じられない！ 朱子もそれは望んでいない！ そいつはな、森羅様のためなら、いつでも命を捨てる覚悟を持っているんだ。そして俺もそれを理解している！ だからそいつに人質の価値はない！ 残念だったな」

錬は胸を張り敵に宣戦布告を掲げる。

そう、彼女の深い忠誠を、錬は理解している。

なればこそ、言葉はなくとも、彼女の決意がわかった。

朱子は目で語っていたのだ、自分はどうなっても構わない、錬に全力で戦えと。

『——おまえ、少しも葛藤しないんだな。本当にあたしの事好きなのか？ いや、その通りだ！ 全力で戦え、錬！』

何故か疑いの眼差しで朱子を観察していたメイドに、反発するように彼女も宣言する。

『つて、ちよつと待てい！ それは洒落にならないわよ！』

モニタの中、練り辛子を鼻の穴に詰め込まれ朱子は叫ぶ、彼女の決死の戦いを見届けることなく、錬は再び、拳を強く握りこみ、戦闘の構えを取った。

「いいのかな？ 絶対、ベニにあとで怒られると思うんだけど——つて、錬くん、あれ！」

困った様にナトセは頬を掻き、そしてモニタに指をさす。

——あれは何だ。

モニタの中の光景を鍊は理解できなかった。

純白と表現しても大げさでない女性が、いつの間にか猿轡を噛まされた朱子の隣に、同じように縛り付けられていた。

人形のように整っていて、だが暖かさを失わない容姿、鍊の最愛の姉がそこにいた。握った拳が震える。

なぜ、あそこに美鳩がいるのか、当然、鍊に対しての人質としてだ。

極度の緊張で口が乾いていき、言葉が出ない。

歯の根が合わない鍊より先に、彼女の言葉が届く。

『鍊ちゃん、戦って！ お姉ちゃんは鍊ちゃんの足手まといにはなりたくありません！

私のことはいいいから、勝ってください！』

美鳩の献身、健気に弟のことを気遣うさまは、まさに聖母の如きもの、鍊は泣きそうになる。

横で必死にもがく朱子は美鳩を助けようとしてくれているのか、恋人冥利に尽きた。

「馬鹿だな、鳩ねえは。俺が姉さんを見捨てられるわけがないだろう！」

鍊は心の底から叫ぶ、その言葉に美鳩は感動し涙した——鍊の言葉の後に、朱子も血

管が切れそうなほどに顔を赤くして同意してくれる。

鍊は満足だった、最愛の姉を救えたことに、そして恋人がそれを支持してくれたことに。

暴れたことで縄の締め付けが緩くなったのか、朱子は首を振り、美鳩の肩に頭突きをかましていた。

鍊は手を上げ、審判に合図を贈る。

縄抜けをはたした朱子は美鳩に飛び掛かり、縛り付けられ身動きが取れないはずの姉は両手でそれに応戦した。

『くそ鳩！　ここで決着を付けてやろうじゃねえか！　いい加減に弟離れしやがれ！』
『くるつくー、望むところです。大体、たった今、鍊ちゃんの本音は聞けたじゃないですか。負け犬のベニちゃん、明日の朝日を拝めないものと思ってくださいね！』

四つに組あう彼女達にようやく首を傾げた鍊の顎下、丸太のように太い腕が絡みついた。

「れ、鍊くん、逃げて！」

パートナーの呼びかけに応じる間もなく、日光の強靱な腕は、鍊の頸動脈をしめにかか

る。バタバタしていたせいで忘れていたが、すでに試合は始まっていたのだ。

油断していたというよりは、置き去りになっていた状況の中で敵は、こつそりと鍊達の後ろに回りこんでいた。

「鍊くん、少し待っていて、すぐに助けるから！——つて効いていない！なんて堅きだ」

抱きかかえられるように拘束された鍊の足は身長差もあつてか、地に足がしつかりと接していない。

見た目からして腕力で劣る鍊は全身を使わなければ、日光の絞め技を外すすべがないのだが、不安定な体勢のせいで踏ん張りがきかず、剛腕から逃れられない。

せいぜい出来たのは、指を数本、腕の隙間に差し込むくらい。

相棒を助けようと、打ち込まれるナトセの蹴りにもまるで堪えていない日光。

焦る鍊の脳に、血流が回らなくなってきた。

ナトセの蹴りが軽いわけではないのだが、身体を接触させている鍊にまで響かない。

その衝撃を吸収する日光の極上の肉体にこれ以上は無駄だと悟り、鍊はナトセに攻撃対象を変えるように指示を出す。

こうなれば、鍊が絞め落とされるより前に、ナトセにアシユラを倒してもらおうしかない。

堅牢な守りを誇る日光を崩すよりも、明らかに腕力で劣る敵の弱味を突くべきだ。

ナトセが自分の方に注目したのに気付いたのだろう、所在なきげに体育座りをして、こちらを觀察していたアシユラは、まつすぐに伸ばし揃えた指先で、かかつて来いとばかりに挑発的に手招きをする。

ここからは時間との勝負だ。

鍊の意識が落ちるのが先か、ナトセとアシユラの激戦に決着がつくのが先か、変則的ではあるもの、モニタから目を外した観客は固唾をのみ、それを目に焼き付ける。

予想通り短時間で決着はついた。

それでも鍊の状態から考えれば、十分長い時間といえるだろう。

——なんと驚くことに、根っからの負けず根性を振り絞り、鍊は絞め技に耐え、五分以上、意識を保ち続けたのだ。

そして、鍊と日光から数歩離れた場所に膝をつき、息を荒げる褐色の女性。彼女の額には、汗がぼつりぼつりと垂れていた。

蒸し暑い祖国を持つナトセがここまで疲労するほどに、日本の夏は厳しい物だったか、そうではない。

ナトセから距離を開けること、一メートル、やり遂げたとばかりに、観客に手を振るアシユラがいた。

——なんと驚くことに彼は、この五分間、決して広くないリング上で、一度もナトセに捕まることなく逃げ切ったのだ、恥ずかしげもなく、一切抗戦に応じることなしに。

観客のそれは違うだろうといった空気もなんのその、気にせずに愛想を振りまく彼に、手を振り返しているのは小さな子供のみ。

その光景に、ついには心が折れ、鍊の抵抗はなくなる。

そしてなにより、彼の闘争心をへし折ったのは、

『テメエ、何、美鳩と違つて、あたしの時はあつさり見捨ててんだよ！　もう負けちまえ、この下男！』

頭にこぶを作り倒れている美鳩と、彼女との激戦を珍しく白星で飾った恋人のとても暖かいエール、

『こちらーっ、朱子！　なんで敵の応援をしているんだ！　それとようやく思い出したぞ、お前ら、昔、うちの家を襲った悪ガキ共だろ。あの時、強奪していった、私のテディパンダちゃんを返せ！　ほら、鍊、寝転んでないで、早くそいつを締め上げるんだ』

加えて、部下の危機的な状況に対しても、声をかけることもなしに、自分の都合を優先してくれた敬愛する主、久遠寺森羅だった。

試合中、戦いに白熱する観客席とは裏腹に、ドームの通路脇は閑散としたものだった。一緒に来た友人に断りを入れ飲み物を買いに来た少女——川神学園指定の制服を着た大和田伊予は自販機の横の壁に、押し付けられるようにして背を預けている。

伊予は立ちほだかる人影から逃げようと身体をずらすのだが、壁に突き立てられた腕が遮り、前に進めない。

自分を壁に閉じ込めている相手が男であり、なおかつ王子様と評してもよい容姿の二枚目であつたならば、話はロマンチックなものになるのだろうが、そうはいかない。

「んで、そろそろ観念して、あたしの喉を潤すための飲み物代を貸して欲しいんだがな、姉ちゃん」

女は赤茶でパーマのかかった短い髪の毛先を弄んでいた。

伊予の頭よりも高い位置から見下ろす鋭いと言うよりも悪い目付きに、彼女は竦み上がった。がっ。

女性にしては高く、男性の平均と比べてたとしても少々高くなる相手の長身に加え、彼女の野生を思わせる八重歯が威嚇の言葉たたきつける口から見え隠れする。

それがまた、暴力に縁遠い伊予を刺激して、彼女の精神を削ってきた。

生まれてから初めて、不良に絡まれるという経験をしているわけだが、伊予の愛読している少女漫画のように誰かが助けに来てくれるという都合の良いことは、ノンフィク

シヨンでは起こらないようだ。

せめて、会場のスタッフが気付いてくれることを願い、はぐらかしていたのだが、それも限界。

間が悪いのか、運が悪いのか、はたまたその両方、スタッフは愚か、客の一人も通るかからない。

会場で行われている試合が盛況である弊害か、そのような見事の戦いぶりを見せているであろう選手を恨めしく思う。

諦め、ジューズ代を渡すために、ポケットから出した財布の小銭入れを探る伊予に女の要請がある。

「ああ、アンタが金出すのが遅いから、余計に喉が渴いたよ。そうだね、取り敢えず札を用意してくれるかい！」

不幸なことに、夏休みの遊行費にと親からせしめた小遣いのせいで、普段より伊予の財布は厚くなっており、少女の心は深く沈み込んだ。

——良い事は続いて起こらないくせに、悪いことはいつぺんに起こる。

鼻根の球団のグッズやチケットに使い込もうとしていたお金を奪うだけでは飽きたらないのか、観覧席の方の入り口側から歩いてくる友人を発見し、伊予の顔が青くなつた。

飲み物を買ひに出た伊予が遅くなったので心配して探しに来てくれたのだろう。

このままでは友人が巻き込まれてしまう。

幸いにも、女は壁にもたれ掛かる伊予に視線を向けており、友人には気づいていない。女に気付かれないよう、手を小さく振り、近寄るなど合図をする。

友人は伊予に気付き、右手の親指と人差指で輪を作り、了承の合図を返した。

● 思えば、彼女は学園に入学して初めての伊予の友人だった。

川神学園には、伊予の中学から、進学したものは彼女以外にいない。

大人しく、どちらかと言えば消極的な彼女が、友人を作るにはひどく勇気を要する環境だった。

入学式から数日たった教室はすでにグループ分けがされており、同じ中学出身者で固まる者もいれば、持ち前の明るさ、積極性を活かし、輪の中心に自分を置く者もいた。

ただ、悲しいことに、伊予はそれらの喧騒とは一線を画するイジメっ子の隣の席に陣取っており、休み時間などの交流がひどく細いものになっていた。

これは、友人を得るには苦勞すると覚悟していた伊予に、話しかけてきてくれたのが彼女だった。

『あの、ここれ落としましたよ。——とところで、職員室ってどこにあるか知ってますか?』

そう言つて彼女が差し出していたのは、最初のホームルームで配られて、ポケットに入れたままの生徒手帳であつた。

斜めに切りそろえられた前髪に眼鏡、片側で長い髪を一本結びに肩に垂らしている。誰も、立候補しなかつたために、くじ引きで決まつたクラス委員の彼女は、突然のことに固まつてしまつた伊予が質問に応えることはないと言つたのか、生徒手帳を押し付けると、誰かを追いかけ、教室の入口に歩いてく。

その手には伊予の物と同じ生徒手帳が、どうやら粗忽者は自分だけでなかつたようだと、伊予が彼女の行く先に目をやり驚く。

『あ、あ、ありがとうございます！——よ、よ、よろしかつたら、この後』

『そこだ、まゆうち、満面の笑顔を見せろ！ 勇気を出して下校に誘うんだ！』

自分の不注意を指摘されたイジメっ子は顔を赤くし、明らかに憤慨しているように伊予には見えた。

恐らく非合法に所持している真剣の柄を、剣袋の上から強く握りこんでいる。

怒りのためか、目線は話し相手の委員長に定まらず、上下四方を行つたり来たり。

般若顔を維持したまま、手帳を差し出す委員長の腕を掴んだ。

純粹なのか、危機察知能力に鈍いのか、イジメっ子をじつと観察する委員長に、教室の誰もが固唾をのむ。

イジメっ子を恐れて誰も助けに入れなかった、だからこの彼女を呼ぶ勇氣ある声には、出した当の本人である伊予も驚いてしまった。

『あ、あの、委員長！ 良かったら一緒に帰ろう！ て言うか、帰るよ！』

伊予に親切にしてくれた彼女を見捨てるのが忍びなかったのかもしれない。

内気な伊予は周りに、特にイジメっ子に、他意がない事を知らせるために大きな声で、それでも、周りからすれば、ほんの少し雑音が入れば消えてしまいそうなそれで委員長を誘う。

状況のわかっていない彼女の腕をイジメっ子のそれから奪い取るように引っ張り、引きずりながら足早に教室を出る。

『——よろしかったら、一緒に下校などをば……あの松風、私に手帳を届けてくださった親切な方はどちらへ？』

イジメっ子に目をつけられかけていた彼女の腕を通して震えが伝わってきたのかと思つたが、そうではなく、震えていたのは伊予の腕だ。

自分が出せた精一杯の勇氣を誇りに思い、目の前にいる救えた彼女を見れば、きよとんとした顔でこちらを見つめ返していた。

恐らくこういつた修羅場とは無縁な学生生活を送ってきた彼女には状況が理解できていないのだろう。

『あの早く職員室に案内してくれませんか？ 私もそう暇というわけではないんですよ』

状況に置き去りにされても初志貫徹を貫く鈍感な彼女が可笑しく、伊予は吹き出してしまった。

● それ以後、伊予と彼女の交流は増えていく。

昼食や体育の時の二人組を作る苦労から逃れられて、伊予はほっとする

委員長も積極的に他者とのつながりを求める性格ではないし、伊予の趣味に対しても寛大であった。

というか、最初の印象の通り、寛大というよりは無関心という方がしつくり来るのだが、彼女のその性質が、二人の關係に良い結果をもたらしてくれた。

——友人である彼女は絶対に守る。

不良女に脅されているこの状況がああのかぶり、その時より深くなつた彼女との關係を考えると、伊予の決断は当然のものだった。

だが、欲を言えば、彼女が誰か助けを連れてきてくれることも期待していた。

だからこれは全くの予想外。

「ああ、大和田さん。何を楽しそうに『猿』とお喋りしているんですか？ 私も入れてく

ださい。——でも、この猿、あまり賢そうな顔付きではありませんね」

伊予の意図をまるで無視して、近寄ってきた彼女が、どぎつい冗句をかましてくれるなんて。

青筋を立て、顔面をひきつらせる不良女と、別の意味で引きつった伊予、そして楽しそうにこちらを伺ってくる鈍感な笑顔の友人。

伊予が指摘してもクラスでは愛嬌の一つすら見せない彼女が、不自然なほどに愛想を振りまいてくれていた。

この状況からどうやったら逃げられるのか、この混沌とした難題に伊予の明晰と云えない頭では両手を上げるしかなかった。

初顔合わせの因縁 1

「ああん、姉ちゃん。もう一度言ってくれるかい？ たぶん、あたしの聞き違いだと思うんだけどねえ！」

伊予も不良女と同じで、聞き違いであつて欲しいと願う。

威嚇の言葉と一緒に委員長長の肩に伸ばした手は、意外に素早い身のこなしで躲かれ、不良女の顔が増々強張っていく。

委員長長の持つ暴力的な空気への鈍感さ、一概に欠点とはいえないが、伊予の知る限りでは役に立っている場面を見たことがない。

伊予は、懐から財布を取り出し、紙幣を全て抜き取った。

金はたしかに大事だが、友人に代えられるものではない。

「ああ、アンタはもういい。あたしはこの姉ちゃんにジューズをご馳走してもらうことに決めたよ。ねえ、一杯、奢ってくれるかい？」

伊予の行動を察した不良はそれを制止し、睨めつけるように委員長に顔を近づける。

不良女の威嚇に怯えたのか、存外素直に委員長は財布を出した。

そこから数枚の硬貨を摘むと、不良の目の前に差し出す。

悪に屈することは正しくはないのだが、それでも委員長の行動に伊予は胸を撫で下ろした。

だが差し出された手を不良女は払いのけ、地面から硬貨が転がる軽い音が響いた。

「あれれ、アンタは賢そうな顔して計算も出来ないのかい。差し出すのは小銭じゃなくてお札に決まってるだろ」

缶ジュース一本の値段を正しく把握出来ていない不良には今更驚かない。

伊予が驚いたのは、不良女の指摘が的中していたこと。

たしかに床に落ちた三枚のアルミニウム硬貨では、ジュース一本の代金には足りない。

数学の成績が高いはずの委員長が間違えてしまったのだろうか。

睨まれてなお、委員長顔に焦りや怯えといった反応は出てこない。

涼しい顔で、払われた手を戻し硬貨を指さした。

伊予は不良女が硬貨の価値に気付いたらと背中が寒くなる。

「うん、人の厚意を無下にしてはいけないと教わらなかつたんですか？ 早く拾い集めてジュースを買いなさい」

——買えません。

伊予は喉元にまできた言葉を抑えこむ。

力関係でいえば、下位にいる委員長が命令する。

不良女が従うはずもなく、それを挑発と認識し委員長の胸ぐらを掴もうとするが、またも空を掴む。

伊予は委員長のスカートの裾を掴み強めに引つ張る。

諫める意味があつたのだが、鈍い友人には通じていないようで、彼女の行動に対して何の枷にもならなかつた。

額に青筋を浮かべる不良女は、胸ポケットから鈍く光る物を取り出した。

それが刃物でなかつたのは喜んでいい。

しかし拳を鉄で覆うメリケンサックだったことを伊予は悲しく思う。

殴られたことはないが、とても痛いのだろう。

こうなつたら最後の手段、二人一緒に土下座するしかない、委員長の背中を畳むため、抱きつく。

だが、不良だけでなく友人よりも伊予は非力なようで一向に姿勢は変わらない。

抱きついた必死な伊予に首を傾げるので、委員長に意図は全く伝わらなかつた。

伊予を無視し、委員長は携帯を取り出して、不良女の撮影を始めた。

「なんだ？ 自分がボコボコにされるところを撮影して、後で警察にでも届けるつもりか？ 言つとくがあたしは警察なんかには怯んだりしないから、そんなことしてもアンタ

の入院日数が長引くだけなんだよなあ」

不良女は拳に凶器を嵌め、感觸を確かめるように握りこむ。

その姿から話し合いでの解決が無理と判断した伊予は、不良女の足が遅いことに期待し、委員長長の耳にそつと逃げるよと囁いた。

だけど友人は頷くこともなく、レンズを不良女からはずさない。

「まったく、あなたはなんでそう悪意を持った解釈しかできないんですか？ 私はただ、この貴重な映像を逃したくないだけです。——だってそうでしょ。『猿』が自動販売機を使用するなんて前代未聞のことですから。ああ、そういった単純な道具を使うのは珍しくないのでもいいです」

凶器をポイして、早く一円玉を拾えと委員長は急かす。

薄々は気付いていたのだ。

この時になつてようやく、伊予は委員長が意思を持って挑発しているのだと確信する。

残念なことに、今になつて気付いても、真つ赤な顔で殴りかかってくる不良女には何の意味もないこと。

そして更に残念なことは、始めからそれに気付いていても、伊予の力では大して状況を好転させることは出来なかつただろうということ。

恨みがましく思ったりしたが、伊予は迫ってくる拳から救うため、委員長の胸に全力で体当たりした。

● 悲しいことに、伊予の体当たりでは委員長を仰け反らせることすら出来なかった。迫ってくる恐怖に、伊予は目をぎゅつと瞑る。

覚悟らしい覚悟をする時間はなかった。

伊予に、そして友人に来るであろう衝撃を予想したのだが、一向に痛みはない。

恐る恐る薄目を開き確認する。

拳を振り下ろす姿勢の不良女が目に入り、伊予の身体が強張る。

それでも、何も変化がないことを不思議に思いよく観察してみれば、不良女がその姿勢から動いていないとわかる。

そしていつの間にか不良女の視線が伊予達から逸れていることも。

「おい、今日は奴らの偵察だけで、問題は起こすなって言つたよな——たしかに俺は言つたはずだよなあ？　ならその振り上げた腕は何だ？」

不良女は焦つたように腕を下ろした。

視線の先、声の主は、川神学院の制服を着ている。

スラつとした鼻梁、軽い癖のある茶髪。顔立ちは整つており、女生徒には人気ありそ

うだ。

事実、人気はあるのだろう。

伊予に見覚えがある。

それは教室の移動で三年生の廊下を通った時、女生徒に囲われている姿。

もつとも、伊予の好みからは外れており、気にも留めていなかったので思い出すのに

時間を要した。

「いや、霧夜さん、これはちがうだよ。別にあたしが絡んでいたわけじゃなくて」

霧夜と呼ばれた男は、不良女の言い訳を無視し、伊予達の顔を見た。

その瞳には怯えている伊予達を気遣うものが感じられず、伊予に嫌悪感が湧く。

ブランドマークのはいった高そうな財布を取り出し、紙幣を一枚取り出し突き付ける。

「迷惑料だ、受け取れ。これで今日のことは忘れろ、いいな？」

それで十分だと、一万円札を押し付けてきた。

伊予は増々、目の前の男が嫌いになる。

伊予にもプライドがあるので受け取る気はない。

実質的な被害はまだ受けていないし、この男の差し出すそれは、詫びではなく、施しに思えたのだ。

『あたしをここまで馬鹿にしてくれた女はアンタで二人目だ。その汚え顔は覚えてたぞ。次、会う時を楽しみにしておけ』

霧夜に聞こえない声量で不良女が委員長に囁く。

聞こえていない筈がないので、委員長は無視しているのだろう。

委員長の反応に不良女はなにか言いたげであつたが、霧夜に急かされて言葉を飲み込む。

伊予達への謝罪はないようで、客席に向かい歩いていった。

この広い川崎市、再会するのは困難だろうと、伊予は樂觀することにした。

逃避する伊予に無視され、苛立った霧夜が差し出した紙幣を押し付ける。

そして不良女の歩いて行つた方向に続く。

つい受け取ってしまった紙幣を返そうと、伊予が追おうとするのだが、それより先に委員長が走って行く。

「あの、私の分の迷惑料はないんですか？」

——見事に一万円をせしめて帰ってきた委員長は、これで美味しいご飯でも食べに行きましようね、と満足気だった。

● 財布に紙幣を仕舞い、委員長は伊予に笑顔を向ける。

笑顔と言つても、満面のものではなく、多少目尻が下がっただけだ。危機が去つて、彼女も安心したのだろうか。

冷静になつて考えると、危機が起こる前も後も、委員長顔に变化はなかつたなど、深い溜息を付く。

「——なんであんなことしたの？」

そして反省を促すように低い声音で委員長に問いかける。

彼女の迂闊さを叱つたつもりでもあつたのだが、それは汲みとつてもらえない。

命知らずは得意気に鼻を鳴らし、期待するように伊予を見た。

「もう、助けてもらったからつていいんですよ、そんなお礼なんて。でも大和田さんは危機感がなさすぎです。これからは不良に絡まれないように注意して下さいね——なんですか、別に褒めたければ、好きなように褒めてくれていいんですよ？」

すまし顔とは裏腹に、露骨に賞賛を要求する子供っぽい友人に、伊予は力が抜けていく。

伊予の認識では、引つ掻き回し、火に油を注いだだけなのだが、彼女の中では違うらしい。

——悪い子ではないんだけどね。

伊予は行き場を失つた感情を手のひらに込める。

「本当に委員長は羨ましいほどこに、素晴らしく鈍感だね！ 助けてくれて、どうも、あり・が・と・う・ね！」

「あの、大和田さん。そのように頬を引つ張られたままだと、あまり褒められている気がしないんですが？」

彼女の頬は餅肌で触り心地がよく、伊予は気が済むまで挟み潰したり引つ張ったりした。

● 少年は、己の無力を噛み締めていた。

その事実を受け止めてなお、皆の視線が集まるリングの上で、直江大和は頼りない腕力を振り絞る。

そもそも、軍師を自称する大和にとって、向き不向きでいえば、明らかに不向き。

殴り合いの才能は持ち合わせていないし、それを補う努力もしたことはない。

そんな大和で構わないと、大会の相棒に選んでくれた松永燕は、予選、一回戦とめざましい活躍を見せる。

それを妬んでいるわけではないが、男として歯がゆく思うのは仕方がないことだ。

もちろん、燕が不甲斐ないと大和を責めることはない。

だからこそ、相棒である大和が体を張れる場面ではそれを惜しむつもりはなかった。

その時が今、訪れている。

大和は齒を食いしぱり、全身に力を込める。

両腕を相手に巻きつけて、脚を踏ん張っていた。

だが大和の力及ばず、足は滑り前進を止めることは出来ない。

己の非力は分かっていたことだが、とても情けない。

観客席では子供達が指差して大和を笑っている。

絵面の滑稽さは否めないし、大和が子供達の立場でも失笑していることだろう。

無責任に煽り立てている観客達は無視する。

大和の努力が伝わったわけではないが、歩みが止まった。

目的地にたどり着いてしまったのだ。

女性特有の甘い体臭が、抱きついた大和の鼻腔をくすぐる。

——大和に羽交い締めになれながらも、それを物ともせず、松永燕はリング中央、敵

と対峙していた。

「ねえ、その恥ずかしいお面、さっさと脱いだらどうかかな！ ああ、そうか、お面以上に

素顔が恥ずかしいから、隠しているんだっけ？」

「ああ、あまり顔を近づけて喋らないでくれないか。息が納豆臭いし、そのうえ発酵した

ツラを見せられて不愉快なんだよ！」

怒り心頭の燕は、敵であるアシユラと顔を突き合わせている。

間にお面を挟んでいるので、唇が近づくなどの色っぽい事にはなっていない。

ただ、互いに一步も引く気はないらしく、何度も額を打ち合わせる音が聞こえてくる。

まだ、試合開始の合図は出されていなかった。



そもそもなぜこのような事態になっているのか。

二回戦の対戦相手なので敵視するのは不思議ではないが、鼻息の荒い燕を見るとそれだけだとは到底思えない。

開会式で遠くから、アシユラを窺っている時はまともだった。

そして選手入場ゲートをくぐる時も、いつもの平常心の燕だったと思う。

正体不明のハグレ地獄コンビに対しては策らしい策はたてられず、柔軟に対応するしかない。

警戒はしていたが、それも参加者の一組として以上のものではなかった。

なのに、歓声に応え手を振る燕と一緒にリングに上がり、敵と対峙した時に変化が起こった。

燕は最初、相手を確認して、不思議そうに首を傾げている。

頬に指を当て、考え事をしているようにも、呆けているようにも見えた。

面で表情こそわからないものの、ハグレ地獄コンピのアシユラも燕を見て、思いついてるようだった。

『燕先輩——頑張ってくれ——！ 義経が応援しているぞ！』

観客席からは、九鬼の関係で燕と交流のある義経の応援が響いた。

燕が何の気もなしにそれを確認し、大和も視線を追った。

——近くからは歯ぎしりの音と、少し離れたところで何かが砕ける音が聞こえた。

音が気になり、手を振る義経から視線を戻すと、燕の瞳がなぜかつり上がっていた。

何の脈絡もない変化に大和が首を傾げ、苛立つ燕の拳が硬く握りこまれていく。

アシユラはその場で、リングの敷石を踏み抜いて破壊していた。

義経の声援が届く間に、両者の心を乱すようなことはなにもなかった。

知らぬ間にヒートアップしている状況に、危機感よりも困惑の方が大きい。

いつも平常心といった燕も感情を露わにすることがあるんだなと呑気な感想を浮かべられていたのは、彼女が足を一步踏み出すまで。

燕が拳を固めたまま向かう先を考え、彼女の背に抱きつく。

「燕先輩！ 一体何をするつもりですか！」

「うーん、挨拶？」

ちなみに、答えている時も、燕は大和の方を一切振り返りはしない。

自分の行動を疑問で確認する辺り、燕はまともな状態ではないように思う。

「と、とにかく一度落ち着いて！ まだ開始の合図は——」

「ああ！ わかったよ。『拳』で挨拶！」

先ほどの質問の正しい答えが見つかったと燕は笑みを浮かべる。

別に答えてくれなくても良かったし、そしてそれは大和の望むものではない。

女性特有の柔らかさをもった肢体からは想像できない力強さで大和は引きずられていく。

「だいたい先輩は何をそんなに怒っているんですか？」

「私が？ 何を言っているのかな。——だって私が怒る理由なんてなにもないじゃない、そうでしょ？」

そう確認されても、大和に返せる答えはない。

怒っていないとのことだが、それとは裏腹に、燕の歩みは止まることがない。

足を開いてみたり、揃えてみたりと、足を地面に引つ掛けようと姿勢を変え抵抗するが、大和の情けなさが大きくなるだけだった。

『おい、女！ ここであつたが百年目！ きつちり落とし前をつけてやる！』

「そつちこそ、あの時の借りは、利子をたつぷり付けて返させてもらうからね！」

ジリジリと近寄っているが、拳が届く距離ではないので、言葉で罵り合う。

大和に拘束される燕と同じように、アシユラは相棒である日光に後ろ襟を掴まれ、抑えられている。

「——燕先輩。あの時ってなんですか？」

『おい、アシユラ。あの女と知り合いなんか？』

両者の看過できない言葉に、それぞれの相棒が尋ねる。

「大和くん。あんな正体不明の相手と私に、繋がりなんてあるわけないでしょう。意味不明なこと言つて、私を苛つかせないでくれる？」

『——初対面だ。なんか文句あるのか？』

意味不明な事を言っている女に、大和は冷めた口調で怒られた。

明確な恨みでもあるかのように、燕とアシユラは罵詈雑言を浴びせ合う。

試合開始の前に攻撃をし、反則にならないかと大和は全力で見守っていた。

その間、拘束され手が届かないアシユラの苦心の結果は、脱いだ靴を投げつけること。襟を拘束されたまま不安定な状態で投げられた靴を、燕は難なく避ける。

それは後ろにいた大和の顔に命中し、お返しに燕が投げた靴は日光の胸に当たった。

——大和としてはこれを審判が攻撃と判断し、反則負けにしてくれないと本気で思い始めていた。

大和を引きずったまま密接距離での数分の悪口合戦の後、語彙が尽きたのか二人の勢いが弱まっていく。

それを大和は見計らう。

「燕先輩！ 一旦整理させて下さい！ 先輩と、こいつは知り合い何ですか？」

「——ううん、こんな三つも顔がある知り合いはいないかな？」

いくらか落ち着いた燕を敵から引き離し、特に効果はなかった羽交い締めを解いて、大和は質問を続けた。

「じゃあ『あの時』って一体何なんですか？」

「——な、何なんだろうね、一体？」

自分でもおかしい事を言っていると気付いたのか、燕の声が小さくなつていく。

「じゃあ、あいつを恨むようなことも、争う理由もありませんよね？」

「——そ、そうだね、私は人を恨むような暗い性格じゃないし、まして人から恨みを買うことなんてありえないでしょう？ で、でもね」

社会に生きていれば、人から恨みを買わない人間なんていないと思うのだが、確かに燕は良い性格をしている。

両人差し指を、くると胸の前で回し、燕は悩む。

何か理由があつて隠しているのかとも思ったが、渋面を作り悩む燕の姿は演技には見

えない。

——答えが見つかったのか、燕の顔が明るくなり、人差し指を立てる。

自信満々の燕に、大和は背筋が伸びる。

「——きつと、前世の因縁とかだよ。絶対。間違いない！」

苦し紛れにでた突飛な答えなのか、もしくは本気でそう思っているのか。

肩から力が抜け、深い溜息が出た。

だが意外なことに、燕に賛同する者がいた。

彼は燕の立てた指にそれだとばかりに、己の指を突き付け支持する。

大和のものではない溜息が聞こえる。

それは、大和と同じように相棒を問い詰め疲れた日光のものだ。

——苦心した答えに同意してくれたことが余程嬉しいのか、アシユラと燕は手を高く

打ち合わせていた。

だが意気投合した相手を確認すると、すぐに距離をとった。

余計な気遣いで、開始時間を遅らせていた審判が、腕時計を確認した後、試合開始を

宣言した。

大和は疲れ果てていた。

——開始直後に飛び出そうとしたのは、松永燕。

先制攻撃を試みたのではなく、一本足で飛び跳ねながら、己の靴を取りに行っただけ。そしてそれに気付いたアシユラは近くに落ちている燕の靴を振りかぶって場外に投げ捨てた。

どこか満足気なアシユラに大和はため息を吐く。

当然、青筋を立てた燕は踵を返し、大和の傍に戻ってくる。

——そして近くに落ちていたアシユラの靴をこれまた場外に投げ飛ばした。

片足飛びの少女と、片足飛びの面が互いにリング中央に。

——そしてすれ違う。

大和は間拔けな光景に先程より深い溜息をついた。

「ああ、とりあえず攻撃しても良いのかのう？」

日光の巨体を前に、大和は出来れば遠慮してもらいたかった。

審判が数えるカウントがあと十を過ぎれば、場外負けになる。

相棒が帰って来るまで二人はその場から動かなかった。

初顔合わせの因縁 2

両者への応援の声が響く会場。

リングの隅を走って移動する大きな影と小さな影。

屈強な巨体をもつ日光を倒す術のない大和はひたすらに逃げまわる。

その一方、脚の甲と甲、脛と脛、蹴撃の乾いた音が連続して鳴る。

追い回す日光、追い回される大和、彼らが意図的に避けているリング中央で対峙する二人。

少し伸ばせば、ちょうど互いの脚が届く位置。

双方、片足立ちで、胸の高さまで上げた脚を上下左右、変幻自在に繰り出している。

防御はなく、あつたとしてもそれは迎撃。

飛んでくる脚を躲わすのではなく、蹴り落とす。

相手より速く多く、そして強く。

横に一步移動すれば、労なく被弾を免れるがそれはしない。

ただ、相手が己について来れなくなるまで回転を上げ続ける意地の張り合い。

観客は大和達の追いかけてつこを無視し、その戦いに息を呑む。最初に躓いたのは松永燕。

慢心していたのだろう。

勝敗を決めるのは自力だけではない。

事前の情報収集、対策、そして相手によつては虚実を使い分けることによつて、勝利を得ることもある。

それを理解している燕だからこそ、本来ならばこんな茶番に付き合うことはなかった。

だが、アシユラの露骨な挑発にのせられてしまったのだろうか。

冷静さを欠いていたことは否めない。

まだ本気ではない、がそれは相手も同じこと。

そして今の時点で相手の底は見えていない。

焦りもあつたのか、ぶつかり合った蹴撃の反動を殺しきれず、体を崩してしまふ。無防備な自分。背筋に氷柱が突き刺さる。

続く衝撃に、防御と覚悟を備えた。

——アシユラの一撃が燕の腰に。

それはとても優しく、蹴りではなく足裏でそつと押さえるもの。

想像外の一撃のせいで、身構えていた燕は尻餅をついてしまう。

手を、いや脚を抜かれたのはいつでも倒せるぞと格の違いを見せつけるため。戦いの最中、無様にも尻を地面につけた燕をアシユラは嘲笑っていた。

——もつとも素顔は分らず、仮面についたギミックなのか口元が不自然な鋭角に尖った笑みを三面に浮かべているだけなのだが。

胸をそらし、こちらを指さしているのである。

そう的是はずれな予想ではないだろう。

——カチンときた。

何でもない風を装い、燕はスカートに付いた汚れを払い落とす。

そして先ほどの戦いの開始位置に再び立つ。

実力がわからないのかと呆れたようにアシユラが鼻で笑った——気がする。

燕の脚が飛んだ。

一撃が落とされ、二撃が弾かれる。

余裕からかアシユラは常に先手を譲り、燕の蹴撃を狙い撃つ。

——燕は三撃目に踏ん張りをきかし、それまでの速度から回転を一段二段飛ばしで最高に振り切った。

突然の変調。

加速、最高速とこれまで燕を上回っていたアシユラの慢心。

そこに付け込み、相手の虚を奪った。

アシユラの迎撃に更にかぶせ、撃ちぬく。

そして弾かれた脚が戻るまでの無防備な体。

致命的な隙、絶好の機会だった。

だから燕は当然——とても労るように優しく爪先で敵のバランスを崩してあげる。

アシユラはリングに尻餅をつく。

今まで固唾をのみ成り行きを見守っていた観客達が、その意味を理解し沸きあがる。

アシユラはズボンを手で払い、走るのに支障はないかと地面を確かめるように幾度も

踏みつける。

格下と侮った燕に戴いた屈辱、アシユラは激怒しているように思えた。

——仮面の表情は当然笑ったままなのだ。

恐らくギミックを動かす余裕もないのだろう。

単純な速さ比べはここまで。

相手の挑発には、十分な礼を返せた。

ここからは力だけではなく、知恵、技を駆使した本当の戦いが始まる。

悔しいが、速度で劣ることは認めざるをえない。

戦いに必要な情報を燕は分析し、戦法を選択する。

速さは重要だが、それだけに勝敗が左右されることはない。

相手の力を素直に受け入れ、それでも燕は負けるつもりはなかった。



リングの上を飛ぶように移動するアシユラと燕。

片方は直線的に全てを無視し、そしてもう一方は流麗に流れていく。

速度でいえば劣る燕。

しかし最短距離を走るはずのアシユラは間合いを詰め切れない。

それは地の利、リング上の障害物を燕が盾にしているからだ。

もつとも、速度差は歴然。障害を避けるように動けば、燕は追いつかれていたことだろう。

だがこの場において、燕の真似をしなければ追いつけないということを確認したくないのか、安っぽい矜持を守り、アシユラは頑なにそれをやめない。

だから追いつく直前、またも障害物が燕とアシユラの間に入り込む。

手を振って離れていく燕に、八つ当たりとばかりに、アシユラが障害物を何度も蹴る。

その重厚な響きが大気を伝い、燕に届いた。

——これは厄介だねー、ほんと。

余裕の笑みを貼り付けて表情を隠すが、頬を冷や汗が伝う。

——こういった顔芸をこなさなくていいのは便利だよ、私も今度からお面をかぶろうかな、つていやそれはないか。

心中どうでもいい自問自答。

いまさらながらに、パートナーに非戦闘員である直江大和を選んだことを反省する。

もちろん、精一杯邪魔にならないよう努力してくれている大和を非難しているわけではなく、自分と敵の実力を見誤ってしまった燕自身についての反省だ。

力に勝る者、技に長けた者、対してきた強者はことごとく討ち取ってきた。

力には技を、技には力を、隙がなければ機転を活かし、つくる。

だがここまで加速、最高速ともに差がある敵は初めてだった。

燕から踏み込んで、速さが足りず、相手に隙を見せてしまう。

だから相手の踏み込みに合わせて、返し技を狙うのがいいのだが、それすらも成功するか怪しいほどの速度差。

上手く行って相打ち、最悪なのはカウンターの失敗。

合わせたはずの燕の踏み込み。それがそのまま燕自身に跳ね返ってくるのだ。

当然、相手を翻弄するために先手を取ることにもリスクが高い。

だから、今のところ敵の様子見の蹴撃から防御と逃げに徹し、燕はアシユラを観察していた。

そしてわかったのは、おそらくアシユラが武道家ではないということ。

それらしい構えはなく無形——と言えなくもないが、武道家の目からすれば、隙だらけ。

達人の対極、姿勢がとにかく悪い。

ただ歩くことだけで、武術の練度を測かることは可能だ。

強さが、その無駄のない立ち居振る舞いに表れることは珍しくない。

観客席で戦いを見ていた時にはさほど、読み取れなかった。

だが目の前で対峙すれば、敵は、思いの外に無駄だらけ。

それなのに、無駄に速いし、無駄に強い。

今までに戦ったことのない相手。

だからこそ燕は慎重になる。

——あれだね。短距離の世界王者ボルトの隣を、スカートを摘んだガラスの靴の女の子がスキップでぶっ千切っていく光景を見たら今の私とおんなじ気分になるかも。

それでも真夏の陽光が燕の脳を湯立たせたのか、不利な状況もあいまって阿呆な思考

が浮かんでいた。

もつともその最たるは、目の前、交戦しているアシユラではなく、

「つて、邪魔するんじゃないわい！ また、逃げられてしまうじやろうに」

先程からアシユラの攻撃を物ともせず、マイペースに大和を追い掛け回している、リング上唯一の障害物だった。

蹴撃をもらつた尻を掻きながら、その大柄な体格で大和の後をついていく。

——場合によつては日光のほうが厄介な相手かもしれない。

必死に逃げ回り息の荒い大切な相棒に感謝し、手を振り応援する。

「大和くん、そのまま、もう五分ほど時間稼ぎよろしくね——」

その間になんとか勝つための算段をつける必要がある。

燕の笑顔に、任せろと大和も顔を向け、手を振り返してくれた。

やはり武神川神百代が目をかけているだけあつて、頼りになる。

燕は投げキッスも奮発した。

照れたのか少し大和の顔が赤くなっている。

それが年上の乙女心をくすぐり、こういったところが百代に入られているのかも、実感する。

——そしてそれが隙になり、背後から伸びた手が大和の足を掴んでしまった。

「——ごめんねー、大和くん。私がセクシー過ぎたせいで——ううん、思春期の男の子の性欲をなめてたかもしれないよ」

燕は己の魅力を最大限に発揮したウィンクで謝罪する。

「いや、ちよつと気を取られたくらいのことと、そこまで自分に自信を持たなくてもいいと思うんだけど」

宙吊りになった大和は顔から赤みが抜けて、白けた表情になっていた。

——そう冷静に返されると、今度はツバメの顔が熱くなる。

「ふむ、なんじやろう。こつも簡単に捕まってくれろと、かえつて申し訳ない気分になるのう。」

やりなおすか？ お色気ムンムン娘よ」

「おい、日光。僕と美の化身の戦いの邪魔をするな！ お前らはリングの端に並んで体育座りでもしておけ！」

追い討ちをかけるように絶対心の底からは思つていないだろう敵からの賛辞。

『姉さんが未だ気絶したまま動かないので、解説は久遠寺未有、一人で行わせてもらうわね。直江大和が捕まったことにより、ヴィーナスとアシユラの均衡が破れることになり、この状況でヴィーナスの取れる行動は少ないわ。一転して追いつめられた

わね』

『セクシー先輩！ 頑張ってくれ。先輩の実力なら、そこからの逆転も可能だと義経は信じているぞ。——ああ！ なんてそこで諦めたように頭を抱えてうずくまってしまっただ！』

声援が届かなかつたのかと勘違いした後輩が、さらに大きな声で応援してくれた——べつに呼んでくれと頼んだわけでもないのに、律儀に連呼する——たぶんそれがツバメの助けになると致命的に勘違いしたままで。

それに続いたのは、観客席にいる川神学園の生徒達。

歴史上の偉人のクローンである義経の求心力は凄まじかった。

わかりやすい悪役が敵であったことも手伝って、一般客にも伝播していく。

真夏の空の下、セクシーだの女神だのと大合唱。

別に容姿をほめられることに慣れていないわけではない。

だが用法用量を守らぬ薬の過剰投与は思春期の少女の心には結構な毒になったり。

会場の皆の心が一つになった瞬間、それ以外であるたつた一人の少女の心がへし折れる音は燕にしか聴こえない。

普段の飄々とした冷静さは見る影もなく、大観衆の視線から逃れようと、両掌で隠したその指の隙間から一粒雫が溢れる。

これに動揺したのはリング内の男性三人。

アシユラが日光を指差せば、己は違うと首を振り。

日光がアシユラを指せばまた、手の平を振って否定する。

そして二人の顔が宙吊りにされた大和に向く。

「——えっと、絶対に俺だけのせいじゃないと思うんだけど」

尋ねるが、敵である二人が頷くはずがない。

早くなんとかしろと、顎で燕を指している。

味方だろうが、敵だろうが、大和はこういう役回りを押し付けられることが多いなど、ため息を吐いた。

いつの間にか、地面にうつ伏せ、顔を押し付けて、耳を塞ぐという、完全外界遮断姿勢になっている。パートナーにトボトボと近づいていく。

そして背中をトントンと叩き、安心させるようわざとらしく明るい調子で言った。

「ああ、うん、ええっと——先輩は、とびきりセクシーですよ。自信を持ってください」
——試合の決まり手は、ローリングゾバット。もちろん場外に吹っ飛んだ。

『アンタ達なんて、優勝して、エキシビジョンでモモちゃんにボコボコにされちゃえばいいんだ!』

審判が試合終了を宣言した後に、泣きながら燕は走っていく。

——一撃をもらい場外に倒れる直江大和を残したまま。
リングに残された消化不良の勝者は何やら深刻に話し込んでいた。

● 決勝戦を前にして、選手控室は静寂を保っていた。

それもそのはず、今この場にいるのは勝ち残った最後の一組のみ。

予選、一回戦、二回戦は昨日に。

準決勝は今日の午前中前半に、そして休憩を挟んでの決勝戦。

過酷なツーデイズトーナメント。

勝ち残った者も当然、無傷とはいかない。

だが、それは敵も同じことか。

——そこまで考えて、それは楽観にすぎないと、椅子に腰掛けた黄金の髪の少女、クリスティアーネ・フリードリヒは首を振る。

敵の試合は全て、備え付けられているモニタから観戦していたが、彼らに傷らしい傷はなく、それどころか、未だその恐るべき実力の全てを出し切ってはいない。

己の不安が、無様に負ける姿を心に映し出す。

それを振り切るため、腰に挿した愛用のレプリカレイピアを強く握った。

本来のクリスならば、相手が強大だろうと、ここまで動揺することはなかっただろう。誇り高く、ゆえに、たとえ完膚なきまでに叩き潰されようとも、相手の強さに敬意を払うことができた。

だが、今回ばかりはそうはいかない。

己の正義を胸に掲げるクリスにとって、自らを悪と称するハグレ地獄コンビは絶対に相容れない敵である。

だから実力を出しきった結果が、無様な負けでは、己が許せないのだ。

それがのしかかる重圧となり、鍛えられていても、見た目通りの小さな肩に負担をかけている。

「——お嬢様、そろそろ時間です」

傍らに立っている軍服に眼帯、赤髪の女性は普段は厳しい顔を緩め、心配そうにクリスを伺っていた。

ドイツ軍中將である父の部下であり、そして姉代わりでもある女性。

実力においては、クリスの一步前に行く彼女も敵の強さを知り不安なのだろうか。

——いや、彼女は生粋の軍人。

どんな困難な任務に赴こうとも、顔色を変えることはない。

ならば、彼女の顔を曇らせているのは、きつと弱気な自分だった。

彼女はいつもクリスの心を、そして体をクリス以上に大切にしてくれる。

だからきつとこれからの戦いでクリスが必要以上に傷つくのを恐れているのだろう。

——家族を不安がらせることは、負けることと同様に許してはいけない。

こちらの瞳を覗き込んでくる、マルギッテに強がりの笑みを返す。

——さあ、自分の誇りのために、そしてクリスの突然の笑顔に困惑する大切な姉のため、立ち直ろうではないか。

クリスは不安を飲み込む。

自分のわがままに付き合い、共に戦ってくれる彼女にこれ以上格好悪いところを見せる訳にはいかない。

「なあ、マルさん。奴らは、強い。もしかしたら拮抗することさえ、都合のいいことなのかもしれない。弱気な自分はさつきまで無様に負けることを不安に思っていた。でもそれはとても格好悪いことではないか——自分は妥協することにした。妥協することも時には必要だと、川神学園に転校してきて、直江大和から学んだんだ——マルさん、自分のわがままに付きあわせてしまつて申し訳ないんだが」

「お嬢様！ 例え負けたとしても、全力を出し切つてこそ得るものがあるのです！ 一体何を妥協するとおっしゃるんですか？ まさか適当に力を抜いて戦えば、それが格好いいとでも。」

ああ、やはりあの者たちを暮らすうちに悪影響を受けてしまったのですね。もう日本にほんものの侍などいない——」

クリスの言葉に、マルギツテは珍しく横槍を入れた。

なにやら日本批判まで始めたマルギツテをクリスは苦笑いを浮かべ、手で制する。

そして告げた。

「——格好良く勝つことは敵の強さのまえには望めない。かといつて無様に負けるなど自分は絶対に嫌だ。だったら残った選択肢は妥協して、一つ。——無様に勝つことにしよう！　そう、全力を振り絞って、そして残った搾り滓をもう一度、精根尽き果てるまで握りつぶして。何度倒れても立ち上がり、格好悪く勝つことにした。うん！　マルさん、自分たちの無様な姿は、観客に嘲笑われ、憐れまれてしまうかもしれない」

「——お嬢様、それでも私は貴方についていきます。それにお嬢様が無様であるはずがありません。なに、憐れむ者がいけば、その口にこのトンファーを突っ込んで黙らせませす。唾うものがいれば、中将殿をお願いして、ライフルの的にしましょう！」

その言葉、眼差しに、クリスの肩が軽くなった気がする。

「——マルさんでも冗談をいうんだな。これも大和達の影響かな？　よし、出陣だ、マルさん！」

迷いはなくなった。長い金糸を靡かせて、クリスは颯爽と会場に向かって歩く。

その背中を、『何が冗談なのですか?』と首を傾げながら、携帯の通話を切った従者が追っていく。

決勝の時間を知らせるアナウンスが、控室内に、同時にドーム内に響いた。



試合開始の合図を待つ観客席に川神学園の制服を着た集団が固まっている。

別に席を指定されたわけでもないのだが、大半の学園生は律儀にそこに並んでいた。

その一角、赤毛のポニーテールの少女が先ほど職員から配布されたチラシを熱心に読み込んでいた。

「ねえ、大和。九鬼の傘下の飲食店って川神だけでもこんなにあるのね。どこにしようか迷ってしまうわ——ってそうよね、訊いても答えられないわよね」

本戦参加者に配られる、九鬼傘下の飲食店で使えるお食事券を手に、真剣に検討する川神一子。

その隣に、包帯を顎に巻いた直江大和が座っていた。

別にここまで大げさにする必要などなかったのだが、パートナーに見事に蹴り飛ばされた大和を面白がって友人の岳人や翔平が巻きつけたのだ。

むしろ、怪我ではなくこの包帯こそ、喋ることを難儀にしていた。

ちなみに試合の後、失神していた大和が目を覚ますと、すぐに燕から謝罪を受ける。大和の方も、あの対応は拙かった、そして試合に負けてしまった原因は自分が足を引つ張ったからだと言頭を下げる。

もし自分が日光に捕まっていなければ、燕を変に挑発なんてしてしまわなければ、それに対して、燕は。

『ああ、あれは仕方ないよ。まあ、あそこから逆転するための奥の手もあるにはあったけど、それは対武神用だからね。あんなコスプレ変態どもには、おいそれとは使えないんだよん！ だから、まあ、負けも覚悟はしていたんだよ。なあに、私の目的は次の機会にさせてもらうよ』

その目的については何も教えてくれなかったが、本当に気にはしていないようで大和は胸をなでおろした。

その後は本戦に出場している仲間の応援に精を出し、決勝戦、最後まで残ったクリスとマルギツテの戦いを観戦することになった。

「ねえ、アタシはこの焼肉屋さんに行ってみたいんだけど、どう思う？」
決勝戦はまだ始まらない。

返事が出来ない右隣の大和を諦め、一子は左隣に尋ねた。

ちなみに通路を挟んで大和の右には、己の職に対して先程から愚痴をこぼしては同意

を求めてくる見知らぬ中年男性がいて居心地が悪い。

——南入出口からクリスとマルギツテが入場する。

決勝の相手は、大和達が負けたハグレ地獄コンビ。

二回戦、準決勝と、ふぎけた試合内容で実力の全てをさらけ出すことなく、駒を進めてきていた。

その実力、肉男シリーズの仮装と面。

鬼面との余りにもな符号に、逆に関連を疑ってもいいものかと大和は思案する。

過去の活動やその隠匿性から、こういつた表舞台を好む悪党ではないと思っていたのだが、認識を改める必要があるのかもしれない。

だがこれだけでは奴らを鬼面だと断定するには足りず、もう一手欲しいのだが。

——審判は時計を確認し、右手を高らかと上げる。

まあ、あのところどころ横暴な姉にかかれば、証拠などなくても刑の執行は可能であると溜息を吐いた。

——クリスの咆哮が響き、彼女はレイピアを振り回した。

思考に没頭していた大和の肩を一子が揺すった。

「ねえ、大和。試合が——」

「——ああ、始まったか。さて、ワン子から見てクリス達の勝算はどれくら——」
「終わったみたいなんだけど？」

言葉の意味がわからず、大和はもう一度問いかけた。

『なんだ、これは！　こんなの納得いくか！　自分がどれだけの覚悟をしてこの場にいると思っっている！　ええい、早く奴らを連れて来い！　不戦勝なんて無様な勝ち方なんて死んでもゴメンだ！　それならばいつそ負けで構わん！　なあ、マルさんも言っつやってくれ！』

『——お嬢様、先ほどと言っつていることが違いすぎるのですが——いえ、なんでもありません。その職員！　お嬢様が呼んで来いと言っつているのです。早く控室まで行っつて奴らを連れて来なさい。さっさとしないとその言い訳しか出てこない口にトンファーをねじり込みますよ！』

憤慨し、無理難題をふっかけるクリスに、とりなそうとする職員を脅しつけるマルギツテ。

「なんか、試合放棄で不戦勝らしいわよ。——大和、あの二人を止めなくていいの？」

——いつも以上に頭に血が上っつているのか、一向に収まらないクリス。

『無礼者！ お嬢様に手を出す者は、誰であろうと、この私が許さないと知りなさい！』
そして、説得のため彼女の肩に手を伸ばした人の良さそうな職員がマルギツテのトン
フアーに叩き伏せられる。

それを目撃した場内の職員が次々とリングに集まってくる。

そこは二人の独壇場だった。

『ぬう、たつた二人にこの人数とは、それでもお前たちは侍の子孫なのか！ こうなつた
なら、自分が根性を入れなおしてやる！』

もう何に怒っていたのかも忘れているかもしれないクリスが暴れまわり、彼女を守る
という大義名分があれば、一般人にも容赦のないマルギツテ。そしてこの暑い中、会場
運営、交通整理、飲み物等の販売など頑張っていた職員さん連合との決勝戦が始まって
しまった。

『ええつと、盛り上がってきた決勝戦。解説は引き続き、久遠寺未有と、私に負けて悔し
さのあまり家で不貞寝中の久遠寺森羅に代わつて』

『——川神学園三年生、川神百代でお送りします。おお、ビールの売り子さんが自らを犠
牲にクリのレイピアを奪取したぞ。根性あるな！』

ヒーローショーのごとく立ちまわるクリス達。

盛り上がる観客。解説席ではしゃぐ姉貴分。自分も参加したそうに、こちらに許可を訴える一子。

そして、川神という土地と、そこに住む人達とのずれに、ほんの少し絶望しかけた大和。

もうどうにでもなれと自暴自棄になりかけた大和に、紙コップの飲み物が渡される。うつむいた大和を心配してのことだろう。

一子と親しい後輩に礼を言い、冷えた麦茶を受け取った。

今の状況で熱に浮かされてはいないまでもな人がそばに居てくれたことに大和は感謝する。

「あの金髪の人って一子先輩の友達なんですよね？ あんなに嬉しそうにはしゃいじゃって。あそこまで喜んでくれたら僕も譲った甲斐があつたつてもですよ」

腕を組み、感慨深げに何度も頷く後輩。

怒り暴れまわるクリスを見ての感想。

感受性が違いすぎる後輩に大和は驚愕し、あまり交流のない彼を警戒するべきかと迷う。

——だが、その後に、お預けを食らって、お祭り騒ぎの戦いに加わりたいと我慢の限界を泣くように訴える一子と、よく目を凝らしてみれば暴れることでスッキリしたの

か、澆刺とした笑顔になつてゐるクリスと見比べ、別に警戒の必要はないと判断する。

——まともな人がそばに居て欲しいというのはそこまで叶わない望みだったのだからか。

再度、長いため息を吐いた大和の肩が叩かれる。

それは、隣の中年男性の手だった。

彼は言う。

「なあ、少年。気持ちはわかるが、元氣を出しなつて。社会に出ればわかるが世の中は理不尽だらけだ。おじさんもな、国を守るためにつて今の職場に入ったんだが、現実はどうはいかない。本来の仕事とは関係ないものまで回されて正直、泣きそうな毎日だよ。でも、それでも、いつかは自分のやりたいことが出来る筈だと諦めずに頑張つてゐる。辛いのは皆一緒だ。だから、少年もこの程度の理不尽で挫折ちやダメだぜ」

そう流暢な日本語で慰めてくれた男性の言葉を大和は無視する。

大和の頑なな態度にお手上げだと、外国人らしい大げさな仕草で、両手の平を横に差し出した。

——そうして軍服の男性は、日本では実銃の所持は認められていないので、恐らくモデルガンである狙撃銃をケースにしまい、二本指をぴつと立てて別れを告げる。

先程まで観客席で、一人サバゲーごっこをしていたドイツ人は去つていった。

試合場、職員の合体ダブルドロップキックがマルギツテを場外一歩手前までふっ飛ばす。

盛り上がる会場とは裏腹に、再々再度の深く長い溜息を大和は吐いていた。

逃走の小坊主さんと三枚のお札 1

□

奮闘むなしく、職員が全て叩き伏せられた会場。

それを席で観戦していた紅葉は、鞆から出した弁当箱を膝に乗せて開いた。時間的には表彰式が執り行われている時間帯なのだが、遅れてしまっている。式を運営する者たちが、まだのびているのだから仕方がない。

この空き時間を利用して、紅葉は小腹を満たすことにする。

竹で編み込まれた箱の中には、母が作ってくれたおにぎりが詰まっている。

「つ、ええつと、それは何なのかな？」

一緒に観戦していた、直江大和が弁当を指差す。

不思議に思い、箱の隅から隅までを見やるが、特に不審なものはない。

——もしかや催促されたのだろうか。

「えっ？ おにぎりつて、べつに欲しい訳じゃなくて——重っ！」

大和は、校内で紅葉が唯一親しい女子、川神一子の知己である。気前よく、すべてを海苔で覆われた真っ黒なハンドボール大の塊が並ぶ弁当箱から、一つ取って手渡す。

「これは大きすぎないか？ いや、文句をつけるわけじゃないんだけど」
遠慮がちに、疑問を投げかけてくる大和。

たしかに、コンビニ等に置かれている、『標準』より小さいサイズのおにぎりを見慣れているとそう思ってしまうのも無理もない。

おそらく、商売上、利益を得るために米の量を少なくしてコストを削っているのだろう。

そういった商品で腹を満たすには、数が必要で、お金が幾らあっても足りはしない。
だから節約のため、母に用意してもらったのだ。

「いや、このサイズを各家庭標準にされても困るんだけど——」

「ああ、あたしもそう思っていたのよ。なるほど、だからコンビニのおにぎりとかってあんなに小さいのね！」

反論があつたのかもしれないが、すぐ隣で同意している一子に、諦めたように口を噤む。

一つ賢くなったと喜ぶ一子は、物欲しそうに、弁当箱に視線をくれた。

大和にあげて、より親しい一子に渡さない理由はない。

箱ごと好きなのをどうぞと差し出す。

後輩から恵んでもらうのを始めは固辞したが、腹の音に負けて恥ずかしそうに手を伸

ばす。

「遠慮なんてしないでどうぞ、一子先輩。ええつと、中の具は長年変わらないうちの定番で、右から、おかか、梅干し、ツナマヨに、すり胡麻入りの鮭ほぐし、それと——」

「じゃあ、あたしはツナマヨを貰うわね、ありがとう」

「——でしたら私はおかかのおにぎりを、準と雪は何にします？」

「俺は梅干しで、こらつ、ユキ。食べる前にハンカチで手を拭きなさい」

「うっさいよー、ハゲ。ボクは残った細切りの沢庵がはいったやつ、もーらい！」

四方から弁当箱に伸びる手。

竹製の箱が一瞬で軽くなった。

紅葉としては腑に落ちないものがある。

だが、抗議の視線を向けるも、制服の三人組、浅黒い肌の整った顔立ちの眼鏡の男――

――葵冬馬と、スキンヘッドの男――井上準は笑顔で紅葉に礼を言い、残った白髪の少女――

――榊原小雪は、頼んでもいないのに、味の感想をつぶさに教えてくれる。

紅葉の勢いがそがれる。

「ニヨホホー、しかたがない。庶民の作ったものなど口にするのは躊躇われるが、残った

やつは、此方が貰ってやるうではないか！――ええい、なぜ、そこでよけるのじゃ！」

遅れて伸びた最後の白い手は、紅葉が弁当箱を引いたために空を切る。

この中で唯一、川神学園の制服を着用していない、薄紅色の着物の少女がこちらを睨んできた。

所在なげな手を、再び紅葉の弁当箱に伸ばしてくる。

それもひらりと躲し、紅葉は己が勘違いをしているのではと尋ねる。

「あの、もしかして、おにぎりが欲しいんですか?」

「はん! 高貴な此方がそのようなものを欲しがることがあるはずもなからう! ——

だ、か、ら! なぜこちらによこさぬ!」

くれというならやらぬでもないが、いらぬというものをくれてやるつもりはない。

——炎天下の攻防は、食事の遅い葵冬馬が握り飯を食べ終わるまで続いた。

「ぜえ、ぜえ、なぜ、そこまで、頑なに此方を拒絶するのじゃ! お前と此方は初対面じゃ

ろうに!」

息も絶え絶え、少女は顔を青くし、恨みがましい目で、紅葉を非難する。

初対面の人間だから拒絶しているのだがと、至極まつとうな意見は口には出さない。

一人でヒートアップしていく少女を憐れに思ったからだ。

それに、白髪の少女がその滑稽なさまを指さし、笑っていたのも拍車をかける。

鞆から出した水筒、そのコップに茶を入れて渡す。

「なんじゃ、此方に飲んで欲しいのか？　しかし、庶民の入れた茶など、此方の舌を満足させること、が——う、嘘じゃ！　喉が渴いて死にそうなんじゃ！　早くよこせ！　つて、うわつ、冷たいのじゃ！　何をする！」

引つ込めかけたコップを引つ手繰るように奪い、自らぶち撒ける。

——そろそろ蹴りをくれても、誰も非難しないのではないか。

子供のように癩癩を起こす少女に、一子はどうして良いかわからず呆然とし、大和は疲れているのか傍観を決め込む。

——人間付き合いの基本は我慢らしい。

学園生活のこれからの思い、昨夜読んだ本に書いてあつた。

しかたなく、もう一度コップに茶を入れて渡すも。

「なんじゃ、此方の姿を見て気づかぬか！　まずは茶を拭くものをよこすのじゃ！　気の利かぬ奴じゃのう」

これでも紅葉の人生の中で、かなり気を遣っている方なのだが、相手には理解してもらえない。

一子の手前でなければ、即座に肝臓につま先をめり込ませている。

「ハンカチも持つておらぬのか！　これだから山猿以下の庶民はいやなんじゃ。ええい、この際、拭けるものならなんでも良い。——なに、チラシがあるって、此方の着物

をそこいらの紙切れで拭けというのか？」

口を開けば、不平不満しか出てこない少女——不死川心に、きつとこの人、友達いな
いんだろうな、と紅葉は、己を柵においた感想を浮かべた。

そう考えると、これくらいの暴言を許せそうになるから不思議だ。

「ふん、何を笑っておる。此方とてハンカチぐらい持つておるんじやぞ！今日はたまた
ま、付きの者に持たせているのじや！　じやが今は連れておらん。——今日だけはこれ
で勘弁してやる！　次は此方のために上等な絹を用意しておけ！」

勝手に紅葉の鞆に手を突っ込み、取り出した紙で着物を拭いた心は、そのまま捨て台
詞を残し、席を立つ。

拭いた紙切れをその辺に捨てず、袖の中に仕舞っていた。

その行動に育ちの良さは感じられる。

席に座ったままの、冬馬、準、小雪の三人組はやはり友達ではないのだろう。
誰も後を追わず、談笑をしている。

「あはは、パンダの仇ー、とりや、とりやー！」

なぜか小雪は楽しそうに紅葉の足を軽く蹴っていた。

——それらの様子を一度だけ振り返り、一人、寂しそうに心は去っていった。

不死川心が消えて、残った最後の一つのおにぎりを、紅葉はもそもそと頬張っている。味に不満はないが、量に関しては納得がいかない様子。

自然、むすつとした顔で、手についた米粒を舐めて取る。

「——えつと、ごめんなさい。あつ、それだけじゃ足りないよね。売店でなにか買ってくる？」

一番早く、美味しくおにぎりを平らげてしまった一子は紅葉に提案する。

差し出されたものを頂戴しただけなので、一子にはなんの非もないのだが、顔色が曇っていた。

それを見て取ったのだろう。

いつの間にか二人の後ろの席に座っていた、紅葉の相棒である一年生——岳蘭が目を丸くしていた。

そして、紅葉の頭を軽く小突いた。

「——おい、紅葉！ なんじゃ、この優しさの塊のような生き物は？ どこで買った、わしも一体欲しいんじゃないぞ」

「人の先輩に、何失礼な発言をかましている。この人は『僕が』『親しくさせて』もらっている二年生の一子先輩だ。ちなみに非売品で、現在プレミアが付いている女子高生つ

て奴だ。——すごいだろ」

小突かれた頭を搔きながら、紅葉が返した。

「ああ、あなたは岳蘭くんよね？　良かったら、あなたの分も」

褒められているのか、貶されているのか。

判断がつかなかった一子は、とりあえず好意的に解釈し、お姉さんぶって、先輩風を吹かせる。

それがまた、岳蘭を驚かせた。

「おい、紅葉、結構失礼なことを言ったつもりなんじゃが、この人、金切り声を上げて、刃物で切りつけてこないぞ——翼の折れた天使か何かか？」

「——だからすごいって言っているだろ。ちなみに、何気ない会話の途中で、人の全人格を否定したり、痛烈な皮肉を吐き出したりもしない」

——もしかして、からかわれているのだろうか。

こちらを爪先から頭頂部まで観察した岳蘭が、手をぱちぱち叩く。

どう反応していいかわからず、紅葉に助けを求めるが、彼は得意気な顔をして、一子の同意を求めてきた。

ますます返答の言葉が思いつかない。

「あのね、アタシなんて、そんな特別優しいってわけじゃ。そ、そう普通、これくらい普

通よ！——だいたい、そんな刃物や、毒を吐く女の子なんているわけが」

二人は顔を見合わせ、コソコソと声を交わす。

『おい、そうなんか？ わし、中学は男子中学で、女の知り合いがいなくて判断できないんじゃないや。この人が一般的で、あのクソどもが異常なんじゃろうか？』

『いや、僕も女の友達っていなかったからなあ、どうなんだろう？ でも出会った割合で考えると、人間失格が過半数を超えてるんだよなあ』

——そもそも、クソや、失格と形容される女の子が正常であるはずがないのでは。

「すみません、一子先輩、落ち着いて聴いてください。民主主義に則った結果、先輩のほうがマイノリティになりました——先輩はどうやら人間ではないようです。頭の輪っかはどこに落としてきたんですか？」

尊敬を通り越して、崇拜といった眼差しで見つめられると、座りが悪いどころではない。

赤面する一子は後輩からの視線を避けるために体をずらした。

「二人共、よく考えてみて！ あなた達の周りの女の子だって、気づいていないだけで優しいところはあるんじゃないかしら？ そういったところをスルーする男の子は良くないってお姉さまも言ってたわ！」

そこまで熱心に来られると、二人はもう一度腕を組み考える。

「ううん、わしの知っている昔なじみの女と言ったら、腹の底から腐っている卑怯極まりのないクソ女だけなんじやが、あいつにも人間の一寸片程度の優しさがあるんじやろうか——ふむ、それはないな。四方八方どこからみてもあいつは立派なクズじやつた！」

面白い冗談を聞いたと、笑顔で否定する岳蘭。

『ビヤツクシヨ！ うう、こんな真夏に風邪か？ って、霧夜さん、顔が汁まみれで汚れてますよ、この雑巾で拭いたらどうですか？ って、あたしの指はそっち方向には曲がらないんですが、イテツ！ ちょつとまじで痛いっすよ！』

近くの客席から誰かのクシヤミが聞こえたがすぐに静かになる。

「そうだよ、一子先輩。僕の知っている女は、明らかに血管に、血が流れていないタイプの人間だし。たぶん人の優しさに感動するとか、そういつた神経を母親の胎内に残してきたっばいよ。仲の良い親友同士を無理やり殴りあわせたくせに、大して面白く無いと、飽きて放置して、家に三時のおやつを取りに行くようなやつですよ？」

頷きながら結論を出す紅葉。

『くしゅん！ ー、誰かが噂をしているんでしょうか？』

『つて、委員長！ シー、静かに！ って、なんでさっきの人達とこんな近くの席で観戦しなくちゃいけないの？ 他の席に行こうよ』

『——だって、もう他の席は埋まっているみたいですし。立ち見は足が痛くなるから私

は嫌ですよ、大和田さん——だからなんで私の頬を引つ張るんですか?」

『わたしは胃が痛いんだけどね!』

炎天下では珍しい、二度目のクシヤミの音は喧騒に消え、一子は気にもとめなかった。

——ちなみに懸命な説得もむなし、一子の背中には翼がもがれた痕が残っていることになった。

● 『大変お待たせしました。これより表彰式を始めます。その後、優勝者と武神川神百代によるエキシビジョンマッチが行われま——』

『それに加え、上位四組のチームには副賞として、豪華景品がいろいろ用意されている。こちらは早い者勝ちなので、急がないと欲しい物がなくなるかもしれないぞ』

「うーん、残念。あたしは準決勝に進めなかったから貰えないわ。——あつ! でも大和は貰えるわよ! 急がないと!」

途中にノイズの混じったアナウンスを聴いて、一子は大和を急かした。

決勝戦で起ったハプニングの後片付けがようやく終わり、クリス主従のおかげでズタボロになった職員たちが急いで整えた表彰式の舞台は、かなりやつつけ感があった。

だが先ほどの激闘を見た者達に文句をいうものはおらず、観客は式の後の戦いを静かに待っていた。

「大和、だから急がないと、欲しい物がなくなっちゃうわよ！」
舞台を眺めて、動かない大和に焦れたのか、一子は腕をとって立ち上がらせようとする。

賞品をくれるのなら、断ることはない。

なのに大和が席を離れない理由は二つ。

——一つは、表彰式が行われる舞台、そこに続く南北二つの入場口。

その南口の脇に、先ほど暴れまわった少女が従者と一緒に武器を構えていること。

そして北口の横の壁に張り付いて大和の姉貴分が様子をうかがっていること。

——もう一つは、先ほどのアナウンスが途中から、百代の声に代わっていたこと。

ここからでもわかるほどに、にまにまと楽しそうな表情を貼り付けた、百代とクリス

——そしてどこか、疲れた様子で付き合っているマルギツテ。

ここままであからさまな疑似餌に食いつく魚はいないと思う。

不戦敗で逃げ出した彼らの正体が、狡猾な鬼面の人間であつたならば当然、そうでなくともなにかあると警戒して近づくはずがない。

決して頭が悪いわけではないのだが、たまに信じられないほど馬鹿な行いを躊躇わない姉貴分を見て、大和は思った。

いや、弟の欲目があるだけで、もしや百代は少しお馬——。

それ以上の想像は、大和の精神の健康に悪いので、頭を振って掻き消す。

獲物を逃して、不機嫌になるだろう彼女らを宥めることが、己の役目であることを思い出す。

「あれ？　ねえ、大和。紅葉くん達はどこにいったのかしら？　さつきまで隣りでお茶を飲んでいたはずなんだけど——」

一子は辺りを見回し後輩を探していた。

それを一瞥して興味をなくした大和は、日差しの強い二日間を戦い抜いた体と心が、わりかしどうでも良い理由で、さらに疲労するであろうこと。

そう思うと軽い眩暈が起こる。

だから、会場に勢い良く入ってくるお面の二人組が見えたのは、ただの錯覚に違いない。
い。

●
とても巧妙かつ、心理の隙を突いていた。

「ふっ、見事にしてやられたよ。たしかに、これは盲点だった」

宝を餌に、獲物を引き寄せろ。

単純でいて、絶妙な策。

紅葉は手の平を軽く合わせ、感心している——ふりをして、よくよく考えれば小学生

でも避けて通りそんな策略にハマった己の失態をごまかそうとしていた。

「だから、モモ先輩。まず自分とマルさんが奴らと決勝戦をやり直して、予定通り勝者が先輩と戦えばいいのでは？」

「それだとせつかくの戦う機会が減ってしまうな。この際、お前たち四人対私、というのが一番望ましいんだが——だめか？　そうか——だめかあ」

アシユラを無視し、舞台上、言い争うクリスと百代。

取込中ならば、帰ってしまったても問題なからうと、踵を返すも、入場口には赤髪軍服の女がトンファーを回転させ威嚇してくる。

このままでは川神百代と無理矢理に戦わされることになりそうだ。

「——あの、僕たちは、決勝戦を辞退したはず、なんだ、け、ど」

人に暴力を振るうことに、爛々と表情を輝かせる百代が怖い。

両手の人差し指同士を突き合わせ、控えめな声で主張する。

そんな精一杯の強がりを見せ、二人は皮算用を続けていた。

あの怪物と戦うくらいなら、隙を見て強行突破でもするか、と相棒と視線を交わした。

「ああ、お前ら、言っておくが、そこから一步でも動いたら、試合開始だからな？」

——高校生にもなって自分ルールを行使する存在を初めて目の当たりにした。

「んんっ！ 今、一歩動かなかった、か？」

「動いてないです！」

難癖をつけてくる武神川神百代。

——自分で決めたくせに、それすらも守る気はないのだろうか。

「ちよつと待ってくれ、モモ先輩！ 自分たちはどうすればいいんだ？ もしかして、早
い者勝ちだとか言うつもりじゃないだろうな？」

「——なにも、問題ないんじゃないか？」

クリスの疑問に、武神が目をそらし答える。

「あー、あー、モモ先輩、ずるいぞ！ 先輩はそうやって力技で、いつも自分の我儘を認
めさせるんだ！ なら自分だって、我儘を言つてやる！」

「いや、いつもやりたい放題のクリに我儘とか言われても——だから床に転がつて駄々
をこねるのはやめろ！ って今、動いたな！」

「——全く動いていないんじゃないが」

転げまわり、自分が戦うんだあ、と最近では小学生も行わない駄々のこね方を見せる
クリス。

そして百代は、それを説得しながらも、一歩も動いていない紅葉達に、ちくちくと牽

制を入れる。

段々と収集がつかなくなってくる。

「だいたい、なんでそこまでわしらと戦いたがるんじや？ わしらとあんたは、初対面のはずなんじやが？」

紅葉よりもいくらか落ち着いている岳蘭は、百代の執着を疑問に思っているようだ。

「ん、それは、あれだ。お前らは鬼面の関係者なんだろ？ だったら一度負けたリベンジはしておかなきゃ、不味いだろう？」

百代がこちらに軽く同意を求めてくる。

紅葉は腕を組んで彼女の言い分が正しいのか考えてみた。

——正体がばれている。

「鬼面って、誰かと勘違いしていないですか？ だって僕は魔界の王子様だし、人間界は今回が初めてです、よ？」

「——いや、そういう設定の話は良いから。ところでおまえ、私に敬語を使っているな？ ということは川神学園の一年か二年なんだな？ おい、今のはさすがに動いたよな？」

——なぜか、通っている学校も特定されていた。

恐ろしい、頭部にある二つの穴には千里眼でも嵌めこまれているのか。

洞察力に恐れを抱き紅葉は仰けぞってしまふ。

途中、頭が地面すれすれの状態。

手放しブリッジで踏ん張り、それでも倒れずに動いていないと首を振る。

バネ仕掛けの玩具のように元の体勢に戻ると、恐怖を共有しているであろう『制服姿』の相棒に目をやった。

———そういえば急いでいたので、仮面だけ着用して走ってきたんだっけ。

川神百代、クリス、マルギツテ、そして岳蘭、四人の視線が紅葉に注がれている。

気のせいだといいいのだが、すぐく阿呆を見る目で。

顔から火が出そうだ。

幸い三面六臂のアシユラ面のおかげで、合わせる顔にはことかかない。

———それでもいたたまれなくなった紅葉は、堪えきれずに面の前側の顔を手のひらで隠し、走っていった。

紅葉の眼前、百代から飛んできた光線が、入退場口の手前の土を大きく抉った。

「絶対動いたよな？」でも私は優しい女の子だ。許してやるから、ちよーっと、戻ってこい———でないと次は当ててるぞぞ？」

手招きする百代。

紅葉は舌打ちして、くるり踵を返す。

——自分一人だけで逃げようとするな、裏切り者と、岳蘭に頭を小突かれた。

「百代、クリスお嬢様、いい加減に観客も待ちくたびれているようです。そろそろ始めなければ」

見かねたマルギツテが、仲裁に入る。

炎天下の中、辛抱強くもまっている観客のことも考えねばならない。

だが、百代も、クリスも折れる気はないとのこと。

「——こうなったらしかたない。あなた達が、自分で戦う相手を決めなさい！ ちなみに、百代を選んだ場合は、後日傷が癒えた後に改めて、お嬢様と戦ってもらおう、理解したな、復唱しろ！」

「おお、マルさん、名案だ！ それなら、自分は文句はないぞー！」

紅葉と岳蘭は、当然、復唱しない。

百代も、同じ条件ならばと手を上げ賛成を示す。

両者に合意がなされたのか、わがまま娘二人は満足そう。

どれだけ声を張ったところで、紅葉の反対意見など、黙殺されていた。

いよいよ、戦いが始まってしまふのか。

焦る紅葉の横、終始、取り乱さなかつた相棒。

その姿に昔の記憶を思い起こす。

そこまで肝が座っている男だったか。

首を傾げる紅葉を気に留めず、岳蘭は一步移動する。

——後ろではなく前へ。

それが何を意味するのか。

空気が変わる。

百代は嬉しそうに舌なめずりをした。

「そうか、私を選んだな？ 残念ながら指名されなかつたクリにマルさんは、下がって

いろ！」

百代の綺麗な黒髪のが先が風もないのに、揺れる。

紅葉は相棒の行動に呆気にとられていた。

——歩調は変えず、もう一步前へ。

百代は笑顔のまま構えない。

それは余裕なのか。

これならば、初撃如何で逃げる機会が訪れるかもしれない。

紅葉は、百代と岳蘭、そしてクリスとマルギツテの位置関係を把握し、脚をためる。

高まる庄。

審判はいるのだが、開始の合図はない。

——岳蘭の一撃が号令代わりになるのだろう。

百代へ手が届く距離に来て、岳蘭は、懐に手を入れた。

「そうか、おまえは本来、武器使いなんだな？ いいだろう、卑怯とはいわん、何でも使

え。そして全身全霊で、私に——」

——そして、懐から出したそれは、武神川神百代の四肢の動きを縛った。

「おい、アシユラ、わしは先に帰るぞ。おまえはどうする？」

固まった武神をそのままに、岳蘭はこちらを通りすぎて入り口へ。

紅葉には状況がつかめない。

それは、クリスとマルギツテも同じこと。

あれほど好戦的だった百代は、しゃがみ込んで、いじけたように地面に、のの字を書いている。

「何だよー、あー、テンション下がるー。空気読めよー。ここまで来たら決着をつける流れだと思うんだがなあー。こんなか弱い女の子相手に後ろを見せるとかないわー。私
が男だったら、迷わずいたただくのかなあー。うわーよく考えたら武神と戦える機会なん
てとつても貴重だぞー。

これを逃したら、絶対後悔するなー」

ひどく大きい独り言で、ちらちらと岳蘭の様子をうかがっていた。

岳蘭はそれを視界に入れない。

構ってもらえないことに気づいた百代が、岳蘭の腕を掴む。

「いやいや、少し待て。もう一度考えてみる？　今戦っておかなければ、十年後きつと後悔するぞ。ほら、飲み会とかで、『おれー、むかしー、武神と戦ったことあるんすよお』とか、過ぎ去りし日のみつともない武勇伝を語る感じのあれとかできなくなっても良いのか？　——つって、だから待ってくれよお！」

徐々に拮抗が敗れ、少し泣きの入った百代が引きずられていく。

女の涙くらいで動揺しない岳蘭は、無情にそれを振り払った。

再度、懐から出した一枚の紙を見せると、お預けをくらった飼い犬のように百代はシユンとして項垂れる。

——それは大鬼を封じ込める和尚の札か。

気になった紅葉、クリス、マルギツテは頭を突き合わせ、それを確認する。

——それは、蛇神との戦いの前、百代が一筆したためた、『不戦』の契約書であった。

成る程と納得した三人。

「ん？　これは自分とマルさんには関係ないのではないか？」
去る岳蘭の背中、今度は金と赤のこなき爺がくつついた。

逃走の小坊主さんと三枚のお札 2

川神百代は傷心していた。

腕を掴んだその感触。

イメージとしては、岩を通り越して山。

ただ固いだけの塊ではなく、大地そのものを相手取るイメージ。

その頑強な肉体に、百代の食指は大いに刺激される。

——あいつならば、満たしてくれる。

百代の期待は膨らんでいく。

なのに期待させるだけさせてこの仕打はない。

まるで、一目惚れしたその瞬間に失恋させられた乙女の気分だ。

遠ざかっていくいけずな想い人は今、百代ではない誰かに抱きしめられていた。

「ふん、クリもマルさんもみつともない。良い女つてのは振られたからって、男にすがりついたりしないものなんだ」

それは振られ女の、恨み節。

必死に喰い下がる主の少女とその従者を見て、百代は馬鹿にしたように首を横に振る。

——視線を感じて、そちらに向けば、なにか言いたそうにアシユラがこつちをみつめていた。

仮面があるので表情はわからない。

「なんだ、おまえも帰るのか？ ふん！ 目障りだ。戦わない奴はさっさと帰れ！

言つとくが、お前達が鬼面の関係者で、川神学園の生徒だつてことはバレたんだからな！ あとはあの紙切れをどうにかする方法を大和が思いつけば。そ、その時まで、首を洗つて待つておくんだな！」

挑発に返すこともなく、アシユラはお辞儀をして、去つていく。

——ああ、葱だけでなく、鍋まで背負つた鴨が、飛び立つてしまう。

未練たらしいみつともない百代は、諦めきれず尋ねた。

「やつぱりおまえも持つてるんだよな、あの紙切れ？ ふーん、そうかあ、持つてるかあ。——なら、見せるよお！ 今から五秒以内に提示できないと、戦闘開始な！ いーち、にー」

アシユラは慌て、舞台の脇においていた鞆を探る。

勿論、この秒読みはただの意地悪で、百代に本当に攻撃する気などはない。

十秒以上過ぎてから、慌てたアシユラがクシャクシャになった紙を勢い良く眼前に突きつけてきた。

——これで本日二度目の失恋。

もう関わり合いになるのは御免だと、百代の顔に張り付くくらいの距離に紙切れを見せると、急いで鞆に仕舞う。

——ちなみに気の強化によつて百代の動体視力は常人離れしている。

「——なあ、悪いんだけど、一瞬過ぎて確認できなかった。だからもう一度見せてもらえるか——今度はちやあんと一緒に確認しよう！」

だから、素早く押し付けられて、即、仕舞われたチラシだろうと内容はしつかりと把握しているのだ。

いやいやと、アシユラは首を振る。

百代が、一步踏み出すと、アシユラは一步、後ずさる。

「ち、違うんです。あの紙ならちちゃんと、鞆に入れっぱなしだったはずなんだ！」

「そうかあ、じゃあ、お姉さんが一緒に確認してあげよう」

百代の一閃。

百代の右手が、動揺するアシユラの鞆から先ほど、押し込まれた紙切れを抜き出す。

「——飽食ハンバーグハウス、開店セールで一キロハンバーグが五割引き。これはワ
ン子が喜びそうだな。他にも九鬼グループの飲食店がずらりと乗っている。んー、お
やあ、これは私が書いた契約書じゃないじゃないかあー」

どういふことかと、嬉しそうに百代が答えを待つ。

「だから、あれ、本当に、どこにいったんだ？ 盗まれた？」

アシユラは鞆を逆さまにして、中身をぶちまけ、底までさらう。

『おい、誰か、拭くものはないのか？ 奴の鞆にあつた薄っぺらい紙きれでは、全く汚れ
がとれんのじゃー！ おいそこな山猿で構わん。早くするのじゃー！』

『うえーい、心。これ、どーぞ』

『んん、これはティツシユ？ ええい、この際構わん——つてこれは長いのう。どこで切
れば』

『それ、折り目があるから、そこで千切つて、ちゃんと三角折りしておくんだよ！

そうしないと、次に使う人が不便だからねー』

手元に紙切れがないことが確認できたのか、アシユラは相談があると百代に話しかけ
てきた。

「あの、家に帰ればあると思うんです。約束したのは確かなんだし、契約書が手元にな
いからといってそれを反故にするのは——」

そこを突かれると痛い。

契約は全校生徒の前で、鬼面と交わされた。

言う通り、紙切れがないからといって、この大衆の目がある場所では、力づくでやむやにするのは難しい。

——だが、今回の戦いが、鬼面と全く関係がないとしたらどうだろう。

「ああ、ところで一つ疑問があるんだが。私とおまえが戦うのに、なんであの契約書が関わってくるんだ？」

百代は可愛らしく、顎に指つけ首を傾げてみる。

「だって、あれは、鬼面の幹部と、私が戦わないって約束であって『おまえと私には』まるで無関係じゃないか！」

仮面越しでは見れないが、アシユラは百代の言い分に目を白黒させていることだろう。

「だから、僕はあの時の、さつきあなただも——」

「証拠はあるのか？ ないのだから？ それに決めつけて悪かったな。おまえが、鬼面の一味だなんて。それはきつと、間違いなく私の勘違いだ！」

そう。仮面をつけた神出鬼没、正体不明の悪童。

鬼面の幹部様である証拠などあの紙切れ一枚のみ。

顔を隠している彼らにとっては素顔すら証明にはならない。

鬼面の一味であると、証明できないならば、契約書の効力はない。

鬼面ではない他の誰かとして、精一杯、百代と戦ってもらおうではないか。

嬉しそうな百代。

そんな百代に、対抗策を思いついたのか、アシユラはぼんと手を打ち合わせる。

「——うう、お腹が。ちよつと、ト、トイレに」

そして、お腹を抑えて、小走りに去っていく百代の想い人。

「つーかーまえーた！」

——百代の力は、百万馬力。絞め殺す勢いで恋人を抱きしめ捕獲する。

こうして、百代の二度目の恋は成就したのだ。

「いい加減に離さんか。もうわしの不戦敗で構わんと言っているだろうが！」

「いやーだ！ 絶対に戦うんだあ！ どうしても戦いたくないというなら、腕づくで

自分を倒していけ！」

戦いたくないなら、戦って行けと矛盾する提案を押し付けようとするとクリスに、辟易する日光。

向こうの話し合いはまだ終わっていない。

● 「あーうー、早くしないと、も、漏れてしまう」

演技を続け、どうにか逃げだす隙を探す。

紅葉の背中に伝わる感触は柔らかいのに、腕は万力のように固く、抜け出せる気がしない。

大きな蛇に締め付けられているかのよう。

本気の踏み込みで、常人を引き離すほどに加速することも考えたが、百代はこのままくつついて来そうだ。

だから紅葉は、苦しがるふりしかできない。

「——もしかして、本当に腹を壊しているのか？」

一向に三文芝居をやめない紅葉。

もしやと少しでも思ったのか、眉を寄せ、百代が様子を窺ってくる。

——かかった。

仮面の下、紅葉はほくそ笑む。

紅葉は知っている。

いくら武神と祭りあげられようと、隙はあるのだ。

人間は、そう簡単に非情になれはしない。

川神百代とて、一介の女子高生に過ぎない。

齢を重ねれば、角は取れるものだ。

あの幼き日の鬼子も大人になる。

それを、成長と呼ぶのか、欠点とするのかは人による。

——紅葉は喜んで、人の情という、欠点を突く。

今度は今までより一層、肺から絞り出したような、か細い声で唸った。

百代が腕を放した。

百代の甘い判断に感謝し、腹を抑え、ゆっくりと足を入り口に向ける。

「さてさて、これ、使つていいぞ」

すると百代は制服のポケットからちり紙を出すと、紅葉に押し付けてきた。

紅葉は受け取つて、それがなんなのか、顎に手を当て思索する。

「ん？ ああ、——逃げられては困るからな。さつさとここですませるんだな」

「このことは、この会場の中心のことだろうか。」

百代の優しい気遣いに絶句するアシユラ。

——三つ子の魂百まで。齢を重ねようが、鬼は鬼。人は鬼になれるが、鬼は人に戻れない。

受け取ってしまったポケットティッシュ片手に、紅葉は固まったま動かない。

——この衆人環視の中、なにを済ませるんだろう。

決勝戦はまだまだ始まらない。

● 会場内、男子手洗い、その個室の一つ。

紅葉はウンウン唸っている。

勿論用を足しているわけではなし、頭を抱えているのだ。

野糞をさせられてはかなわんと、必死に川神百代を拝み倒し、トイレに立て籠もる。

思案中の紅葉の腹に巻かれた縄紐が二度三度引つ張られる。

それにこちらかも引つ張り合図を送って返した。

『紐に反応がなかったり、返事がなかったら、ここを試合会場にするからな？』
とのこと。

それは分刻みで繰り返される。

きつと縄の先にいる者は、落ち着いて用を足させる気などないに違いない。

——気分は山姥に追い詰められた小坊主の心境。

その上、和尚がくれるはずの御札は一枚もない。

『おおう！　なんだ、ってモモ先輩か。って、なんで男子便所の中まで入ってきてるんですかああ！』

『おやおや、マナーがなつていませんね。——それと準、慌てていても、せめて前くらいは隠してください。女性に失礼ですよ』

——聞こえて来る声は、観客席にいた先輩二人組のものか。

『うん、ちよつと待て。せーの』

個室のドアが曲がりそうな勢いで、ノックが響く。

それは大きすぎて、確認のためではなく、もはや中にいる者への脅しである。

紅葉が、控えめにノックを返す。

『よし、いるな。できるかぎり急げよ！』

今度は男子トイレ入口のドアが閉まる音が響いた。

誰もが心安らげるはずの場所で、穏やかな心境ではいられない。

それでも必死に心を落ち着かせ考える。

男子手洗いの入り口は、百代が陣取っている一つのみ。

それ以外となると、個室の外、換気のためにある小さな窓か。だが、窓は頭がどうにか通るかといった大きさ。

紅葉がぬけ出すのは無理だと、個室に入る前に確認済み。

——とりあえず個室を出て、周りをもう一度見回した。

「おお、誰が入っているのかと思つたが、あんたか。いや、モモ先輩の相手だなんて、あんたも大変だな」

面を被つたままの紅葉に、井上準は苦笑する。

それを無視し、紅葉は頭より上の位置にある窓を開けて、外を見た。

手洗いは二階にあり、窓の外には川神の街が広がっていた。

ここから出られれば、すぐに人混みに紛れ込めるのに。

次に、確かめるよう手洗いの壁を軽く蹴つてみる。

——これくらい厚さなら。

「あの、壊そうと思つているならやめたほうが良いですよ。この建物の管理は九鬼が行っていますし、後日、恐らく結構な額の請求書が送られてくるはずですよ。それに、壁が崩れる音を先輩が聞き漏らすはずもないですよ」

もう一人、葵冬馬は何が楽しいのか、嬉しそうに紅葉に忠告する。

彼の言う通り、万が一、紅葉の正体が露見した際に、請求が怖いので思いとどまる。だが、それではどうすればいいのか。

助けを呼べれば、まだなんとかなったかもしれない。

個室の中で何度も、岳蘭と優の携帯に掛けてはいたのだが、『わし、帰る』『一人でなんとかしろ』とのメールを最後に着信拒否をされた。

紅葉が困っているというのに、友達甲斐がなさすぎる。

——これでは、囿にも盾にも使えない。

これまた友達甲斐のない思考の紅葉。

こうなったら、最後の手段。

正面突破しかないか。

幸い、この場に百代から身を守るための盾が二人ある。

「おい、若。なんかあいつ、不穏な感じで笑っていないか？」

「そうですね。恐らく、僕達を囿にでもするつもりなんでしょう。これは、困りましたね。腕力で敵うわけがないですし、どうしましょう？」

後ずさる準と、やはり余裕の表情を崩さない冬馬。

紅葉の手が二人に伸びるその瞬間だった。

——手洗い場のドアが勢い良く開いた。

紅葉は驚き、天井の隅に張り付いた。

「ちよつとどいてー。おーい、冬馬ー、準ー」

百代の前を横切つて、その白髪の女性徒は、男性手洗いに突入していく。

本来なら先輩として、はしたないと注意するべきなのだろうが、百代も先ほど入室していたので、そこは指摘できない。

『ちよつ、こら、ユキ。なんのつもりだ！ 俺には心に決めた幼女が——』

『うっさい、ハゲー。黙つてよこしやがれー』

間延びした声と、準の悲鳴。

それからすぐに、榊原小雪が退室してきた。

あまり親しくない一学年下の後輩は、何を考えているのかわからない普段通りの表情で、百代に挨拶もせずすたすたと走つて行つてしまう。

それから数分後、まだアシユラは籠つたまま。

いい加減、焦れて来た。

観客を待たせているのだ。

そろそろ、観念して出てきたらどうか。

出すものが出たのなら、早く出てこいと、百代は、また縄を引く。

——手応えが返ってきた。

「おーい、もう観念したらどうだ。ほら、戦うと言つても試し合いだ。私も全力を出すつもりないぞ——最初は」

百代は、猫なで声で鼠を誘う。

全力を出す気がないというのは本当。

勿論それは相手を氣遣つてのもの——などではなく、新しい玩具を壊さず長く愉しむための配慮にすぎない。

「——それとも、本当に腹具合が悪いのか？ だったら、薬を貰つてきてやるから、なんとかいえ——」

——また手応えが返ってくる。

だが先程までそれと一緒にあつた返事がない。

「——まさか！」

もしやと思い、百代は縄を引く力を強める。

体全体で引つ張るのではなく、あくまで腕力のみで。

「ぐええ！ モモ先輩、手加減してくれ」

だが百代の剛力だ。

勢い良く手洗い室の外まで飛んできたのは、頭髪を剃りあげた後輩。縄は彼の胸に括られ、いるはずのアシユラがない。

「なんでおまえが？」

「すみません、脅されて、これを腹に巻けて」

百代は準の襟首を掴みあげて、詰問する。

——往生際の悪い奴だ。

答えを聞くやいなや、ドアを蹴破った。

そして個室トイレの一つ一つを確認する。

全てドアは開いており、中は無人だ。

——おかしい、奴は何処へいった。

「おい、ここの入り口は一つしかないはずだぞ！ アシユラは何処だ？」

百代の乱入に、驚いた風の葵冬馬に尋ねる。

冬馬はすぐに落ち着きを取り戻すと、換気のための窓を指差す。

「馬鹿な！ 窓を壊したならともかく、奴の体格では——」

言葉の途中、窓の外の景色に、奇妙な面を被った川神学園の制服が見えた。

こちらに気づき、大きく手を振っている。

「ええ、無理でしょうね。しかし、信じられないことに、彼は体の関節を自力で外し、蛇のようにその小さな窓を通り抜けて行きました」

冬馬は語る。

そして説明しながら、何度も頷き感心を示した。

冬馬の言葉の真偽など確かめる暇はない。

今は早く追いかけてねば、奴の足では百代であろうと逃げられてしまう。

拳に体内の気を集中させる。

表面を気で覆った百代の拳は鋼鉄よりも頑丈になった。

その鉄拳をコンクリートの壁を破壊するため構え直した。

「ちなみに、先程も同じ忠告をしたんですが——壊すなら、壁の弁償は覚悟してくださいね」

——百代は回れ右をして、会場の出口を目指し手洗い所の扉へ。

そして、先ほど放り捨てた光る頭の後輩の前を横切ると、これまた振り返る。

これを忘れてはいけない。

「おいハゲ！ 変態はロリコンだけにしておけよ。これは先輩からのありがたい忠告だ。それ以上、変態が増すようなら、最悪、警察署の前に捨ててくるぞ」

ズボンを履かず、下半身がパンツ一枚だけの後輩を叱り、百代は走っていく。

武道家と奴ら鬼面の違い。

百代の気で行う居場所の探知に、奴らは一般人と変わらぬ反応しか示さない。百代の探知は、おもに気という生命力の運用が関わってくる。

体外を気で強化した武道家などは、面識がなくとも、別個体と認識できるのだが。気を扱わないものに関しては、とたんに精度が落ちてしまうのだ。

反応は見つけられても、識別が難しい。

そのため、よく知り、僅かな特徴でも記憶した幼なじみたちの気ならともかく、人混みに入られたその時点で一般人の気に紛れて見失ってしまう。

疾風のごとく急ぎ、先ほどアシユラの気がいた場所まで到着する。

この時点で既に、アシユラの気を見失っており、目視で確認する必要があった。

「おい、今ここにお面のやつがいただろう。どっちにいった？」

「ええっと、あっちー！」

指したのは、川神駅前。

案の定だ。

紛れる前に、急がねば。

札を言い、百代はさらに速くなる。

その後姿を、なぜか先ほどあった時のスカートではなく川神学園男子制服のズボン

履いた榊原小雪が、元気よく右手を振って見送っていた。

——ちなみに後ろ手に隠しているもう一つの手には、三面六臂のお面が握られていた。

●
そして、会場内、男子手洗い。

無人の三つの個室の横。

用具入れのドアがゆっくりと開いた。

中から出てきたのは、川神学園の制服をきた男子。

顔は白いビニール袋に覆われていてわからない。

眼と鼻の部分に、指で穴を空けただけのみすぼらしい覆面。

被っていたアシユラ面は、窓の外に待機していた白髪の女性に、投げ渡してしまった。

「——そうですね。一言、お礼の言葉がいただけると嬉しいんですが」

この葵冬馬は、何の思惑があつて自分を逃がしてくれたのか。

そこら辺、気にはなるが、今は正体を隠しここから逃げなければ。

からくり気づき、いつ百代が戻つてくるとも限らない。

狭い個室で、散々脅かされ、いつもの楽天的な思考は鳴りを潜めていた。

ビニールの安っぽい覆面も、紅葉を弱気にしている一因なのだろう。

冬馬を無視し、そそくさと歩き出す。

「私はともかく準を見てください。変装のためにズボンを奪われた憐れな姿を。そして悲しいことに『ボク、見たい番組があるから帰る、じゃあね〜』とユキからメールがありました。——準はこのまま、下半身を露出した状態で家路につくことになるんです。そんな彼に何か言葉をかけてあげてください」

「うええ！ ユキのやつ、なんで帰っているんだよ！ ええ、俺このままかよ！」

言葉をと言われても、哀れすぎて言葉がない。

会釈だけして、今度こそ別れる。

「それでは、『また』」

冬馬も会釈を返す。

制止されることはなかった。

会場にエキシビジョンマッチの中止を伝えるアナウンスが流れていた。

□

トーナメントと云う一大イベントが終わり、川神学園生の夏休みは何事もなくすぎて

いく。

受験で忙しい三年生。そろそろ、部活の代替わりで要職につく二年生。

その両方共縁がなく、本当に休むためだけの休暇を満喫する一年生。

思い思いにそれぞれの夏休みが終わってしまった。

そして、九月一日の始業式の日。

文化系クラブの部室が並ぶ部室棟。

その隅、学園の外壁で挟まれたためつたに人が訪れることのない場所。

「ほう、時間よりも、だいぶ早く来たのじゃな、結構結構」

川神学園の生徒でありながら、制服ではなく、桃色の着物を着た少女。

不死川心は待ち人が訪れたことに対して満足そうに笑みを浮かべる。

「ぬう、しかし、なぜ面をかぶったままなのじゃ？ おまえの正体はとつくにバレている

というのに」

相手が近づいてくると、その顔を確認する。

心は着物の袖から一枚の紙を取り出した。

丸められたものを伸ばしたため、皺でクシャクシャだった。

「で、ここに来たということ、此方の要求を受け入れることにしたのじゃな。まあ、此方も鬼ではない。此方の言うことに絶対服従を誓えば、幾ばくかの礼もしよう。もっと

も、断ると云うなら、お前の正体をぼろりと口からこぼしてしまうかもしれんのう、によほ」

それをあの会場で心は偶然に手に入れてしまった。

川神百代と、鬼面によって作られた『不戦』の契約書。

心は、紙を持っているのは逆の手をぎゅつと握りこぶしにする。

——ようやく、己の資格の高さ、その高貴さに見合った力が手に入ると。

それは、小さなガッツポーズだった。

虎と袋の中身 1

文武だけではなく、礼節を重んじる川神学園。

そのせいか、学びを行う場である教室や、各武道場を、学期の初めと終わり、一年で計六回、大掃除する決まりになっていた。

昼休みを終え、午後からの時限分がそれらに当てはめられている。

といつても、学期末とは違い、学期初めはそこまで汚れてはいない。

早々に、自分の割当の特殊教室を終わらせた直江大和は、壁に背を持たれ、己の作つたりスツに視線を集中させていた。

『ねえねえー、冬馬あ！ ココロ、見なかったあ？ アイツ、ぼくらと同じ班なのに、どこにもいないんだよお』

道行く生徒の声も、気にはならない。

『そう言われれば、昼休みから、彼女の姿がありませんね。彼女は労働を好みませんが、寂しがりやなので、班行動には欠かさず付いてくるんですが、珍しい』

それは、大和の姉貴分である百代からの頼まれごと。

夏休みの武道大会で、姉の心を見事射止めた、灰かぶり姫の搜索状況を記した物。

あの大会以降、癩癩こそ起こさないが、じわりと百代の欲求不満が溜まっていく。

休み中、学校外からの百代への挑戦者はどれも手応えがないらしく、それもまた拍車をかけることになった。

機嫌が悪いからといって、周りに暴力を当たり散らすような、度量の狭い人ではない。だが、恋人が見つからないそのストレスの捌け口が、弟分である大和に構う時間に変わっていく性癖。

そのどこが不都合だと云う者もいるかもしれない。

あのパワフルな百代のかわいがりは、心情的に良しでも、肉体が悲鳴を上げてしまう。一日で、山へ、川へ、海へ。

休憩時間には、鼻歌を歌いながら、疲労で動けなくなった弟分をお手玉して遊ぶ姉。

それらに耐えきれず、一人で勝手に遊んでくださいとでも云えばよかったのか。

だが、そうすると、この年上は、幼児もかくやといった様で本気で拗ねるので、始末が悪い。

いい加減、私的な時間が欲しくなった大和は提案する。

己が、手をつくし、あの灰かぶり姫を見つけて出すと。

『お姉さんは、そう言ってくれると信じていたぞ、大和。それでこそ、夏休み中ずっと構ってあげた甲斐があるというものだ!』

ちなみに、これは、大和の提案を受けての百代の言葉。

姉の気遣いを知り、大和はその場に卒倒してしまった。

——こんなことなら、大会が終わつてすぐの百代の頼みを素直に聞いておけばよかった。

あの時の大和は、百代をあの二人のお面の男に合わせると厄介なことになりそうだと、思案した。

それに加え、大会中に起きたごたごたで疲労し、面倒くさくなっていたため、そつがなく断つてしまったのだ。

——だが、姉とあのお面共を合わせる事によつて被る面倒より、合わせない事による姉の機嫌の方が面倒くさい。

それを大和は改めて知つた気分だった。

● 「ねえ、それって、お姉さまに頼まれているやつよね? もう犯人は見つかったの?」

教室内のゴミをまとめた袋を抱えて、一子が尋ねてくる。

別に犯罪者を探しているわけではない。

「いや、まだ絞り込みの段階だよ」

あの大会で判明した重要な事実。

あのお面の男たちは、川神学園の学生服を着ていた。

つまり、川神学園に通う生徒である可能性が高い。

ガラスの靴のように、すぐに本人を特定できるものではないが、それに、百代からの情報を照らし合わせて、リストを調整する。

「あいつらの正体は、当たり前前だけど、まず男子であること」

一子にもわかりやすいように、大和が説明をする。

「そして次に、おそらく武道経験者でないこと。だから、それ系の部活に所属している生徒は除外する」

大和はリストに赤いマジックで線を引き、名前を消していく。

「んー？　なんで、言い切れるのかしら、あの人達、素人とは思えないくらい、とつても強かったわよ？　燕先輩に放った蹴りだって、とつても速くて強かったし」

あの準決勝を思い浮かべ　一子が疑問符を浮かべる。

「いや、俺にはよくわからないんだけど、姉さんがそう言っているんだ——とつ、それに、あの大会の日に、あの場所にいた学園生と、確実にいなかった人間を選り分けて」

大和の広い交友関係、それらの情報網を使って、所在を確かめられた者も除外して
く。

それでもまだまだ多い。

「で、体格的にありえない人間も、消して」

あの二人より、極端に身長や体型が違う者にも赤線を引く。

日光くらいの大柄な体格であれば、すぐに特定できそうなものだが、川神学園内に限れば、そう珍しい大ききさではない。

「あー、大和、わたし、ゴミを捨ててくるからー」

話の途中で切り、一子は集積所への道を元気よく走っていった。

その途中にいる男子生徒に向かって手を振っている。

——あれは、たしか、大会にも参加していた。

一子と仲の良いらしい後輩の名前を、大和は思い出そうとした。

● 「奇遇ね。紅葉くんも、ゴミを捨てに来たの？」

一子は笑顔で挨拶をする。

紅葉の押す台車には、白いポリエステルの袋が鎮座していた。

「ええっと、そうですね。——まあ」

いささか歯切れが悪い。

が、一子は気にすることなく、紅葉の隣に並び歩き始めた

「ちよつと、そつちは集積所じゃないわよ？ こつち、こつち！」

一子とは、反対に曲がる紅葉を慌てて呼び止める。

「また、紅葉くんは道案内してあげることになりそうね！」

一子は、方向音痴な後輩を微笑ましく思い、くすりと笑った。

「ええっと、面目ないです」

それが伝わり、頭を下げる紅葉もつられ笑みになる。

柔らかい雰囲気のまま、二歩、三歩。

四歩目で、一子が首を傾げた。

——『また』って、以前に、一子が紅葉を道案内してあげたことなどあったらどうか。己の口から出た言葉を咀嚼するも、とんと記憶がない。

——ちなみに、一子の隣で紅葉も同じように、首を捻ってこちらを見ていた。

忘れたままでは、気持ちが悪れぬと、一子は、後輩に尋ねようとした。

だが、あることに気づき、疑問を忘れてしまう。

「あ、あの、紅葉くん、動いてない、それ？」

新たに湧いた疑問。

一子はそれを指差した。

——すごい勢いで、紅葉の台車のポリ袋が動き狂い始めていたのだ。

●
突然の珍事に、一子は動揺する。

一子の指先が捉えたままの白いポリ袋は、依然として動き続けている。

突き抜けてこそないが、袋の内側から、手でも伸ばしているかのような形になっている。

一子の指先、ポリ袋、一子の顔、紅葉はそれらに順番に視線をやり、最後にポンと手をたたくと。

「つー！」

——おもむろに体をポリ袋に向け、思い切りよく、靴のつま先をめり込ませた。ポリ袋が動かなくなった、まるで死体のように。

「——よし、これで止まりましたよ」

紅葉はそれを確認すると、また台車を押し始める。

一子もその後を追う。

——一子は止めろと指摘したのではなく、何故動いているのかと疑問に思ったただけなのだが。

日本語の難しさを改めて知った。

並んで歩いて、また数歩、そうではないと一子は思い留まる。

「そうじゃなくて、ね。その、中身ってなんなのかなって」

「ゴミ、ですかね？」

一子の疑問に、間髪入れず答える紅葉。

だが、なぜか語尾が上ずっている。

「それでもなくて、ええっと、種類ってどうか」

ずばり何なのかと、問うたのに、返ってきた言葉は曖昧なもの。

相手が意図的に避けているなどは、一子はつゆも思わない。

だって、真昼の、それも学園内で、後ろ暗い物を運んでいるなどある分けがない。

だったら、先程の袋の動きは何なのか。

教えてくれぬ後輩に、余計に中身が気になってしまう。

先輩後輩として、二人の仲は良好な物。

だから、やり取りも、詰問ではなく、謎々遊びのよう。

「うーん、『燃やしたらいけない』ゴミですかね？」

紅葉は少し考えてからそう答える。

不燃ゴミなのだろうか。

「いや、『埋めたら捕まる』ゴミになると思います」

それならリサイクルゴミや、資源ゴミなのか。

そうでもないらしく、困ったように紅葉は首を横に振る。

袋の中で動き出した点を考えると、機械のたぐいだろうか。

一子の友達であり、九鬼財閥が開発し、貸与されているクツキーのようなロボットか
もと、思ったのだが。

「いや、そんな、高度な機械的なものじゃなくて、どちらかと言うと、もっと生モノな」
要領を得ない紅葉の答えに、一子も首を傾げる。

と、紅葉の携帯が音を鳴らす。

「あ、すみません。——と、あいつらからか」

画面を覗き、すぐに仕舞う。

「ん、よかつたの?」

気を使わせたのかと、一子は尋ねる。

「ああ、待ち合わせに遅れるなよと、警告してきただけです。僕が一度も時間通りに着いたことがないから、よく送ってくるんですよ」

サラリと返されたので、サラリと流してしまいたいそうになる。

「——あ、あのね紅葉くん。気のおけない友達同士だろうと、遅刻は駄目。相手のことを大事に想うなら、待ち合わせ時間はきっちり守るべきだと思うわ」

だが、そこは先輩として後輩を導いてあげなければ。

紅葉のことを思い、忠告する。

言葉の後、先輩振ったことを紅葉が不快に思っていないかと、心配になる。

が、紅葉は呆けたように止まっていた。

「——一子先輩って、なんか、人間できてますよね。だから友だちが多いんでしょうね」
そして己の中で、咀嚼できたのか、感心し、しきりに頷いていた。

一子と紅葉の間では、たまにこういう事がある。

互いの常識が、重ならないこと。

そういう場合は、己を曲げることもないが、押し付けることも駄目だと、直江大和に言い聞かされている。

だが、今のように、紅葉が感心し折れることが多く、二人の関係に罅が入ることはなかった。

「そ、そんな、褒められても困っちゃうわ。って、そうじゃなくて、その中身が」

頬が赤くなるのを、顔の前で手を振り、誤魔化すが、すぐに気づき、話題を戻す。

けれど、お喋りが長かったのだろう。

「あら、あの子。おーい！」

一子が誰かに気づき、先を行く。

視界の先に、目的のゴミの集積場が、見えてきた。



掃除場所は班ごとに割り当てが決められている。

割り当てられたのは、特別教室の並ぶ階の、空き教室の一つ。

埃がうつすらと溜まっている以外、あまり汚れていない教室。

班員の何人かで協力すると、すぐに掃除は終わった。

己以外の誰かがゴミを袋に集め、教室の外の台車の上に設置してくれていた。

そうなると、これは自分の仕事ではと、誰に言われるでもなし、少女は人気のない集積場まで台車を押して運ぶことにした。

「んで、そろそろ観念して、あの女の居場所を教えてほしいんだがよお、姉ちゃん」

そんな誠実な心の持ち主である少女——川神学園指定の制服を着た大和田伊予は、ゴミの集積場のすぐ横、部室棟の壁に、押し付けられるようにして背を預けている。

伊予は立ちほだかる人影から逃げようと身体をずらすのだが、壁に突き立てられた腕が遮り、横に進めない。

自分を壁に閉じ込めている相手が男であり、なおかつ王子様と評してもよい容姿の二枚目であったならば、話はロマンチックなものになるのだろうが、そうはいかない。

——なんだろう、デジャヴを感じる。

女は赤茶でパーマのかかった短い髪の毛先を弄んでおり、川神学園の制服であること以外、あの時と変わらない。

生まれてから二度目の、不良に絡まれるという経験をしているわけだが、伊予の愛読している少女漫画のように誰かが助けに来てくれるという都合の良いことは、ノンフィクションでは起こらないようだ。

——あの漫画はもう捨てよう。

伊予は拳を握りこみ、小さな決意をする。

「つたく、転入早々、人探しに駆り出されて、こつちも忙しいんだ。できれば、手が出る前に教えてほしいんだけどよう」

ちなみにその小さな決意は、たったいま、これっぽっちの役にも立たない。
となれば、妥当なところを一つ。

「あ、あの、もし暴力を振るうつもりなら、先生に」

「なん！ だつて！」

「——言いつけたりしたら、どう、なるんでしょうね？」

大きい声に怯え、何故か相手に尋ねてしまう。

「チクるまえに、お前をどうにかするしかないんじゃないかねえ？」

女は答えてほしくない質問にはきちんと返してくれた。

女が微笑み、伊予もつられて笑う。

楽しくはない。

女の目は笑っていないし、愛想笑いの伊予の瞳は水気を湛えている。

で、そんな伊予の潤んだ瞳に、ある人影が映る。

その影に願った。

誰でもよいから、伊予を救ってもらいたい。

——誰でもよいと願ったが、実は誰でもよいというわけではない。

それは、眼の前の凶暴な女性の尋ね人で、伊予の級友で、今この場に来られると、とてもややこしい人物。

もちろん、親しい級友を巻き込めるわけがないと、女に見つからぬよう必死にサインを送った。

——でも、こつちに来るんだらうなあ。

ちなみに、伊予に予知能力はない。

が、思ったとおり級友は、思った以上に軽い足取りでやって来てしまった。

「大和田さん。たしか、ゴミを捨てたら、すぐに行くから校門で待つ様に言いましたね？ちなみに、私は十分も待っていたわけですが、何か言うことがありますよね？」

級友は、携帯画面を向け、伊予への発信履歴と、時刻を確かめさせた。

休日の待ち合わせであれば、この級友は意外なことに、十分以上前から、待機している性分である。

そんな律儀な彼女を見て、伊予は息を吸った。

「委員長の、すっごい馬鹿！ 時間を気にする位なら、もつといろんな事に気を使おうよ！」

「——えっ、何で、私、すっごい怒られているんでしょうか？」

伊予のいつもより大きめな声に、困惑している級友。

そして伊予の顔と、携帯の時刻を何度も確かめている。

普段あげない大声で怒鳴ったことで、幾分か冷静になる。

で、その空気と勢いに乗じて、級友の手を取り、走り出そうとする。

もちろん、残ったもう一人がそれを許してくれるはずがないのだけど。

——伊予の腕が逆に引つ張られた。引つ張ったはずの級友に。

その隙に、女は回り込むようにして、二人の行く手を遮った。

そして愉しそうに、ニヤニヤと笑みが増した。

その笑顔と、泣きそうな伊予の顔を交互に確かめて、級友は云った。

——不穏当なことは云わないでほしい。

伊予は願った。

というか、級友の袖を引き、涙目で首を横に振り、訴えていた。

伊予は預言者ではない。

「——で、こちらの方は、大和田さんのお友達ですか？　これは『どうも、初めまして』

笑顔の級友と、笑顔が引き攣った女。

● 預言者ではないが、こうなることを伊予は知っている気がした。

本当に忘れてしまったのか、ただの挑発なのか。

動揺を表さない級友の顔からは、判断できない。

だが、そのどちらであろうと、相手にとつて同じ意味になる気がする。

「——で、大和田さん。こちらの方は、どちらのお山から？ それとも動物園でしょうか？」

——しっかりと覚えていたようで、ということとはさっきの言葉は挑発だった。

女の顔は笑つたまま、血管が切れそうなくらいに赤くなっている。

それでも笑顔が崩さないのは、挑発に対しての余裕のつもりか。

「——今日は先約があつてねえ。だから、クラスと名前だけ抑えておけば、それ以上はしないつもりだったんだけどよお」

「あら、名前くらい構いませんよ？ お返しに、あなたのお名前も教えてくださいませんか？

ああ、もしないなら、私が付けてあげます。そうですね、太郎か、花子でいいですか？」

代表的な人名ではあるが、今どき、動物園の猿にも付けない名前を、臆面なく云つてのける。

伊予は、委員長の顔しか見えない。

それ以外は、怖くてみたくなかった。だが、確認しないわけにもいかない。

恐る恐る見れば、女の顔からは余裕が消え、気の毒なほどに興奮している。

「でも、こゝまで、舐められたんじゃあ、しょうがねえよな？ なあ？」

二回ほど伊予の顔を見て確認する。が、もちろんうなずけるわけではない。

女は己の制服の胸元に手をつ突つ込むと、中から短い棒を取り出した。手に持ったそれを振ると、先が伸び、伸縮式の特種警棒だと解る。

あれで殴られたら痛いんだろうなあと云うのが、伊予の感想だった。

迫った危機に、呑気に感想を付けている場合ではない。

謝つても許してもらえない気がするし、ここまで怒らせると、財布の中身をすべて差し出しても、駄目な気がする。

そして伊予の知る委員長は、謝らないし、小銭以上の金は出さない気がする。

つまり、八方塞がり。

非力な伊予に残った手段は、神頼みだけ。

誰でもよいから、伊予と委員長を救ってもらいたい。

目を瞑り、胸に手を当て祈りを捧げる。

『ななな、何をしているんですか！ そ、そ、それ以上の、ぼぼぼ、暴力は、許しません！』

——誰でもよいと願つたが、実は誰でもよいというわけではない。

「ああん、このあたしに文句をつけるなんて、いい度胸だ——な？」

女が振り返るが、そこには誰もいない。

女が視線をこちらに戻すと、その後方、校舎の影から、顔だけが出てくる。その顔は、よく見知った物。

伊予と委員長のクラスメート。

クラス全員をいじめている、恐ろしい女生徒。

——誰でも良いと願ったけど、なんで最悪な人選をしてくれる。

次からは具体的に注文をつけて願うことにしようと、伊予は中々に罰当たりな決心をした。